

銀河英雄伝説 ヤン艦隊日誌追補  
編 未来へのリンク

白詰草

銀英伝 原作本編2〜4巻ころのヤン艦隊の人々の毎日を描くサイドストーリー集です。前作 ヤン艦隊日誌の追補編ですが、読まなくても問題はありませぬ。未  
来へ続くような、あるいはそうではないような小短編集です。筆者に軍事的知識は  
皆無ですので、それっぽい台詞は雰囲気流してください。オリジナルの人物は、  
サブキャラとしてのみ登場します。この小説は「らいとすたっふ2004ルール」  
に基づいて作成されています。平成25年1月19日より、この話の未来編にあたる  
『銀河英雄伝説 仮定未来クロニクル』の投稿を開始しました。※この小説は、す  
びばる小説部にも同じ名称で投稿をしています。なお、閑話については、すびばる  
小説部、P i x i vに投稿したものに加筆修正をしたものを掲載しています。

# 目次

第1話	ノーコンプレックス・ノーライフ	1
第2話	トライアンプのプロフェッサー	21
	チヨイスカード	21
	ハートのAのトライアンプ	33
第3話	Home、Sweet Home。	44
第4話	So What?	59
第5話	日は中天を過ぎ、黄昏はいまだ	77
	魔術師のカルテ	77
	刀と鞘	88
	閑話 撃墜王の教え	100
第6話	食卓に並べたものは	105

記憶と愛	105
美味と義務	119
第7話 女王からの葬送曲	129
第8話 黄昏に飛び立つ	145
巣立つ雛鳥	145
蝙蝠のダイアローグ	160
さらば、梟の眠り	178
第9話 女帝と女王	189
黄金樹の墓碑銘	189
女王陛下に紅茶を二杯	204
余話 ティータイムの接遇研修	215
最終話 星を墜とす者	235
Longest March	235

番外編

L o n l i n e s M a r c h . . . . .

H e a d s o r T a i l s ? . . . . .

R o s e C o l o r . . . . .

命の水——ウイスケ・ベサ—— . . . . .



## 第1話 ノーコンプレックス・ノーライフ

原作2巻、クーデター鎮圧後から終了直前の頃の話です。当作品は銀河英雄伝説原作に準拠しているため、アスターテ会戦時、ヤンと共にパトロクロスにいたのは、ラオ大佐（当時少佐）です。

---

銀河帝国の宿将たる、ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ上級大将が亡命をしてきた。帝国内での大規模な内乱——リップシュタット戦役——の貴族連合軍の敗者として。頼り、身柄を預けたのは、同盟軍のイゼルローン要塞司令官であるヤン・ウェンリー大将。

ヤンは、父親ほども年上のメルカッツに穏やかに告げた。

「なんにせよ、ヤン・ウェンリーがお引き受けします。ご心配なさらずに」

その声には、寄る辺を失くした帝国の軍人をも安堵させる響きがあった。

1 さて、ヤン司令官が請け負っても、部下の疑念はそうそう薄れるものではない。

スパイではないか、と考えるのはいたって自然だ。だが、この黒髪の大將閣下ときたら、真正正銘のスパイだったバグダッシュを、いつの間にか艦隊の一員に加えてしまっている。こっちも常識人のムライ参謀長にとって、相当に頭の痛いことであつた。だが、ムライはまだいい。ヤン司令官以下、彼らヤン艦隊はクーデターの後始末でハイネセンに留まっている。

一方、この珍客を迎えているのは司令官代理に任命されたキャゼル又少將だ。彼は、超光速通信の彼方の後輩に対して、詰問と苦言の飛礫つがひを投げつけた。

「ヤン司令官。いったいどうするおつもりか。

閣下より、高位の敵將をどうやって麾下きかに加えられるのか、伺いたいですな」  
敬語の行間に冷気が漂う。後ろで聞いていた正副参謀長は、司令官の頼りない肩が、びくりと竦められるのを見た。通話画面のキャゼル又は、後輩の童顔が困ったような笑顔を作るのを眇めた目で見詰める。ヤンは、薄茶色の視線の槍に、黒髪をかき混ぜながら抗弁を試みる。

「まあ、昨今では少ないが、決して前例のないことではないでしょう。

将官級の亡命者はね。ジークマイスター提督とか」

最後の人名を告げる頃には、司令官の笑顔はいつもの穏やかなものに戻っていた。ヤンの正面と背後で、表情を動かした者がいる。通話の相手と大男の副参謀長だった。

「……懐かしい名前だな」

「ええ、古い例ですが、彼は中将待遇で同盟軍に所属していました。」

メルカッツ提督も降格させていただくことになりますから、その例を参考にすればいいかと」

「まったく」

キャゼル又は言いさすと、目がしらを揉みしだいた。言いたいことは山ほどあるが、どうしてお前の記憶力は、いらない所で役に立つのかと小一時間説教してやりたい。美女に成長したエル・ファシルの美少女より、エコニアの捕虜の爺さまの言葉のほうを覚えているなんてどうにかしている。

だが、この場合は有益なアドバイスであった。法律面がクリアになれば、いくらでもやりようはある。メルカッツと副官の人件費など、彼に匹敵する提督を育てるための経費の前には微々たるものだ。

ややあって、キャゼル又は口を開いた。

「了解した。法務士官らに調査をさせよう。

イゼルローンに配属するように働きかけるといふことでよろしいか」

「帝国との最前線に立たせるのは酷なことではあるでしょうが、

彼の能力はイゼルローンにとって、願ってもないものです。

キャゼル又事務監、よろしく頼みます」

「ああ。しかし、帝国は昔の帝国ならず、のようだ。

メルカツ提督にとつて、酷とばかりは言い切れんかもしれん」

黒い瞳に疑問を浮かべる後輩に、キャゼル又は伝えた。

「帝国にも複雑な事情があるようだ。後で旗艦の方に報告書を送る。

目を通していただきたい」

つまりは、この回線で伝えるのは適さないということだった。ただ一艦隊でクーデター鎮圧を成功させたヤン。その功績に、統合作戦本部長代行が嫉妬を募らせないはずがなく、どんな妨害をするかわかったものではない。先輩の危惧を知ってか知らずか、ヤンは素直に頷いた。

「お手数をおかけしますが、どうかよろしく」

キャゼルヌからの通信を終了して、一つ息を吐く。溜息の度に幸せが逃げるとい  
うのは、さてどこの言い伝えだったか。ヤンに一点曇りなく軍人稼業が楽しかった  
記憶はない。ただ、一番それに近いのは、歴史学徒の真似ごとで没頭できた、エコ  
ニア騒乱の後からマスジッド空港の大みそかまでの間だと思う。歴史とは、人の心  
の綾なす織物だと知り、国が違うからといって人が抱く想いに差はないことを痛感  
した、九年前の冬。

もう九年、まだ九年。随分と時が流れ、あるいはあまり経っていない気がする  
が。当時、帝国と同盟の戦争は、ずっと続くのだと思っていた。しかし、今はどう  
だ。歴史が時に生み出す天才が、新たな輝きを放っている。この若き恒星は、古び  
た星を狂わせ、地上には疾風と波濤を起こしている。その余波ですら同盟は沈没寸  
前だ。

メルカツ提督は、ヤンに命の恩人の記憶を甦らせた。あの人は亡命という方法  
もとれたのに、43年間も捕虜の身に甘んじた。故郷とつながっている思いがする  
からと言って。帰りたくはない、だが懐かしく捨てられない故郷。

メルカツは、その帝国で上級大将にまで栄達している。更には妻子を置いてきた。でも亡命を選ぶのだ。その事情の複雑さは言われずとも察することができる。ヤンはベレーを脱いで、髪をかき混ぜた。ベレーを被りなおして、正副参謀長に向き直る。

「では、キャゼル又事務監からの報告書を持って、皆で検討をするでしょう。ただ、私はメルカツ提督を信頼してもいいと思うんだ。

年配で、しかも貴族出身の軍高官だ。本来、環境の激変を最も嫌うタイプじゃないかな。

彼ほどの功績があるならば、ローエングラム侯に許しを請えば、麾下に加えられる可能性も高い」

「なるほど、たしかにケーフェンヒラーのじいさんもそうでしたね。

ムライ参謀長、覚えていらっしやいますか。

同盟市民として遇すると伝えた時に、喜ぶどころか本気で迷惑そうでした。ちゃんと、大佐級の恩給も出るって話だったのに」

かつてのエコニア捕虜収容所の少佐と大尉の言い分を、タナトス星系管区の元参

事官は厳しい表情で聞いていたが、元捕虜の老大佐のくだりに、ふと眉間のこわばりを解いた。

「ふむ、筋のとおった話ではありませんな。

リップシュタット戦役は、貴族連合軍の大敗に終わったそうですが、

メルカッツ提督の方で、ローエングラム候を拒むなにかがあるのかも知れません」  
「ああ、貴重な情報だと思うよ。

帝国の将官らの為人ひととなりをよくご存じだろうからね。

グリーンヒル大尉、報告書の到着を確認したら、艦隊の将官を招集する。

連絡と調整を頼んだよ」

「はい、閣下」

きびきびと返事をする、美貌の副官を正副参謀長は痛ましげに見やった。軍事クーデターの首謀者、ドワイト・グリーンヒルの娘。それは一生彼女について回るだろう。ヤンの下で、父親を討つ。彼女を解任しないというのはそういうことだった。だが、フレデリカ・グリーンヒルは副官の座に留まった。

彼女の上官は、クーデターを鎮圧し、その計画そのものがローエングラム候の

使<sup>し</sup>喚<sup>そう</sup>によるものだと喝破した。そして、それは正鵠を射ていた。

エル・ファシルで民間人を見捨てて逃亡し、ヤン中尉を『エル・ファシルの英雄』となさしめた男。アーサー・リンチが、腹話術の人形であったのだ。自由惑星同盟の再生という、本人らにとっては崇高な目標を掲げていたクーデター首謀者らを驚愕させ、仲間割れさせるには充分だっただろう。首謀者も扇動者も死亡。首謀者は自殺と伝えられたが、銃創は額の中央にあったということだった。まず間違いない、そういうことだろう。

クーデターの後始末の激務が、彼女にとっても救いになっていくかもしれない。贖罪の思いもあるだろう。ヤン・ウェンリーの功績と名声が盾となっている。もう一枚の盾は同盟軍そのものだ。グリーンヒル大将ほどの高官の暴走を防げなかったのか、という世論への対応で精一杯である。

まだ23歳の娘を矢面に立たせたらどう転ぶかわからない。スタジアムの虐殺の犠牲となった、反戦派議員のジェシカ・エドワーズのように。彼女は、父も婚約者も軍人であった。軍にとって身内同然である。アスターテの敗戦で、婚約者のジャン・ロベール・ラップを失ったことにより、強硬な反戦派となった。軍事クーデ

ターに法の権利に基づいて、毅然と抗議を行った。彼女の正論に報いたのは、クーデター一派の暴虐による死である。国民からの同盟軍の信望は地に墜ちた。ただひとつ、ヤン艦隊を除いて。

ヤン・ウエンリーの許、三千光年彼方のイゼルローン要塞にいてもらうのが一番いい。距離の防壁は、なにも帝国との間に立ち塞がるだけではない。低俗なメディア、被害者らや世論の声、あるいは政界の勧誘からも。

茫洋とした司令官は、案外そこまで考えているのかもしれない。エドワーズ議員は彼の旧友だった。彼女の訃報に接したとき、挙動は平常そのものながら、その日一日サングラスを外さなかった。クーデターに加担した第11艦隊を撃破し、アルテミス之首飾りを破壊した。空疎な式典で、肝心な時に逃げ隠れていたトリュニヒト最高評議委員長と握手を交わすようなパフォーマンスをやらざるを得なかった。本当に、彼の心身が心配されてならない。

ムライなどからすると、有能極まりないグリーンヒル大尉はまだしも、帝国の名将などという厄介者を受け入れなくてもよいだろうに思うのだ。同盟軍の艦隊司令官は、現在は3人しかいない。下位者を昇格させるにも、候補者は片手に余る。

だが、それでもだ。昨日まで数十年にわたって敵だった者の指揮に、やすやすと兵士が従うものではない。ヤン艦隊にメルカッツを受け入れるとなると、また会議と演習の日々が続くのだ。これだけ内憂外患でガタガタになった同盟軍に、きちんと予算がつくのかは定かではないが。

「まったく、困ったものだ」

嘆息しか出てこないムライである。パトリチェフも何とも取り成しようがない。よくキャゼルヌ事務監が了解したものだ。だが、事務監の気持ちも痛いほどにわかっている。今年1月に着任して以来、肝心の司令官が一月置きに出張と出撃を繰り返している。最初の不在は一月半、今回は5ヶ月だ。職名の残りの半分を果たせるころには、不在は半年になるだろう。今回は、旗艦ヒューペリオンの回線に決裁文書を送信できるため、何とかなっているようだったが。

メルカッツ上級大将の用兵は、堅実で隙なく重厚で、正統派そのものだ。戦術の教科書に手本として採用してもよいほどだった。正統派というのは、それを上回る正攻法でしか凌駕りょうがすることが出来ない。ヤン艦隊の分艦隊指揮官らはそれぞれに個性があるが、堅実にして重厚という表現ができる者はいない。

艦隊運用の名手だが、攻撃の勘所がやや劣るため、総合評価では平凡なエドウィン・フィッシャー。彼はヤン艦隊全体の艦隊運用が主たる役割で、分艦隊は言わば彼の護衛である。

躍動的な艦隊運動と集中砲火戦術を併せ持つが、いまだ成長途上のダスティ・アツテンボロー。分艦隊レベルの指揮は申し分ないが、大兵力の運用は未知数だ。

もう一人、猛将タイプのグエン・バン・ヒューがいる。ただ、彼の用兵は突破力が身上であり、それ以外には多くを期待してはいけない。

ここに、半世紀近い戦歴を持つ名将が加わってくれるというのだ。ヤンやキャゼルヌが手を尽くす価値は確かにあった。

だが、この知らせを聞いて、別の感想を抱いた者もいるのだった。

「やっぱりな。そうなると思ったんだよ」

鉄灰色の髪とそばかすの頬をした青年提督はぼやいて、分艦隊旗艦のトリグラフからイゼルローンに通信を入れた。その様子を、面白そうに観察する灰褐色の髪と瞳の美丈夫。ヤンからの会議の招集を聞いて、なんとも言えない表情になったアツテンボローにくっついて来たのだ。

アッテンボローは、イゼルローンの通信オペレーターに、キャゼルヌへの取次ぎを頼んだ。程なくして、件の事務監が姿を現した。シェーンコップの案に相違して、思ったよりも機嫌がいい。それを見た青灰色の目が、一気に半眼に変化した。「アッテンボロー少将、何の用事だ」

「キャゼルヌ事務監、いや先輩。どうしてヤン先輩を止めてくれなかったんですか」  
「俺はあくまで代理に過ぎんから、

こんな重要な案件を司令官に伝達しないわけにはいかんだろうが」

薄茶色の目が、策士の笑みを浮かべている。アッテンボローは舌打ちをして腕組みした。

「謀りましたね。そりゃね、イゼルローンにとっちゃ喉から手が出るほど欲しい人材ですがね。

何も、先輩と直接通話をさせなくってもよかったですでしょう。

あの人の一番弱いタイプじゃないですか」

シェーンコップは片眉を上げた。おやおや、こいつは面白そうだ。ヤン・ウェンリーの弱点といったところか。そはいかに？

「だが、あいつにとっての弱点でもあるが、相手にとってもそうなると思うぞ」

この言葉に、アッテンボローは顔を手で覆って呻いた。

「まったくもう、ファザコンの年上おやじキラーなんだから……」

「なんだ、つまらん」

思わず呟くシェーンコップである。それは新たな弱点の暴露ではない。みんな察してはいても、口には出さなかっただけだ。日常レベルでは善良で見え透いたところのある人だから、見え見えというやつである。

だが、年下キラーというのも付け加えるべきだろうな。この後輩提督や、被保護者もそうだが、ポプランやリンツらまで懐いている。あの美しい大尉どのも年下だった。

キャゼル又は鼻を鳴らして一蹴した。

「ふん、おまえが言うな。過剰に反発するのも立派なコンプレックスだ。」

親父さんと姉さんがたと、ファザコンにシスコンの連合軍だろうが」

「その、キャゼル又少将、もう少しお手柔らかになさっていただけませんか」

柄にもなく、シェーンコップはとりなしてみた。そばかすの青年提督が、傍らの

デスクに取り繕らんばかりに脱力しているの。

「何も恥じるもんでもないだろうに。頭の上がらぬ肉親や友人がいない人間なんておらんだろう。」

ヤンはまあ、変り種の部類だが、好意を寄せられて悪い気持ちにはならんだろうからな。

俺の娘なんぞ、ちょっと前まではパパのお嫁さんになるんだと言ってくれていたんだが、

5歳過ぎるともういかんなあ……。上にも下にも好きな相手がいるようだし……」  
この切れ者には珍しく、なんだか話が明後日の方向にずれている。取りなす言葉も思いつかないので、シェーンコップは咳払いをしてみた。参謀長のような威厳には欠けるが、何とか二人の少将の注意を向けるのに成功する。

「お二人とも、話題を戻しましょう。キャゼルヌ少将はメルカッツ提督の受け入れに賛成、

アッテンボロー少将は反対と、そういうことですかな」

「別に反対じゃない。確かに素晴らしい戦力増強だ。だが……」

かの名将は、帝国のローエングラム侯、同盟政府上層部、どちらにとっても難癖のきっかけになりうる。これ以上、火種を抱えんでもいいではないか。先輩を慮る後輩に、そのまた先輩はきっぱりと告げた。

「だが、あちらさんのご指名だぞ。せつかく来てくれると言うのなら、逃してたまるか。

非力な事務屋に、こんな最前線をいつまでも任せておくもんじゃない。

帝国の内戦が終了したということは、事によったら来るぞ。あの金髪美形がな」  
独身主義者と快樂主義者は表情を引き締めた。

「来ますかね」

「まともなら、国内をまとめて同盟とは講和を図るがね。

だが、メルカッツ提督から話を聞く限り、あんまりまともだとは思えんね。

確かに若いが、あれは青二才じゃない。嬢子こぞうという表現は悪意があるが正確だな」  
この毒舌家にかかれば、かの眩い美貌の天才も一刀両断である。

「才気に溢れているのはいいが、自分より劣る者を見下すところがあるそうだ。

というと、周囲のほぼ全員ってことさ。そんな坊やが15歳で少尉だったそうだ

からな」

「心温まる話ですな。さぞや麗しい上官と部下の信頼関係が育ったことでしょうよ」  
シェーンコップが含ませた皮肉の量も、なかなかのものであった。叩き上げの職業軍人にとっては、姉の威光を借りた陶器人形に見えただろう。貴族出身者にとっては、更にそれが顕著であったに違いない。

「まあ、俺ら士官学校卒者も似たりよったりだが15歳で少尉とはね……。  
中学生じゃありませんか」

「ああ、幼年学校卒からの叩き上げだな。それでも軍歴はまだ6年ってところか」  
「それで元帥ですか。そりゃ、年配者には堪らんでしょうね」

「ああ、ローエングラム候の麾下の人材は皆若い。最年長者でも四十を越えていないはずだ」

再び無言になるトリグラフ艦橋の二人だった。

「となると、あの金髪の坊やに引き摺られてしまおうとおっしゃいますか」  
シェーンコップの言葉に、キャゼル又は眉間を揉んだ。

「キルヒアイス提督に期待だな。」

若いながらに公正で温良で見識があつて、

彼がいなくてはここまで出世はできなかつたろうとのことだ」

「ああ、あの赤毛の坊やのほうですな。捕虜交換の時の」

キャゼルヌは頷いた。

「どうやら彼らの思いの根本は、絶世の佳人の奪還にあつたらしい。

姉が皇帝に召し上げられたから、取り返すために武力で

王朝を滅ぼすなんて普通の人間は考へんよ。

シスコンもここまでくれば天晴れというしかないな。

その道具として踊らされた同盟こそいい面の皮だがな」

「そんなに優しい姉がいるなんて、俺には信じられませんかね。

うちの連中はマクベスの魔女も同然です」

「ローエングラム候のは、姉というより母親だろうな」

「なお悪いですよ。マザコンじゃない男はいないんですよ。心理学者の話によると」

「ほお、小官もですか？」

色事師の言葉に、画面を隔てていた先輩と後輩は向き直つて、そっくりの笑みを

浮かべた。童話に出てくる、しましま模様の猫を思わせる。

「貴官の女性遍歴は、失われた母の面影を求めている、ってところじゃないのか」  
「そうそう。で、斜に構えているのも、ヤン先輩に構うのも望郷の念の変形だとか  
な」

シェーンコップは精神的には三步、肉体的にも一步半ほどよろめいた。とんだとばっちりだ。藪を突くといくらでも出てくるのが、心の問題というものである。

「まあ、当初の目的は果たせたんだから、ここらで矛を収めてくれるとありがたい  
んだが」

キャゼルヌの言葉に、アッテンボローは懐疑的だった。

「どうですかね。アスターテの会戦を見るに、好戦的な為人ひととなりのようですよ。

ラオから聞きました。ヤン先輩に電文が来たそうです。

『貴官の勇戦に敬意を表す。再戦の日まで壮健なれ』だったかな。

負けることに我慢がならないんじゃないかな。

先輩を負かすことを目標に、喧嘩をふっかけてくるかもしれないよ」

茶系の髪と目の所有者たちは、この不吉な予言にうんざりとした。

そして、あの赤毛で長身の好青年の良識を祈るのだった。

帝国暦488年10月。フェザーンを経由して入手した、銀河帝国の官報によってそれは碎かれる。ジークフリード・キルヒアイスの帝国元帥への昇格。軍務尚書、統帥本部総長、宇宙艦隊司令長官、帝国軍最高司令官代理、帝国宰相顧問の称号の授与。後者は生前にさかのぼってのものであった。

ヤン・ウェンリーは、生前に一度だけ見え、言葉を交わした青年を悼みながら、予感を新たにした。次は、疾風と怒濤が同盟に直接叩きつけられることを。その嵐の中に、軍曹に昇格した被保護者も漕ぎだしていかなければならないのだ。スパルタニアンの搭乗員として。いよいよ、少年の軍人志望に結論を出さないといけない。なった。

アッテンボローのすぐ上の姉は、ヤンと同年でもっとも彼と喧嘩をした仲だという。ダステイ少年の進路をめぐり、父と壮絶な闘争が行われた。強硬な大反対だった。母よりも上二人の姉よりも。結果、いまだに父と娘は冷戦状態である。父は歩み寄りたいのだが、凍土に炭素クリスタルの棘つき鉄線が巻かれているらしい。

『ああ弟よ 君を泣く 君死にたもうことなかれ』

この詩を残した詩人も姉だった。ヤンはユリアンの『兄』として『父』として同感だ。そして、ローエングラム候の姉上も同様に決まっている。キルヒアイス提督に対してもそうだったに違いない。いや、それ以上の感情があっても不思議ではない。ハンサムで背が高く、聡明で心優しいことが外見からもわかるような青年だった。女性だったら、恋人に望むだろう。夫としても父としても非の打ちどころがなかったであろう。

抱く想いは時を越えても不変なのに、なんと人間とは進歩のない生き物であろうか。幾多の愛情を踏みにじって、また戦いと死を生み出そうとしている。

『末に生まれし君なれば 親のなさはまさりしも 親は刃をにぎらせて

人を殺せとをしへしや 人を殺して死ねよとて 二十四までをそだてしや』

この詩よりも更に若い年齢で、失われた炎の髪と海色の瞳と、失われてしまうかもしれない亜麻色の髪とダークブラウンの瞳にそっと目を閉じる。この碌でもない予感が外れることを祈って。

## 第2話 トライアンプのプロフェッサー

チヨイスカード

トライアンプ 名《英 *t r i u m p h*》

①勝利、凱旋。

②カードマジックの一種。カードの中から観客が1枚を選び、カードを記憶する。

それをカード束の中に戻し、表裏がバラバラになるようにシャッフルする。

マジシャンの合図で全てが裏向きに揃い、最初に選んだカードのみ表を向く。

21日)

開発者はダイ・バーノン（1894年6月11日～1992年8月

アムリッツアの会戦以降、同盟軍は熟練兵の不足に悩んできた。それが、先日の救国軍事会議によるクーデターにより、更に深刻になった。ようやく訓練で一人前になったヤン艦隊から、またしても熟練兵が引き抜かれて補充は新兵と警備隊からの異動者だ。敗残兵はいない。なにしろヤン艦隊の敵だったからだ。

呆れて物も言えないムライ参謀長と、民主共和制の建前に従って政府首脳部への文句を述べるパトリチェフ副参謀長。その様子に目を丸くする客員提督メルカッツと副官のシュナイダーである。せっかく、ヤンが引き受けた名将を死蔵するのはもったいない。司令部は、さっさと彼らを員数に加えて動き始める。

悟りきった表情のフィッシャー副司令官は、アッテンボロー、グエン・バン・ヒューの分艦隊指揮官らを集めて、早くも演習計画の作成に入った。前回の異動の際に定めたマニュアルや陣形プログラムは非常に有用なものであった。クーデターの際の会戦で、それがさらに洗練された。不幸なことに。

「何で、みんな私には声を掛けないんだろう」

黒髪の司令官は、決裁書類を前にぼそりと呟いた。文書が回ってくるので、部らの動きは把握できる。艦隊演習に司令官が蚊帳の外に置かれるなんて、どうしたことか。

「皆、遠慮をしているのですよ。閣下の姿が見えなくなるぐらいの書類の山ではね」少将に昇進したシェーンコップが返答する。彼もまた、その書類の山を増量させに来た輩なのだったが。

「だったら、演習計画書をもっと簡潔にしてもらいたいものだね。」

「ずらずら書けばいいってもんじゃない。精々、3ページ程度にまとめてくれ」シェーンコップは顎をさすった。簡にして要を得た文書を作成するのは、実は大変なのである。書類仕事の苦手な者ほど文章が増量し、結局何を言いたいんだ、というものになってしまう。ヤンの決裁が必要な文書の七割は、キャゼルヌ事務監という鬼の門番を通過する必要がある。ここで相当量が『意味が不明瞭。数字と論拠をきっちりと詰める』と返却されてくる。

だが、演習計画書においてはその部門長からの報告になる。司令部のムライヤ分艦隊のアッテンボローは流石によく練られたものを出してくる。グエン・バン・

ヒューはかなり怪しい。フィツシャーの下で修行中だ。さて、シェーンコップも同様である。彼の場合はキャゼルヌかヤンか、三歳上か下のどちらかを師と仰ぐしかない。どちらも手強い頭脳派だが、毒舌に糖衣がかかっているほうを選ぶのは人情というものだ。

「では、閣下その極意を小官にご教示いただきたいものですな」

「こういうものは、直感的にわかるような骨子でいいのさ」

元作戦参謀は、シェーンコップが提出した計画書にその場で朱を入れて返してくれた。時系列順に作戦行動を分解し、作戦人員を当てはめて、さらに簡素な図を入れて。ドラマの台本やコンテを思わせるものだったが、要塞防御部門一同が唸るほど分りやすい。しかも、見事に3ページに収まっている。

「こりゃ、凄いもんですね」

ブルームハルトは感嘆しきりだった。

「隊長じゃない、少将がうんうん唸ってた作文はなんだったんでしょう」

褪せた麦藁色の髪の現連隊長は、部下の濃褐色の頭を小突いた。まったくもってそのとおり、だが、それを言っちゃあお終いだ。気の毒に、不敵不遜な上官の灰褐

色の目がえらく遠くを見ている。

「本当にな……だが、おまえらにもヤン司令官からの宿題が出たぞ」

ようやくいつもの調子を取り戻し、ニヒルな笑みを浮かべる美丈夫。

「部門長は全体の骨子を作成し、それが実現できるように部下に指示を行う。

この骨子の行間を埋めて、作戦が成立するようにするのは、部下の役割なんだぞうだ」

黒髪の有能な怠け者は、有能な働き者の部下にこう言い添えていた。

「貴官は今までの戦闘で、連隊の先頭に立ってやってきたんだろうね。

なにしろ、貴官は勇猛だし聡明で結構勤勉だ。

大抵のことは自分でやったほうが早いかもしれない。

連隊クラスならそれでもいいが、要塞防御部門を一人で背負うと大変だよ。

適任な部下に役割を分担させてしまったほうがいい。

貴官はそれをチェックし、必要なら助言をし、改善を促すんだ。それが将官の役割だよ。

その一方で、部下の仕事に対する責任を負うのもね。

これはキャゼルヌ事務監の得意分野だから、詳しいことは彼から教えてもらってくれ」

もてあまし者の薔薇の騎士連隊<sup>ローゼンリッター</sup>。白兵戦という過酷な境遇から、将官まで出世したのはシェーンコップまでの十三代でわずか三人。その三分の二は、将官の地位に適應できず泣かず飛ばずで終わった。ヤンのように、現場職から管理職への移行方法を教えてくれる上官などいなかっただろう。だが、入門初級編が終了したら、エキスパートにしごかれるとも言っている。思わず片眉を上げるシェーンコップに、ヤンは穏やかな表情で言った。

「なにしろ、士官学校時代に、組織工学論文で大企業にスカウトされたそうだからね」

「それはそれは……」

気が乗らぬ様子の白兵戦の勇者に、ヤンは言葉を継いだ。

「大丈夫さ。こんな私でもそれなりに仕立ててくれたんだから。」

いい先生だと思うよ。そりゃもちろん厳しいがね。

アッテンボロー少将も得意教科なんだが、やはりレベルが違うよ」

「彼も得意教科ですか。これは意外ですな」

「嫌いな先生に揚げ足を取られまいとしてのことだがね。」

「さてよ、反面教師としては、案外いい先生なのか。」

「階級的にはもうありえないだろうがなあ」

「教師は誰です」

「ドーソン大将さ」

「またドーソンか。この士官学校トリオは、ほとほと彼との悪縁があるようだった。」

「でも、貴官がもっと昇進したり、違う部署に異動するかもしれないからね。」

「覚えておいて損はない。メルカッツ提督らにも同盟方式を伝達するから、」

「貴官も同席するように。通訳をお願いするよ、シェーンコップ少将。」

「いくら同盟語が理解できても、微妙な部分は母国語で説明したほうがいいだろうからね」

「いや、本当に人遣いがお上手だ。思わず敬礼をして司令官執務室を後にするシェーンコップだった。これは天性か後天性か定かではないが、社長の息子というのも伊達ではない。」

要塞防御部のオフィスに戻り、司令官からの命を伝えると肉体派の面々は怯んだ。「じゃあ、少将の命令が実現できるように、俺たちが考えないといけないってことですか」

「そういうことになるな」

自分を指差して、大口を開けたブルームハルトと、澄ました顔のシェーンコップの様子に、薔薇の騎士の中でも、頭脳派のクラフトが怜悯な表情で拳手をする。

「なんだ、クラフト？」

「少将、それって逆に難しいですよ。」

これらの作戦パートのリーダーを決めて、さらに部下を割り振って、作戦のフェーズを作らせろっておっしゃってるわけですよね。

で、少将にそれを統合してチェックしろってことなんですけど」

美丈夫の灰褐色の眼が、発言者をじっと見詰めた。感心したように片眉を上げて。

「よし、おまえがこの作戦参謀役だ。俺の補佐で作戦パートを作る。」

それが出来次第、リンツとブルームハルトでパートリーダーを決める。

そうだ、オペレーター部門からも人を出してもらわないとな。

ブルームハルト、そっちもお前が声を掛けておけ」

さっそく、仕事を割り振ったのは中々に見事であった。だが、貧乏くじを引いた言いだしっぺが二人。クラフトの方は性に合った役割であるが、ブルームハルトはとぼっちりの色合いが濃い。彼はリンツにこぼした。

「うう、おれがなんでまた」

「階級から言って当然だろ。一応おまえがナンバー3だからな」

「その、おれは切ったはったでここまで出世したようなもんですよ。こういうの、苦手なんです」

「そりゃ、俺らはみんなそうさ。だがな、佐官ってのは書類仕事もやらんとならぬい。

俺だってそうだ。少将の文章から、こいつが見える人もいるんだが、ちっとはその頭脳を分けて欲しいよな」

「ああ、あの長い文章からすね……」

厚さ5ミリが、3ページに減量されたのはいっそ感動的なものであった。

「確かにね、見えてるもんが違うんでしょかね」

「ドールトン事件の際の、到着予定前の晩にな。

見えてる星座が違うから、明日には絶対にハイネセンに着かないと言ったんだよ、ヤン提督」

ブルームハルトが眉を寄せた。

「はあ？」

「いや、この人はなにを言っているんだろうと思ったが、実際にそのとおりになったんだ。

なんでも親父さんが交易商人で、ガキの頃からあっちこっちの星を行き来していたんだそうだ。

ハイネセンに着くころには、読む本がなくなって星ばかり見ていた、そのどことも違うってな」

童顔の部下の眉が、ますます寄った。

「ヘンですよ、それ」

「ああ、俺も思った。でも面白い人だよ。同盟も帝国も人間の心に大差はない。

美しく健康な金持ちに生まれて、元気で長生きしたい。死ぬのは誰もおっかな

いって。

あの金髪の坊やの人格も、そんなに俺らとも違わないだろうとね」

「そうですかねえ。ヤン提督の人格がぶっとんでるだけじゃないんですか？

あと、頭のほうも……」

ちらりと、添削された計画書を見る美丈夫を振り返る。敬愛する上官だって、頭脳は相当に明晰なのだ。文章にするのが不得意なだけで。

「まあ、そいつもそのとおりだとは思いますが、世の中には言っではいけないことがあつてな。

おまえもちょっとは黙ってる。鳴いた雉が撃たれるんだぜ？」

とまあ、こんな一幕もあったが、文書を出してくるのは進捗している証拠でもある。提出してこない部署にこそ、問題が潜んでいるのだった。

第一空戦隊長オリビエ・ポプランのコンピュータに、秋色の髪と瞳の美女からのメールが届いていた。ついに来てしまったか。彼は、一瞬天井を仰ぎ、ままよと開封した。万が一ぐらいは、デートのお誘いということもありうる。だが、やはり世の中甘くはなかった。

「うわ、やっぱりだ」

三機ユニットによる迎撃戦術構築の進捗状況の報告を求める。下記日程のいずれかに出頭すべし。

イゼルローン要塞駐留艦隊司令官 大将 ヤン・ウェンリー

下記日程とはいっても、あさつての14時から16時までの30分刻みのいずれかである。ここぞという時、結構鬼だ。とりあえず、問題はまとめておこう。名探偵に追及される犯人の心理を味わうのは一回でいい。しかし、この四回の枠のどこを選んだものか。それもまた試されている気がする。でも、催促されている時点でなあ……とりあえず、ぎりぎりまで粘ろうと、最終の時間枠にチェックして返信した。ポプランもまた、色事の好敵手同様、苦手な書類仕事に励むのだった。

ハートのAのトライアンプ

カット&スプレッド……オープン！

「オリビエ・ポプラン少佐、参りました」

「忙しいところをすまないね。最近の様子はどうだい。空戦隊もかなり人員が入れ替わったろう」

その一人は、この司令官の被保護者だ。亜麻色の髪つまの少年は、パイロットとして非凡な素質があった。だが、そんな者はほんの一滴つまみとっていい。そうではないその他大勢、これを何とかすべく考案したのが、三機でユニットを組み、敵一機に当たる方式だ。

しかし、スパルタニアンは通常の艦艇より遥かに複雑で変則的な飛行をする。新兵にこの隊形飛行を導入すると、友軍機の誤射や、逆に敵機への攻撃に対する逡巡

などが頻発した。改善できる方法はないか。ヤン司令官の助言により、艦隊運用の名手、フィッシャー副司令官の協力を得て、新たな隊形モデルを構築し、これは当初は上々のものに思えた。しかし、また新たな壁にぶち当たっているのだった。

「はい、それもあります、三機ユニットによる迎撃には、問題点があります」  
「どんな問題かい」

黒い視線が先を雄弁に促す。

「同盟や帝国の旗艦や標準戦艦の艦載機数はほぼ同数です。」

敵一機にこちらの三機が張り付きますと、当然手不足になります」

「うん、そうだろうね。艦隊指揮官にとっても悩ましい問題だよ」

肩を竦める黒髪の名将に、ポプランは疑問をぶつけてみた。

「ヤン提督、提督はどうしていらっしやるんです。こういう場合は」

「我々は、艦隊運用でそれを何とかするんだがね。」

敵の配置を予測しての各個撃破ができるなら一番さ。アスターテやドーリア星域のようにね」

そういうと、冷めて渋くなった紅茶を飲んだような表情になって、髪をかき回す。

「あまり適切な喩えではないな、これは。

無理なら陣形によって、敵兵力に偏差を設けるように対応しているんだよ。

こいつは、アスターテで私が出た手段だがね。

数で互角か劣勢なら、相手が戦力を十全に発揮できないようにする。

後背から襲う、側面を狙う、それに応じて陣形は変わる。

ただ、これは格闘戦ドッグファイトになる戦闘艇には向かないかな」

困ったような顔で、頬づえをつく司令官の前に、ポプランは乾いた笑いを漏らした。

「いや、それもお見通しでしたか。なかなか対処の妙案がないことまで」

「まあ、後は発想を変えることだろうね」

ポプランの方も明るい褐色の髪をかきむしった。

「かなり練ったつもりだったんですけどね」

「いや、運用案そのものはこれでいいと思う。これ以上のもはなかなか作れないよ。

貴官はよくやってくれているさ。

だがね、ポプラン少佐。この運用案の元々の目的はなんだい？」

「へ、そりゃ、新兵の訓練が追いつかないから、技能の劣勢を数でカバーするためです」

「そうだったね。それが主たる目的だ。

こんなに、熟練兵がごろごろ入れ替わるような状況では、スパルタニアの操縦のような

個人技の名手は育ちにくいだろう。だから、多対一の構図を作るとするのは正しい考えだ。

でも、それに固執するあまりに劣勢になるのは本末転倒というものさ。

最終的にパイロットとして一人立ちするための過程なのだからね」

目的の為の手段が、主客転倒しつつあることを、黒髪の魔術師はやんわりと指摘した。

「本当に貴官は優しい、いいリーダーだと思う。

しかし、貴官らがいくら訓練しても、全てのパイロットが生還できるわけではないだろう」

不帰還者名簿に彼の家族、ユリアン・ミンツも加わることになるかもしれない。それを承知して、なおこの人はポプランに伝えるのだ。より生還者を増やすべく。

「用兵家というのは犠牲を織り込んで、選択と集中を行うんだ。

技能に優れた者は、最初から君たちエースの候補として育成する。

そうではない者も、実戦を潜りぬけて実力がつけば、先頭集団に昇格してもらおう。昇格したり、戦死した者の後釜となった者が、隊列の中で円滑に役割を引き継ぐ、そのための方法と位置付けたほうがいいかも知れないよ」

それは決して無駄にはならない。空戦隊全体の集団行動の質の向上につながるし、友軍機との位置取りを叩きこまれば、敵機に対しても優勢に立てる。

「ですが」

口ごもる若き撃墜王<sup>エース</sup>に、同じくらい若々しい外見の司令官は表情を緩めた。「だがね、これは対艦載機の場合ということも忘れてはいけないよ。

そうそうあっては困るんだが、イゼルローン攻防時にはその限りじゃない。

宙港からスパルタニアンが出撃すれば、量的優位は確保できるからね。

だから基本訓練としても、作戦行動としても極めて有用だ。

特に、要塞砲台との連携が生きてくるんだよ。

簡略化した機動を補佐できるし、それゆえに砲台の誤射も減るだろう」

「あ、そうか、そう言えばそうですね。要は考え方次第なのか」

とまあ、ここまでではよかった。だが、その後がよろしくない。

「このように状況に依じて、高度な柔軟性を維持するのさ」

「それって、行き当たりばったりともいいますよね!？」

そう反論すると、黒い目がまじまじと、ポプランの緑の目を見た。

「うん、実はそうなんだよ。まったく、ちょっと聞いただけの貴官にも判断できるのに」

ヤンはなにやら呪詛を呟いたようだった。

「とにかく、理性的な相手ならば予測もつくんだが……」

何をやらかすかわからない相手には、行き当たりばったりに対応せざるを得ない。それが、味方でお偉いさんだというのが、何よりも困るし忌々しい。黒髪の上官が口には出さない言葉を、ポプランは察した。だが、それも言っちゃあお終いなのだった。

このようにして、宇宙暦797年の秋から冬は過ぎていった。辺塞にしばしの平穏が漂う。

ある日、ヤンは副官に一つの依頼をした。以前、通信衛星を作成したチームリーダーを呼び出してほしい。呼び出された民間通信企業からの兵役従事者は、崇拜する英雄を前に凍結寸前に緊張した。ヤンは、自分の虚名に苦笑すると、青年技師に一つの指令を出した。女王に呪いを掛けようと思うんだ。君の信頼のおけるメンバーを集めてほしい。彼ら以外には他言はしないように。頼んだよ。予想が外れたら恥ずかしいからねと。風の水底で、密やかにあるプロジェクトが進行を始めた。悪の魔法使いにふさわしい、魅了と服従の呪文が紡ぎだされようとしていた。

宇宙暦798年の新年パーティーが終わった三週間後、アッテンボロー少将率いる2200隻の分艦隊とほぼ同数の帝国艦隊がイゼルローン回廊で衝突する。この中には訓練中のユリアン・ミンツ軍曹が含まれている。少年の初陣は華々しいものだった。ワルキューレ三機を撃墜、巡航艦一隻を完全破壊。その豊かな天稟を披露した。この遭遇戦は、ヤン率いる艦隊本体が援護に駆けつけ、帝国軍の退却で幕を閉じた。

宇宙暦798年3月9日。国防委員長ネグロポンティより、イゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官ヤン・ウェンリー大将に、査問会への出頭命令。

同年4月10日。戦艦ヒスパニオラを中心とした哨戒グループが、イゼルローン回廊内で大質量物体のワープアウトを感知。質量は約四十兆トン。イゼルローン要塞よりも二回りほど小さい、人工天体要塞の来襲。

急を告げるイゼルローンで、薔薇の騎士連隊長とハートの撃墜王は、胸中で同じ相手に言葉を投げかけていた。ヤン提督、あの金髪の坊やは、あなたが評価していたほどには理性的な人間じゃないみたいですよ。良くも悪くもガキなんだ。一見凄いが、いい大人なら思いつかない作戦だ。失敗した時のことを考えるなら、到底できるもんじゃないし、今やる必要はないだろうに。こっちはガタガタだが、あっちだって相当の無理なんじゃないのか。しかもよりによって、ヤン提督が不在の折に。

だが、いいことが一つだけあった。これで、あの人が戻ってくる。政府上層部に愛想を尽かして辞表を叩きつけ、後任者がドーソン大将などという最悪の事態だけにはならない。たったの三週間の辛抱だ。

それはまた、イゼルローン要塞の人員全ての思いであった。虚空の女王の許へ、魔術師が帰還することを。その間の幾多の危機を、イゼルローンの全員が一丸となって乗り越えた。主砲同士の撃ちあいに始まり、白兵戦による帝国兵降下の阻止、スパルタニアンと要塞砲台との連携攻撃。三機ユニット攻撃が初めて導入され、多大な戦果をもたらした。特筆すべきは、初戦未帰投者の減少である。

その白眉は、客員提督メルカッツによる駐留艦隊指揮。宙港を守り抜いたことにより、イゼルローンは制宙権を維持しつづけた。これが、ヤン・ウェンリーを出迎える花道となり、魔術の舞台となる。彼の被保護者は、帝国軍の動きから師父の帰還を見抜いた。

三週間後、援軍を率いて帰還したヤン・ウェンリーは、出迎えのメルカッツらと連携して帝国艦隊を撃破。敗北を悟ったケンプが、イゼルローンへと航行を開始する。羽ばたく禿鷲の来襲。しかし、これはヤンの思う壺であった。アルテミス之首飾りを氷の船で壊した彼は、その弱点をも熟知していた。

ガイエスブルク要塞の通常航行エンジンただ一基への集中砲火。数百隻の主砲が一点に集中する。降り注ぐ光の箭や。さらに、もう一閃。流星雨が一点に降り注ぐか

のように幻想的なほどに美しいが、それは恐るべき効果を生んだ。直径40キロの要塞は無軌道に回転する独楽こまと化し、多数の帝国軍の艦艇を巻き込んだ。ヤン艦隊司令部の心血を注いできた、砲撃訓練の結実でもあった。

そこに撃ち込まれる、虚空の女王の雷いかづちを纏まとった肘鉄。これがガイエスブルクの致命傷となった。彼女の寵愛は、故国からその身を奪い籠絡した、黒髪の魔術師にあつたのである。

一万六千隻の帝国遠征軍は、わずか二十分の一以下にまで撃破された。その中にはヤン・ウェンリーへの雪辱に燃える、ナイトハルト・ミュラーの姿があつた。四本のろっ骨骨折を始めとした満身創痍の身で、それでも彼の指揮があつてこそ、700隻あまりの生還がなつたのであつた。

それを追撃しようとした、アラルコン少将とグエン少将は戦死。帝国の双壁率いる援軍によるものだった。彼らは遠征軍を救出すると、完璧な離脱を行い、ヤンを感嘆させる。

全軍に帰還命令を出し、ユリアンには紅茶を一杯頼む。少年が席を外した際に、メルカツツから今回の殊勲者が彼であつたことを聞いた。いよいよ、決断の時が

きたか。命令をしてでも止めさせたい。だが、それはメルカッツの言うように、民主主義の精神に背くのであった。何やら、頭が痛くなってきたヤンだった。それから、立て続けにくしゃみをした。

「誰かが私の噂話をしているのかな」

たしかに、その頃に彼の首を巡って、ミッターマイヤーとロイエンタールが穏やかならぬ会話をしていたのだが。実は、純然たる風邪の前駆症状であった。療養と称して引きこもったヤンが、被保護者の志望に対して下した決断は、歴史をつなぐ環の一つとなったのだった。

ダイ・バーノン氏は、世界中のマジシャンに『プロフェッサー』として尊敬され、偉大なるマジシャンである。

## 第3話 Home, Sweet Home。

ヤン艦隊特別顧問の話になります。

ゲストアドミラル  
客員提督メルカッツ中将と、その副官シュナイダー大尉のイゼルローンにおける生活は穏やかに始まった。言葉も社会の仕組みも全く違う敵国。そこに亡命した時には、どんな境遇が待っているのかと、それを勧めたシュナイダーの方が戦々恐々としていた。

同盟軍でも穏和な良識派と声望の高い、ヤン・ウエンリー大将を頼ったのはいいが、彼が評判とは異なる人格であったら。同胞と敵国人を同等に遇するものなど極少数だ。だが、超光速通信の画面で対面した若き名將は、メルカッツに敬意を込めた穏やかな対応をし、彼らの身元を引き受けることを請け負ってくれた。ご心配なさらずに、との言葉を添えて。

その言葉のとおり、イゼルローンでの受け入れ態勢は、メルカッツやシュナイ

ダーへの配慮の行きとどいたものだった。上官は中将、副官は大尉待遇で遇する。人事や福利厚生、その他の手続きについては、説明役キャゼルヌ少将、通訳係シェーンコップ少将という、豪華な顔触れによるものだった。同盟軍の命令書や報告書の形式など、重要なものが含まれている。名のとおりの客ではなく、オブザーバーとして仲間に入れるということだった。敬して遠ざけるのではなく、本当に戦力として渴望されているということでもあった。

同胞たる貴族に脅迫を受け、長年守り暮らした故国を逃れ、辿りついた敵国にこそ居場所がある。大いなる皮肉だった。その長である黒髪黒目の青年は、メルカッツに敬意を払い、意見を尊重して、父親ほども年長の名将として立てた。シュナイダーとしては、貴族連中と比較して嘆息せざるを得ない。もし、この若々しい司令官ほどの人物が貴族連合にいたら、そもそもリップシュタット戦役は起こらなかつたであろう。

だが、彼らの平穏は長く続かなかつた。宇宙暦798年、帝国暦ならば489年1月22日。イゼルローン回廊内で、2200隻のヤン艦隊分艦隊と、ほぼ同数の帝国軍艦隊による遭遇戦。これは、ヤンが本隊を率いて援軍として出動したため、

帝国軍の退却という形で幕を閉じる。

ヤンの旗艦に同乗していたメルカッツは、亡命の意味を噛みしめた。故国が敵国へと変じること。この場にヤンが搭乗を勧めたのは、彼がイゼルローンに残留する場合に生じる疑念を、逸らすためだということにはわかっている。しかし、先日まで自分が搭乗していたのと同形の艦艇が撃破されるのを見て、平静ではいられない。搭乗者は、すべてローエングラム候、いや公の部下なのだろうが。

銀河帝国は、名はそのままだ大きく変貌した。実質的にはもはやローエングラム朝である。こうなつては、傀儡かいらいとして玉座に据えられた幼帝エルウィン・ヨーゼフ二世の身が案じられてならない。ローエングラム公ラインハルトに処刑されたりヒテンラーデ候クラウスは、少なくとも皇室を敬っていた。フリードリヒ四世こうしの後嗣として、まだ七歳の男児を据えたのも、大帝ルドルフの男子相続の遺訓を尊重した面がある。

先帝の子は、二人の皇女のみが成人を迎えて生存するにとどまり、彼女たちの降嫁先は当の貴族連合の盟主、ブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム候であった。皇帝の血を引くのは彼らの娘、双方一人ずつだ。

一方、エルウィン・ヨーゼフは成人後に逝去した皇太子ルートヴィヒの遺児で、直系の男孫。女帝とは実質的な王朝の交代だから、リヒテンラーデ候はゴールデンバウム朝を守ろうとしたのである。その国務尚書亡き後、若い皇帝に愛情や教育が注がれているとは思えなかった。

メルカッツが、ラインハルトの動向に気を揉んでも、得られる情報は少ない。イゼルローン回廊の帝国側出口付近に設置された通信衛星が、時折超光速通信の断片を拾ってくるのみ。もともと帝国のメディアは国营だし、いかようにでも報道を支配できる。

ヤンが、フェザーン商人の友人のパイプから拾ってくる情報にも、目ぼしいものはなかった。以前は、貴族資本の株式市場の動向で、ある程度帝国国内の状況も掴めたのだが、門閥貴族の解体で、重工業などのほとんどが国营化されてしまった。株主は国なので市場に出回らない。こうなると、敏腕のキャゼルヌや情報参謀のバグダッシュをもつてしてもお手上げである。

「メルカッツ提督も、ご家族のことがご心配でしょう。」

フェザーンを経由して、なんとか連絡をつけることはできませんか？」

ヤンの提案に、シュナイダーは身構えかけた。諜報網作成の打診かと思ったのだ。「ご家族も心配をなさっているでしょう。それに経済的な問題もあります。」

こちらに呼び寄せられてはと申し上げることはできませんが、送金なりなんなりは

お考えになってもよいのではないのでしょうか。たぶん、扶養控除も適応されますし」

これに二人は目を丸くした。この智将の提案が、給与に関するもののだとは。

「ああ、扶養控除を馬鹿にしてはいけませんよ。」

私もユリアンが軍属になった時に、税金の上がりっぷりに仰天したものです。

ただ、銀行を含めた貴族資本が国営化されましたから、

メルカッツ提督の資産が無事なのか心配になりました」

「こちらこそ、行きとどいたご配慮に感謝をしなくては。」

貴族連合に加わる際に、妻には財産処分については指示をしておいたつもりですが、

こうも大きく変わってしまいますと、下手に連絡すれば累が及ぶかも知れませんが、

「そうですか……ご無事だといいいのですが」

「幸いに、家内の実家はマリィンドルフ伯領でした。そちらに戻るように伝えてあります」

この言葉に、ヤンは黒い頭を傾げた。同盟の将帥が帝国貴族に疎いのも当然だ。シュナイダーが補足する。

「ローエングラム候の陣営に加わった貴族です。」

マリィンドルフ伯は、温厚で見識ある人物で、令嬢は美しく、稀に見る才女だそうですね。

この令嬢の提案だということですが」

「なるほどねえ……」

ヤンは、行儀悪く髪をかき回しかけ、年長者の前だということに気がついて、ばつの悪そうな顔をした。

「新たな風ですね。若いからしがらみがない。

ですが、娘の提案を受け入れるマリィンドルフ伯も、柔軟な方のようにですね。

お話の為人ひととなりでは、むしろ貴族連合に入りそうなものでしょう」

このわずかな断片から、そう指摘する黒髪の青年は、やはり卓越した分析能力の持ち主だった。マリーンドルフ伯令嬢ヒルデガルドが、女性でありながら大学に進学し、短髪にパンツスタイルを好むという話に、ヤンは困った表情になった。

「その女性が、帝国女性の最先端にあたるのですね」

「そうなりますな。こちらでは、逆に戸惑うことでしょうが」

メルカツツらも同様である。イゼルローンを行き来する軍服姿の女性軍人。司令官の副官にしてからが、妙齢の美女である。その多くがスラックスで颯爽と闊歩している。彼らの受け入れに当たって、事務部門の色々な女性士官が様々な手続きをしてくれたが、いずれも明晰で歯切れのよい口調で話す。かといって、男性的なわけではない。

「同盟は国の成り立ちからして人員不足でしたから、男女同権は最初から掲げていたんです。

戦争が長く続いて、知識職や行政には女性が多いですよ。女性は兵役が志願制なんです。

一見同権に反しているようですが、妊娠出産は時期が限られます。多産の奨励も

伝統でしてね。

ここにいる女性は、大体が職業軍人なのですよ」

「女性が望んで軍隊にですか」

シュナイダーにとっては予想外である。帝国の女性は、良き妻良き母であることが求められるからだ。

「まあ、衣食住の保障という点で、なかなか軍人に勝る商売はありません。

私のように、親を亡くして食うに困った者も多いものですからね。

後方職ですと、戦死する心配もそうはありませんし」

この言葉に、メルカッツの眠たげな眼までがさらに丸くなった。エル・ファシルの、アスターテの、イゼルローンの英雄。軍事クレーターから国を救った、同盟軍の良心。そう評されるヤン・ウェンリーの口から出たのが『食うに困る』とは。

恐る恐る、軍人になった理由を質問したシュナイダーに、返ってきたのがこの返答だ。

「いや、私はもともと歴史学者になりたかったのですよ。

大学に進学するつもりで、願書も書き終えていました。

その時に、交易商人だった父が事故死しましてね。船ごと財産もばあです。

結局、学資がなくなりまして、無料で歴史を学べる学校が士官学校だったので。当時は戦史研究科があったんですよ。

私が3年次に進級する際に、廃科になってしまいました。

それで、別の科に転科しまして、すったもんだあって現在に至ります。

本当に無料ほど高価たかいものはありませんねえ」

何をかいわんや、である。ああ、これが目が点になるといふことかと、シユナイダーは場違いな感想を抱いた。無言になってしまった元帝国軍人らに、ヤンは赤面しつつ言葉を継いだ。

「ええとですね。その、本題からずれてしまっただけで申し訳ありません。

やはり経済的に困窮するのは大変なことです。

フェザーンには伝手もありますし、お考えになってみてください」

ぺこりと頭を下げてベレーを落っことし、再び赤面する大将閣下を、複雑な表情で見守る二人だった。

ヤンが退出してから、メルカツツがぼつりと話した。

「巡り合わせとは不思議なものだな。

偶然がなければ、これほどの軍事的天才は一学徒だったのだろう」

「そうであったら、どうなっていたのか想像もつきませんね」

「少なくとも、我々にはいいいな。

シュナイダー少佐、卿に感謝する。確かに生きていてこそだ」

六十の坂を過ぎてからの亡命。どうなることかと思つたが、司令官の薫陶あつてか、思いのほか居心地がよかつた。

言語の壁も、シェーンコップ少将が梯子となつた。彼は帝国騎士とはいえ男爵家の末流で、一般の帝国語のみならず、貴族階級が理解できるように通訳ができる。それに、祖父母と一緒に亡命してきたため、年配者がわからないところがわかるのだ。これは意外な適材適所だつた。

キャゼルヌ少将の説明自体、簡潔明瞭なものだ。さらに、同盟の文書に簡単な帝  
国語訳のダイジェストがついていて、これもよくできている。同盟軍には、『武』が  
不足していたが、『文』を支える人材はなかなかのものであつた。

メルカッツらは、ゆっくりと自由惑星同盟について理解を深め、少しずつ地歩を

固めていった。艦隊演習にも参加をし、新兵を訓練する方法の洗練性、暴力による制裁を固く禁じているところに大いに感嘆した。

これが同盟軍全体ならば大したもののだが、ヤン艦隊だけの特色でしてね、とは通訳としてちゃっかり同行した美丈夫の弁である。

ヤン司令官が査問会に出頭して、一ヶ月後。ガイエスブルク要塞襲来。ワープアウトしてきた未詳物体がモニターに捉えられた時、メルカツツとシュナイダーは呼吸を忘れた。貴族連合の盟主ブラウンシュヴァイク公の拠点であった人工惑星要塞。それを同盟への来襲に使うというのは、もはや貴族など過去のものとして帝国内に宣言したも同然である。

禿鷲はげわしの城から、虚空の女王へ見舞われる、硬X線ビーム砲。雷神トウールハンマーの槌がそれに応射される。この主砲の一撃で、双方に数千人単位の死者が出た。メルカツツは、あの美貌の若者の変容を実感した。アスターテの会戦の際、敵に包囲されつつ状況で、同盟軍の連携の鈍さを見抜き、各個撃破に転じた天才。眩い黄金の髪と蒼氷色の瞳は、鋭気の輝きで満たされ、傍らの赤毛の青年がその鋭さを受け止めていた。あの時はヤン率いる同盟軍第二艦隊と、尾を食い合う蛇のような消耗戦に移行しそ

うになったが、それを嫌って軍を引いた。

だが、これはどうだ。要塞主砲の撃ち合いを続けたら、あの美青年が嫌った消耗戦そのものだ。もしも通信を入れてきたケンブ司令官の独断であるなら、人材の起用として正しくない。彼の麾下きかには、ロイエンタール、ミッターマイヤーという優れた将帥がいる。このような大規模な来襲をするなら、最良の人選であたるべきだし、リップシュタット戦役ではそうしていた。臣下の間の勢パワーバランス力調整の臭気がする。ローエングラム公に献策した者の意図であろう。これまでの四十年以上、末端ながらも貴族出身の軍人として、帝国軍にいたからこそわかる。

ガイエスブルクを使ったことといい、最初から成功に多くを期待していないのだ。これは、無用の師だいんき。だが、それで人が死ぬ。自分達を受け入れてくれた、魔術師の部下達が。そして、命令で動員された帝国の兵士たちも。ならば、自分はどうすべきか。かつての故国で今の敵国。もう、帰れることはあるまい。あの青白い新たな星は、旧いものを灼き尽して中天へと昇りつめるだろう。その中には、この新しい故国も含まれているのかもしれない。

ヤンの不在に、キャゼルヌ司令官代理が、慣れぬ指示を出している。シェーン

コップ少将は、自らの部下らの被害を分析しながらも、的確に対応をしている。メルカッツの意志は定まった。駐留艦隊を出撃させるタイミングを計りかねているキャゼルヌに、現在の役職名で呼び掛ける。

振り向いた司令官代理に、彼は口を開いた。息子ほどの亡命の先輩も、興味の色をあらわに視線を向ける。

「私に艦隊の指揮権を一時お貸し願いたい。もうすこし状況を楽にできると思うのですが」

額に汗を滲ませた、薄茶色の髪と目の事務の達人は、ややあってからメルカッツに応えた。

「お任せします。やっていただきましょう」

適材は適所へ。後輩のやり方を先輩も模倣した。幕僚らも賛同する。ヤンからメルカッツへ、メルカッツからヤンへの態度。それを見た者たちが、信を置くに半年間は充分な期間だった。

彼らの信頼に、亡命の客将は応えた。いや、ここがもう彼の居場所であった。イゼルローン要塞ではない、ヤン艦隊という名の家だ。家を荒らす輩への対処法は、

何人だろうと同じことだ。実力行使で追い返し、押し込もうとするたびに追い払う。メルカツツは、ヤンが帰還するまで、その役割を果たし続けた。魔術師の留守を守る、老獪ろうかいな竜の如く。

魔術師は帰還するやいなや、右手を一閃させて帝国艦隊を撃破し、返す一閃で禿鷲を叩き落とした。イゼルローンに、駐留艦隊に歓喜の声が沸き起こる。彼らに同調する自分を自覚しても、メルカツツは以前ほどの動揺はしなかった。

同盟の人々が、かくも長きにわたって帝国に抗し続けた理由。それは国、いや家を守るためだ。倒すべき叛徒として、同盟に剣を向け続けてきた自分は、迂闊にも今まで思い至らなかつた。彼らは皇帝の恩威にひれ伏さぬ輩ではなく、違う考えのもとで、苦難の末に新たな国を作り守ってきたのだ。だから、国と法と人を守るために戦う。

それゆえに、ヤン・ウェンリーは常勝ではなく不敗なのだ。彼にとって重要なのは、敵を倒すことではなく、味方と国民を守ることなのだから。

人間は、幾つになっても変わっていくものとみえる。故国の軍を破った黒髪の司令官に、彼の家族の進路に、軽口を叩けるぐらいには。生きていてこそ未来はある。

明日を重ねて、いつか天上ヴァルハラに行くまでに、どれほどの猶予か定かではないが。後でもう一度、忠実な副官に礼を言うのでしょうか。

大変な葛藤があったと思います。年をとると変化を嫌い、変化についていけなくなる。後でいい、明日があるとは思えなくなるから、短気で頑固になる。でも、ヤン・ファミリーに適応していった彼の柔軟性は、人は見掛けによらないものではないでしょうか。

## 第4話 So What?

Q 宇宙最強の台詞とは？

ガイエスブルク要塞の襲来を退けたものの、風邪による体調不良を訴えて、司令官のヤン・ウエンリーは療養と称して引っ込んでしまった。戦勝祝賀行事は主賓を欠いた状況で行われたが、出席したところでスピーチに費やす時間は二秒間である。キャゼルヌ事務監が代読したメッセージのほうに、普段より長いくらいであった。死者への追悼と、留守中の健闘に感謝をし、美辞麗句が削除された真情の籠ったものだった。式典の参加者は死者への追悼ののち、生を謳歌した。死者の分まで精一杯楽しむのも、生者の務めであるのだ。だが、祝祭の時間は短い。

それが終わってしまうと、イゼルローン要塞には厳しい後始末が残された。大きく分けるなら、駐留艦隊と要塞ハードウェアと人的被害の三点。

艦隊戦で、破損した艦艇の修理。出動した艦艇の点検整備。周辺の宙域に散らば

る、敵味方の残骸処理。これを片付けねば、演習や実戦どころか、物資の輸送にも差し支える。またはデブリとなって、イゼルローンをさらに傷つける恐れもある。ガイエスブルク要塞の主砲は、出力七億四千万メガワットの硬X線ビーム砲である。これには、イゼルローンの中和磁場も、四層に及ぶ堅牢な外壁も物の役に立たなかった。

そして、要塞主砲の爪痕よりも大物がある。ミュラー提督率いる艦隊から受けた、レーザー水爆ミサイルの直撃。直径二キロものクレーターが穿たれ、外縁部はリアス式海岸を思わせる複雑な形状の損傷となっている。

これらの直撃を受けたブロックの兵員は、主に熱と爆発、そして放射線により死亡。生存者を救出直後に周辺エリアを含めて封鎖、隔壁により遮断して空調を停止。要塞外郭のおかげで宇宙空間ほどではないが、零下数十度まで室温が下降し、冷凍庫状態となっているはずだ。彼らの遺体を収容するのは、残留放射能が漸減するのを待つしかない。

しかし、一万人に迫る犠牲者であり、高濃度放射線対応の装備の稼働限界も2時間程度だ。作業が難航を極めるだろうことは、想像力が1グラムでもあればわか

る。そして、遺体自体が高レベルの放射線に汚染されている。火葬も埋葬もできない。最終的には、宇宙葬にするしかないのだった。

サイン製造機という通常業務に戻ったヤンは、キャゼルヌの言うがままにはいといと決裁した。それも多くは要塞事務監に任せきり。給料泥棒ぶりに、いつもはお小言を言う事務の達人が、特に何も言っていない。

「珍しいな……」

ユリアンの紅茶を味わいながら、ヤンは首を捻った。現在の状況の改善に、ヤンが出来ることはない。

せいぜい、責任は取るからよきに計らってくれと了承することだけだった。艦艇の修理や残骸処理は想像がつかなくはないが、直径2キロのクレーターの工事の設計書や仕様書、積算の数字を出されても見当もつかない。キャゼルヌのお眼鏡に適ったならば、進めてもらうしかないのだった。

死者の認定と昇進、遺族年金等の給付は、人事管理部にとっては定型業務。要塞内部の戦死者の収容は、放射能が減少するまで時期を待つことしかできない。こちらにも優先順位を割りふって、ゴーサインを出すしかない。戦争の名人は、事務の達

人の百分の一くらいしか日常業務には役立たないのである。

普段は、それに対してちくりと毒舌を言われるのだが。本当に珍しいこともあるものだ。ヤンは、艦艇の修理や点検で、同じく暇そうな後輩に疑問を述べてみた。普段は宙港の士官食堂を利用するアッテンボローだが、久々に司令部のほうを利用していたので。

ここには、将官用に個室も用意されている。そちらに席を移してのことだ。下っ端にとつて、食事の席にまで上役がいたらうっとおしい。そのために、士官専用という形で隔離する。なかでも将官は、最大級の目の上のたんこぶだ。特別扱いというのは、排除の一形態でもあった。

その一室に、同盟軍を代表する若手提督が二人。並べられた紅茶が二杯。先輩はコーヒーの匂いも嫌うので、後輩の方が譲ったのだ。その後輩に、ヤンは思ったことを切り出した。

「ガイエスブルクの襲来の後始末は、今まで以上に大変だと思うんだよ。

いつもだったら、サインだけしてる私に、文句の五つや六つ言ってくるだろ。

今回の留守中は特に大変だったから、余計とね。どうしたのかな、キャゼル又先

「輩」

「キャゼル又先輩は、本当に後方任務中心だったでしょう。」

「やっぱり、今回の襲来は相当にこたえたんだと思いますよ。」

主砲の応酬ごとに、双方数千人単位の戦死者が積み上げられるんですからね。

「やっぱり、思うところはあるでしょうね」

「ヤンは、ほろ苦い微笑で肩を竦めた。戦艦乗りの感覚は確かにおかしいのだろう。戦死者が一人なら要塞兵員の0.5パーセント、十万人でも5パーセント。生還確率的には上々なのだ。彼らの家族たちの嘆きを忘れることはできない。だが囚われていては司令官はできない。名将智将と呼ばれたところで、軍人はろくでなしがやる商売なのだ。」

「あれはどうしようもなかったよ。度肝を抜かれる方法だったけれど、戦略的には意義がないし、戦術的には明らかにまずい戦いだった。」

「でも、最悪よりは随分ましだよ。」

「私だったら、小惑星にでもワープエンジンをくつつけて、最初からこっちにぶつける。」

そして、新しい要塞を持ってきて、ここに据え直す。

その方法を取られたらどうしようもなかった。その幸運には感謝してるよ」

レダII号の中で副官にも披露した自論を、今度はアッテンボローに話す。そばかすの青年は、鉄灰色の頭をかきながら、恐るべき先輩を見やった。ケンプと名乗った司令官の苦し紛れの策を、最初にやると言っているのだ。一ダースの攻撃衛星を、同数の氷の船で打ち砕いた彼なら、むしろ当初から念頭にあったのだろう。あの混乱の状況で、すかさず弱点への攻撃指示を出してくるというのはそういうことだ。

「じゃあ、第七次攻略戦にはその案もあつたんですか」

「ああ。だが、なんで同盟がここを手に入れようとしてたか考えてみてくれ。

要塞として、食糧工場や兵器廠としての魅力があつたからさ。

壊してしまうのは簡単だがもったいない。

無傷で手に入れないと講和の取引材料にもできないよ。

金の卵を産むガチョウを手に入れようとして、ひき肉にするのは意味がないだらう」

アッテンボローは乾いた笑い声を上げ、ようやっと相槌を打った。

「あ、ああ、まあそうですね」

「でも、帝国にはもうその必要はない。

門閥貴族に分散していた権力と財力を、ローエングラム公が手中にしたからね。あの要塞も、もともとは大貴族の所有物だったそうさ。

技術は凄かったが、発想が普通で助かった。

金銭<sup>かね</sup>があるなら、イゼルローンもああいう風にしたところだけだね」

「先輩の発想が普通じゃないんですよ。お願いだからいい加減自覚してください」  
後輩は嘆いた。この人との付き合いもそろそろ13年になろうとしているが、温和で大人しげなくせに根っこに劇薬が潜んでいる。彼の匙加減で、スパイスにも猛毒にもなるのだった。

「なんだ、失礼な。考えるのと実行するのは全然違うじゃないか。

艦隊戦の行動限界はおおむね二週間といったところだが、

相手にも要塞があったから、こんなに長期の会戦になったんだ。

戦史上でも滅多にないことなんだよ。みんな、よく頑張ってくれた。

だから、キャゼル又先輩が負い目に感じる必要なんてないんだが」

アッテンボローは悄然と項垂れた。

「鈍いなあ、もう。キャゼル又先輩が一番堪えているのは、ヤン先輩に対してですよ」

指摘された方は、黒い目を丸く見開いた。

「は？ 私にかい。そりゃまたどうして」

「司令官の代理なんて、こりごりだっ言っていましたよ」

「ごもっともな言い分に、ヤンは黒髪を大雑把にかき混ぜた。査問会の嫌みに反発し、それ以来散髪を怠っているせいで、かなり長めになっている。軍人らしさの欠片もない。」

「そりゃまあ、私も悪いとは思ってるよ。」

要塞司令官とは名ばかりで、留守ばかりしていているからね」

「違いますよ。ヤン先輩が、いままでに何度も矢面に立ってきた、

その苦勞の何十分の一かをようやく思い知ったってこぼしてましたよ。

艦隊司令官の適性者が、150万分の一だということが改めてわかった。

俺には無理だつて。あの神経が特殊鋼ワイヤーのザイルみたいな人がですよ」

「やれやれ、おまえさん、そこまで言うか。」

今回は私なんて大したことはしていないのに、そんなに買い被ってもなんにも出ないぞ」

「そうですかね」

「そうだよ。みんな一丸となって抗戦したからこそ、焦って自滅したようなものさ。」

グエン提督とアラルコン提督を破ったのは、帝国の双壁の艦隊だった。

主力中の主力が、帝都から六千五百光年も離れたところに、

タイミングよくうろろしているかい？」

ヤンの示唆に、アッテンボローは肩を竦めた。

「ありえないですね。攻略軍への援軍だったわけだ。」

危ないところだったな。先輩の留守に、帝国の双壁じゃえらいことになってた」

うそ寒い表情になった後輩に、ヤンは自身の仮説を披露することにした。

「だがね、私が思うに、帝国の司令官の焦りの原因はそれじゃないかな。」

我々にはなく、自身の功に対してだ。

帝国の内戦の勝者は無論ローエングラム公だった。

迅速な圧勝だったが、部下らにとっては問題もある」

アッテンポローは慥然とした。

「どんな問題だっていうんですか。こっちまでさんざん引っ掻きまわしておいて」「手柄を立てそこねた者にとって、出世に段差がついたということでもあるんだよ。一番手柄は亡くなったキルヒアイス元帥だが、同率の二番手がその二人の上級大將。」

部下の間に出世の段差ができた、それを埋めるための出兵ではないかと、

メルカツ提督がおっしゃっていた。私も一部は同感だね」

「はあ!?! 冗談じゃない。本当だとしたら、迷惑千万ですよ」

色合いの異なる灰色の眉と眼を吊り上げる後輩に、ヤンは困った顔になった。

「私に言われても困るなあ。でも、今回はそのちぐはぐさに救われた。」

無論、私がいなくたって勝っていたと思うよ」

「無理ですよ。ヤン先輩でなければ、あんなでかぶつ、どう始末できませんでした?」

学生のころから齒がゆいのだが、この先輩は自己評価が低いのだ。歴史好きで、いろいろな人物のことを学んだせいかどうかは定かではないが。

「そりゃ多分、あっちが帰還したんじゃないか？

だったら、後始末が楽だったのになあ」

「そうとは限りませんよ。」

援軍に名将二人、嵩かさにかかって攻めてきたら負けていたのはこっちです」

「でも、ガイエスブルク要塞はイゼルローンより小さい。」

最初の一個艦隊に上乘せして、さらに二個艦隊の収容と補給はできないよ。

そうなると行動限界が通常の艦隊戦なみに下降する。

もうひとつ、彼我の間に自軍が四万隻もいると、あちらの主砲はそうそう使えなくなる。

だが、こっちは駐留艦隊を引っ込めて、主砲を撃てる。第6次までの再現だよ」  
膠着状態となった時に、あの見事な退却戦を演じたミッターマイヤー、ロイエントールの両提督はどう判断するだろうか。攻略軍の司令官のカール・グスタフ・ケンプは大将、援軍の二人は上級大将だ。やはり、上位者の判断を容れなくてはならないだろう。

無理な攻略に拘泥せず、きれいに退いた可能性が高い。むしろ、そうするための

人選ではなからうか。双璧の判断ならば、ローエングラム公も諾とするだろうし、国内にも名分が立つ。ヤンはそう付け加えて、消沈した表情で溜息をついた。

アッテンボローはヤンの分析に唸らされた。やはり本質的には戦略家であり、参謀なのだ。だが、ケンプらと一月近く矛を交えた者としては、素直に頷きたい。「ですがね、あっちの司令官は大分ねちっこい奴でしたよ。いかにも頑固そうなおっさんでね。」

援軍の名将にいいところ見せようと、ムキになったと思いますよ」

「格好をつけたがったら、要塞をぶつける策にはでなかったかもな。」

まあ、歴史のIFを数えたって不毛な話なんだが、グエン提督らの戦死は残念だよ。

残骸になってしまったあの要塞と艦隊にも、何百万人が乗っていたことか。

なあアッテンボロー、社会的、組織的な役割において、

その人物でなくてはできないことはほとんどない。

ローエングラム公のようなごく一部の例外を除いてね」

そういう人間が英雄と呼ばれる。だが、民主共和制は、英雄への依存を否定した

政治形態だ。ルドルフ・ゴールデンバウムを独裁者にしたのは、民衆が彼に依存したことだ。幼かったヤンの疑問に、父はそう答えた。以来、ヤンも折にふれて思い出し、考え続けている。

「その人物でなくてはならないのは、『彼』を取り巻く人々に対してだと思うよ。

どんな平凡な人間でも、その人の代わりはいない。

たとえローエンングラム公のような美貌の天才でも、代わりにはなれない。

階級も武勲も関係ない、誰かにとって唯一の存在なんだから」

黒い瞳が、アッテンボローをではないものを見詰めていた。ここではないどこか、今ではないいつかを。茫洋と遠いあの表情だった。彼は声を励まして、ことさらに反骨的に言い返す。

「ですが先輩、かといって俺たちがやられてやる義理もないですよ」

「アッテンボロー、それは居直り強盗の台詞だよ」

「それがどうしました？」

自称宇宙最強の台詞で切り返す。

「たしかにそうだ、私も同感だよ。戦死した同盟軍の将兵には責任を感じるが、

一方で、おまえさんやキャゼル又先輩、ユリアンたちが無事でよかったと思っ  
ている。

大きな声では言えないがね」

「それは俺もですよ。先輩が無事に戻ってきてくれてよかった」

まだ顔色が青白いし、穏やかな声にも掠れが残っていたが。

「あんな代物が襲ってきたら、帰ってくるしかないだろう。」

私の家があって、家族と友人達がいるんだから」

叩きつけるつもりで辞表の用意をしていたことは、ヤンの胸の内に秘さされてい  
る。何十年かのち、今より穏やかになった時代に笑い話として打ち明けるべきだろ  
うから。

「遠いところでその全部を喪うのは、人生に一回で充分だ」

ぼつりとした眩きに、士官学校からの後輩は痛ましい思いになった。エル・ファ  
シルの脱出行の後だった。エコニアから帰って来た彼に、父と進学で採めて以来、  
帰宅すれば喧嘩をする仲だと言った時に、『墓石に不平を鳴らすしかない』と応じ  
られたのは。

黙り込んでしまった後輩に、黒髪の先輩は苦笑を漏らした。

「なんだ、アッテンポロー。そんな顔をするなよ。」

今度はそんなことにはならなかった。それがすべてだよ。

そんな『もしも』にならないよう、留守のみんなが持てる力を出した。

だから今があるんじゃないか。過去ばかりが歴史じゃない。

現在を積み上げて、未来に至るから、今は過去になり歴史となって行くんだから」  
停滞していた帝国と同盟の関係が、奔流となって新たな歴史の大海に注がれよう  
としている。人は、川面の木の葉のように翻弄されるかもしれない。だが、足掻い  
て、抗って、逆らえば、新たな岸辺で芽吹き、根を下ろすものがあるだろう。

「先輩が歴史書をもつというなら、俺は歴史の証人になるとしますか」  
後輩の未来図に、ヤンはふと思いつくことがあった。

「そうだ、アッテンポロー、おまえも来年は三十だろう」

この指摘を受けたほうは、今までの会話の中で最大級の渋面を作った。

「そ、れ、が、どうしましたっ!？」

まったく悪気なく言ったヤンは、後輩の剣幕に口ごもりつつ呟いた。

「いや、おまえも退役者年金の受給対象になるんだなってことなんだが……。年金で準備して、本来の志望の道を歩むのもいいんじゃないか。」

ジャーナリストになりたかったんだろ。人類史上最強の武器の遣い手に」  
アッテンボローの剣幕は、速やかに軟化した。記憶力に非常にむらのあるヤンが、心に留めていてくれたとは。

「覚えていてくれたんですか」

「親の稼業を継ぎたいなんて羨ましいよ。その点、私は親不孝者さ。」

でも、あの子は親不孝になってくれればよかったのにな」

亜麻色の髪 of 被保護者の志望に、ずっと保護者は反対していた。当の本人が、その仕事に就いていて若くして栄達しているのだった。だが、最終的にヤンは少年の意志を尊重した。

「ついにOKしたんですね」

「軍人なんて、ろくな職業じゃないんだからって何度も言ったんだがね。」

だが、メルカッツ提督がおっしゃるように、

ユリアンが望むなら、その選択を阻む権利は誰にもないんだし。

それにさ、職業差別も憲章に違反するんだよなあ」

「はあ、あの客員提督ゲストアドミラルどのがねえ……」

貴族階級の帝国軍人、さぞやガチガチの専制主義者だと思っていたが。

「うん、意外だったよ。だが、これは自由惑星同盟の国是だ。

自分の選択に自分が責任を持つことは」

アッテンボローも頷く。まだすこし掠れた声が続いた。

「誰にも邪魔をすることはできないし、誰のせいにもできない。

個人の罪は、個人にのみ帰属する」

そこに潜む意味の厳しさ。アッテンボローは息を呑む思いで、黒い髪の上官を見詰めた。同盟軍史上最高の智将を。味方の死と、それ以上の敵の死に対する思いであつたろう。だがそれは、ほんの一瞬だけ姿を現した、名将の思考の切っ先。

青灰色の視線の中で、ヤンはいつもの眠たげな様子を取り戻す。

「でも、それが民主主義のいいところだと思う。

自分が自分を背負い、その人間の集合体であるところがね。

だから、失敗もやり直しも許される。

他の道を選び直すこともできる。生きている限りね」

「さすが、31歳は言うことが違いますね」

先輩から垣間見えたものに怯んだことを隠して、過ぎた誕生日のことを揶揄してやる。さっきのお返しだ。だが、アッテンボローの反撃は報われなかった。

「それがどうしたんだい。二十代のひよっ子にはわからないと思うね」  
まだまだこの人には敵わない。そう思うアッテンボローだった。

A 「それがどうした」

## 第5話 日は中天を過ぎ、黄昏はいまだ

### 魔術師のカルテ

司令官たるもの、健康でいるのも義務のうち。

森林公園のベンチの上で、いとも幸せそうな表情で寝息を立てる同盟軍史上最高の智将を前に、カスパー・リンツは腕組みをした。起こすのがためられるような様子だが、放っておくわけにはいかない。

「閣下、起きてください。また風邪を引きますよ」

ガイエスブルク要塞を撃破した直後から、司令官のヤン・ウエンリーは風邪による体調不良を訴えて、療養に入ってしまった。この時期に、とキャゼルヌ事務監は眉を吊り上げかけたが、同行した副官のグリーンヒル大尉から、一連の事情を聞くとその怒りを解かざるを得なかった。

ハイネセンに到着したヤンが、宙港から拘禁同然に連れ去られたこと。同行者たちから引き離され、随員のフレデリカらが掛け合っても全く回答がなく、捏造スキャンダルが三流紙の紙面を飾ったこと。宇宙艦隊司令官たるビュコックも、査問会のことを全く聞かされていなかったという。そんな状況で、一週間以上も査問という名の精神的な拷問を受けていたのだ。これはキャゼルヌとムライ、シェーンコップらの胸におさめられた。さもなくば、今度はイゼルローンで叛乱が起きかねない。

ここ二か月のヤンの行動は、絵に描いたような強行軍だった。イゼルローンからハイネセンまでが三週間。査問会に一週間あまり。その席上でガイエスブルク要塞の襲来の報を受け、イゼルローンへ逆戻り。帰路の途上で、援軍五千隻にイゼルローン宙域戦に考案した円環陣を伝達し、実践できるまでの準備をする。そして、帝国の遠征軍をガイエスブルクごと完膚なきまでに叩きのめした。

体調のひとつも崩そうというものである。多分に精神的な過労によるものだろう。イゼルローンの気候は、ハイネセンに準じて人工制御されている。ただし、寒暖を忠実に再現すると費用が莫大なものになるので、22度を挟んで上下5度ほど

の変動にとどまる。五月の下旬の気温は、ハイネセンと同じほど確かに快適ではあった。

だが、この森林公園は樹木が光を遮る分だけ気温が低い。ヤンのお気に入りのおベ  
ンチは、通路よりもやや奥まったところにあり、頭上にジャカラランダの枝が樹冠を  
作っている。つまりは薄暗い。昼休みに一寝入りしても、人工の日差しが臉を刺激  
しないほどだ。かなりひんやりとしていて、先日まで風邪をひいていた人が軍服一  
着でごろ寝をするのはお勧めできない。しかし、なんとも満ち足りた表情だった。  
あとで画帖に描き加えるべく、寝顔を観察しながら声をかけた。

「閣下、ヤン提督」

「ううん、あと五分、いや四分三十秒、四分十五秒でいいから……」

「往生際の悪い。そんなに口が回るなら、起きていらっしやるでしょう」

そしてリンツは首を捻った。一年ちょっと前にスケッチをしたときに比べて、顔  
の輪郭が小さくなっていて、全体的に小作りで、鋭角的なところのない顔立ちだ。  
顔の輪郭も卵型に近く、あまり男性的ではない。頬が削げたりするような痩せ方で  
はないため、これまで気がつかなかったが。

当時、この人の身長を176センチ、体重を63キロ前後と推測したが、あと1、2キロ下方修正しなくてはならない。ここ一年でそうなったのなら、由々しい問題だ。人間は簡単には痩せない。まして、三十歳過ぎると代謝が落ちて太りやすくなる。運動と食事制限の双方が必要で、この人と運動は縁遠いものだ。では、必要な栄養の摂取が不十分ということになる。ユリアン少年に伝えておくべきだろう。そして、グリーンヒル大尉らにも。

「あれ、リンツ大佐。もう昼休みは終わりかい？」

ベンチの上で、ようやく眼を開けて、眠そうな声が質問する。

「いえ、時間はまだ大丈夫です。ここは冷えますから、執務室の仮眠室をご利用なさってください」

そして、口には出せないが暗殺の危険を否定できない。だから、ヤンの昼寝場所にも赤外線監視装置が設けられ、近くにいたリンツが見回りかたがた迎えに来たのだ。この森林公園も、司令部以外の出入口は閉鎖している。クーデターで敵対し、撃破した第11艦隊の遺族や親族、友人がここにいないとは言い切れない。一ダースの一個艦隊があった時ならいざ知らず、この状態で恨みを優先するなど普通はあ

りえないが、政府上層部あたりが焚きつけかねないからだ。こんな時期にあんな査問会を開く連中だ。政治家者どもが、この黒髪の名将を将来の政敵と考えているのは間違いない。同盟が存亡の淵に立っているのに、権力闘争にうつつを抜かすのかと、やるせない思いになる。

そんなリントの懸念を知らず、寝たきり司令官は眠たげな渋い顔になった。

「あそこはざわざわして落ち着かないんだ」

「そういう問題ではありませんよ。」

こんなに肌寒いところで病み上がりの人が昼寝をなさらないでください」

「別に平気だよ。子供のころから慣れてるし」

宇宙船の室温は16。5度。これは同盟の官民標準だ。エネルギー効率を優先している。軍人も船乗りも、男性が多くて肌の露出が少ない商売だ。どちらも緊張によるアドレナリンの放出、それに伴う体温上昇と縁が切れないのも共通している。やや肌寒いぐらいでちょうどいい。女性には応えるようだが。

「何をおっしゃいます。顔色がよくないですよ。」

仮眠をとられるなら、ちゃんと温かくしてください」

ヤンは、しぶしぶといった様子で起き上がると、よっこらせと掛け声をつけて立ち上がった。年老いた猫のような緩慢さで、二十代半ばに見える容貌との不一致が甚だしい。いっそ本物の猫ならば、襟首を掴んで部屋まで連れて行けるのだが。眠気が去らないようで、どうにも足元が危なっかしい。いざとなったら担ぎ上げて運ぶべきか。リンツは本気で検討しだした。道中、倒れられても困るので、ヤンの左後に付いて歩き出す。

それをちらりと振り返る、黒い視線。

「リンツ大佐。貴官も昼の休憩時間中だろう。私に付き合わなくてもいいんだよ」

「この公園の最寄の出口は、司令部側ですから。お気になさらず」

「ここに休憩に来たんじゃなかったのかい？」

己が身の安全に無頓着な様子に、溜息を吐きたくなる。

「閣下を一人にするわけにはいきませんよ。ふらふらじゃありませんか。」

きちんと定期健診は受けられていらっしやいますか」

「ああ、ハイネセンに行く前に受けたよ」

というと、3ヶ月は前だ。

「ヤン提督。艦隊指揮官の健診は、原則隔月でしたよね。」

「お早めに受診をなさったほうが、身のためかと思いますが」

「一回くらい飛ばしたって、大した違いはないと思うんだがね」

「では、キャゼル又事務監のお叱りを受けてもいいんですか」

間接話法で促しても埒があかないので、直接話法でヤン艦隊の最高実力者の名前を出してみた。この指摘に、ぼつの悪そうな顔になって、黒髪をかき回す。

「貴官もユリアンの教師だった、ということか。教育環境を誤ったかな」

「なんだか、ますます元気がなくなってしまった司令官だった。リンツはそのまま司令官執務室まで同行し、居合わせたグリーンヒル大尉にも健診の件を伝えた。彼女は大いに恐縮して上官に詫びた。だが、ヤンは笑ってそれを受け流した。ハイネセンからの帰路が本来の健診時期である。受けられなくても仕方がない。そして、健康な時に受けるのが健康診断だ。風邪っぴきが受けても意味がないよと言って。」

「すぐさま、要塞の管理事務部に連絡が行き、担当者は一週間後にヤンの健康診断を予約してくれた。同盟軍の健診は、兵士は年一回、下士官は半年に一回、尉官以上は四半期に一回である。これを二百万人が行うのだ。いくら司令官といっても、

右から左に割り込みができるものではない。イゼルロンのメディカルセンターは機械化が進み、定型的な検査には医療従事者を要しない。しかし、受診者のスペースというものには限りがある。ヤンのようなお偉いさんを、一般兵に混ぜるわけにはいかないのだ。この一週間後の予約も、担当者の魔術的な調整があつてこそ。

ヤンの検査結果そのものには異常がなかった。しかし、この2年で体重が3キロ以上減っていた。BMI指数による標準体重は、身長176センチの場合は68キロだ。彼の場合は、一割少ない61。2キロ。

これをBMIに換算すると19。75。基準値は22で、普通体型の範囲内であるが、軍人として褒められた数値ではない。血色素、血球数、血液比重も正常内ながら低く、女性の標準を下回る。血圧も上が90台とこれまた低血圧の女性並み。

惨憺<sup>さんたん</sup>たる数値により、結局キャゼルヌ事務監からのお叱りを受けるヤン司令官だった。要するに、よく食べ、よく寝、よく運動しろ。運動不足のせいで、食も細いし、寝付きも悪いのだ。そう断じられたのである。

健診管理担当者は、衛生兵の資格を持つ女性大尉だった。グリーンヒル大尉よりも三歳年長だが、学年は四つ違いのため、学生時代は重ならない。事務部の友人の

一人である。

黒髪黒目にブロンズの肌。男性に劣らぬ長身に、幼いころから学んだ格闘技で鍛え抜かれた長い四肢。武骨な軍服の下からも、豊かな曲線美が声高に主張する。くつきりとした情熱的な顔立ちの美女で、さながら黒いダリアといったところか。外見のとおり、恋多き女性だった。

彼女は、もつと手っ取り早い運動があるんだけれどという声を胸中に留め、休憩の際に、森林公園を15分ほど散歩することを提案してくれた。グリーンヒル大尉も、随行してはどうでしょうと言いついて添えて。

ワルターやオリビエが得意とする運動に至らせるために、働きかけの機会を作ってやらねば。このペースで痩せていくと、3年後には司令官と副官の体重が逆転する。それは阻止しないと、女として色々辛い。年少の友人に対する友情であった。戦争が150年続く世界では、男女ともに長身で鍛えられた体格、彫が深く意志が強そうな美貌が好まれる。彼女や、シェーンコップ少将がその典型と言えよう。華奢でたおやかな美女の人気は不変であるが、細身で中性的な男性にはさほど人気がない。それが許されるのは少年までだ。ヤン司令官は磨けば光るんだから、せめ

てあと4、5キロは体重を戻してもらいたい。確かに私の方が2センチは高いけれど、7キロも軽いなんて軍人としてどうなの、というのが正直な意見だ。

純情な箱入り娘は、彼女の示唆に気がつかなかったようだった。その上官は、運動のアドバイスに困ったような顔をするのみだ。前途は遼遠であった。大尉は思った。虫がつかなきや、花も実を結ばない。お互いが好意を抱いていることはわかるのだが、上から下、下から上のいずれも、積極的に攻めているタイプではない。まったく焦れたいことだ。自分だったらさっさとモノにしている。彼女は、ヤンの健診結果と改善のアドバイスの最後を、こう締めくくった。

「ヤン閣下の健康改善にも、副官の果たす役割は大きいです。

グリーンヒル大尉、色々と頑張ってね」

ほんとに、見ていただけだと横取りされちゃうんだから。ヤン司令官を狙っている輩は、ごまんという。自分より体重の軽い男は標的外だから、彼女は参加する気はないが。男が狼だったら、女は牝豹。恋愛という戦場に油断は禁物だ。標的から目を離してはいけない。そのうち、しっかりと言い含めねば。

それを、切れ者の上官が非常に複雑な面持ちで見詰めていた。彼の妻の父も通っ

て来た道だろうが、まったく娘の親になり、若い女性の部下など持つものではない。こんな未来予想図は見たくはなかった。だが、彼女はいい仕事をした。二人で散歩でもなんでもして、上司部下以上の仲になってもらいたい。気分は、婚期を逃しつつある息子を持つ親である。

### 豆知識

BMIによる標準体重はメートル換算した身長 $\times$ 22。この身長 $\times$ 22で体重を割ってみよう。18～25が標準、30以上は肥満、17未満は痩せすぎ。

一般には身長—105が標準、—110が美容体重、—115が芸能体重とも言われている。

これを踏まえると、健康管理やキャラクター設定に非常に便利。

## 刀と鞘

美術品の『復元』等の用語は、銀河英雄伝説に記述のある歴史から、筆者が独自に設定したものです。

先輩やその部下が、密かに仕組んだ婚活に、気付いたか否かは定かではないが、ヤンは森林公園に行く時に、副官に声を掛けるようになった。フレデリカも都合が許す限り、というよりも無理やりにでも許させて、彼に随行するようにした。

司令部はこれを温かく見守った。ヤンの心身に好影響を与えるなら、昼の休憩ぐらい多少長くなっても構わない。ハイネセンからの帰還直後、風邪を理由に療養に入った時には、やつれ切っていたのだ。現在は決裁書類も事務監と副官に任せきりで、給料泥棒と化していたが、この二ヶ月の流れはひどかった。平穏な時期に、できるだけ体力をつけておいてもらいたいのだ。戦場で、ヤンの代わりはいない。しかし、その機会が訪れないことを切に願う。

生温く見守ったのは、イゼルローンの色事師たちである。全く、あんたらは七十過ぎの年寄りか。大人の男と女が、よりによって昼の散歩とは。互いの地位と立場はわかるが、ヤン提督も遠慮が過ぎる。

散歩の仕掛け人は、フレデリカの消極性に気を揉んだ。これで満足したら駄目。ポーカードだったら手札を配り終わっただけ。駆け引きして、役を揃えなきや上がりはない。もう、あんたからいっちゃいなさい。愛の言葉でも、場所へでもいいから！

進歩だと評価したのは士官学校の先輩後輩。あのヤンが、女性と二人で出掛けるだけでも快挙だ。ヤンの被保護者の胸中は複雑だった。さて、どちらに対する嫉妬と寂しさなのか、本人にも定かではなかったが。

周囲が思うほどには、ヤンも鈍感ではない。しかし、若い女性に喜ばれそうな話題には見当もつかない。フレデリカも、仕事以外のヤンの様子というと、ユリアンから伝え聞くくらいだ。会話もぽつりぽつりとしたものになる。

あの色事師二人は女性とどういふ会話をしているのやら。教えを乞うても真似できるとは思えないが。

「グリーンヒル大尉。悪いね、付き合わせて」

「いいえ、閣下。小官もこのところ運動不足でしたから。」

士官学校の頃に比べたら、訓練なんてしていませんものね」

「ああ、私なんて卒業以来縁を切ったよ。白兵戦も射撃も苦手科目だったしね。」

「だいたいね、戦艦に乗っている時に必要だとは思えないよ。」

相手の攻撃が命中したら、一卷の終わりだろう」

呟いて、黒い目を伏せる。ガイエスブルクの膨大な残骸処理も、大変な作業である。残存した戦艦にも、もはや生存者はいないだろう。中性子線等による被曝を考えると、資材としても回収することは不可能。艦隊演習の的にして、完全破壊するほかない。彼らの会話は、結局職務から離れられないのだった。

「ですが、地上戦やテロの際には必要と思いますわ」

「そうかもしれないね。」

捕虜交換の際の使者だった、キルヒアイス提督の死因はたぶんそれだと思う。

きっとローエングラム公を庇ってだろうね」

その言葉に、フレデリカは目を瞠った。

「どうして、そうお考えになりましたの」

「あの称号の追贈だよ。もしも生者が手にしていたら、位人臣を極めていただろう。彼の死にそこまで報いるような状況は、他に考えにくい。

リップシュタット戦役の末期、彼ほどの名將を戦死させるような相手が、貴族側にいたとは思えない。メルカッツ提督は、こちらに向かわれていたのだから」

あの赤毛の青年は、金髪の美貌の天才の片翼だった。

「あらんかぎりの名誉で飾っても、死者は決して戻らない。

彼を喪って、ローエングラム公は鞘を失くしてしまったのかな」

「鞘ですか？」

『「いい刀は鞘に入っている」。古いモノクロ映画の台詞さ。

グリーンヒル大尉は、ハイネセン国立博物館の日本刀を見たことがあるかい。

珍しく、復元でも新復元でもない、二千年以上昔の本物だよ」

「ええ、ありますわ」

フレデリカは頷いた。バーラト星系、またはその周辺星系出身者だったら、義務

教育の間に一回以上は訪れる。地球時代、統一政府成立後に復元されたものが『復元品』、同盟成立以降に復元されたものが『新復元品』。逃亡者の子孫たる同盟の遺産に、前者は少なく、後者が圧倒的に多い。更に希少なものが、13日間戦争から生き延びた『真品』だった。その一つが日本刀である。

特殊ガラスのケースに収められた、ゆるやかな弧を描く長大な刃<sup>やいば</sup>。黒銀の地に、白銀が寄せる波のようなコントラストを描く。武器としての凄味を持ちながら、あまりにも美しい。それを収める鞘も、黒漆に細かな装飾がなされた優美なものだった。フレデリカも、級友に混じって凝視した記憶がある。

「あれは大変に美しいけれど、切れ味も凄いそうだね」

「それは、見ただけでもわかります。怖いくらいに美しいというのは、ああいうものなのでしょうね」

「そうだね。反面、非常にデリケートな武器なんだ。

あの研ぎ澄まされた刃は、保護してやらないと欠けたり輝きが曇ってしまう。簡単に人を傷つけてしまうしね。だから、いい刀にはいい鞘が必要なんだ。

キルヒアイス提督は、彼の鞘だったように思うんだよ。

今回の襲来は、以前の彼なら絶対にやらなかった」

捕虜の男という、失敗しても懐の痛まぬ手先でもって、同盟軍を分裂させた手腕と、今回のガイエスブルク要塞の来襲には乖離かいりが大きい。巨艦大砲主義の最たるものであって、度肝を抜くと言う効果は認めるが、あの戦略の天才にはふさわしくない。戦場を知らない者の献策であるように思えるが、以前のラインハルトであれば一言の下に却下しただろう。

「そうでしょうか……」

彼の使囀しそによるクーデターで、フレデリカの父の名誉は地に墜ちた。あんな三流紙に、この人との捏造スキャンダルが踊るような有様だ。自分は、彼の邪魔になつていないだろうか。

「ああ、門閥貴族を解体して、彼らの蓄財を吐き出させたから一時的には潤うよ。だが、これは五百年分の貯蓄を解約したようなものさ。

これからの内政を考えるなら、無駄遣いなんてできない。

こんな攻撃に遣うなんて、キャゼル先輩なら青筋立てて怒るな、きつと」  
ヤンはくすりと笑った。帝国にも全く弱点がないわけではない。政治、経済の官

僚は、軍の人材に比べて豊かとはいえないだろう。ローエングラム公ラインハルトは戦略の天才だが、率いられる将兵全てが戦争に邁進まいしんはできないと思うのだが。しかし、天才ならではのドラスティックな策てを打ってくるかもしれない。この襲来もまた、それを隠す打ち上げ花火なのかも知れなかった。

「キャゼル又事務監なら、確かに怒られるでしょうね」

「知っているかい、大尉。吝嗇けちは平和が好きで、欲張りは戦争が好きなんだ。もったいないと、もつともつとの差なんだよ」

「でも、あのローエングラム公は、吝嗇には見えませんわ」

「うん。私もそう思う。でも、いわゆる欲張りにも見えないんだよ。」

親友を亡くしたという失敗を、功績で償おうとしているようにも思えるんだ」  
その口調は、優しいものだった。

「閣下は、ローエングラム公をどう思っているんです」

「敵としたら恐ろしいけれど、決して嫌うことはできないよ。」

彼は、歴史がごく稀に生み出す、奇蹟のような存在だからね。

あと百年遅くに生まれて、彼の研究者になりたかったな。

あの輝きは、同じ時代で直視するには、眩しすぎて目が痛くなるからね」

そうだったら、彼とは戦わないですんだ。そして、今回のように膨大な死をもたらすこともなかっただろう。戦争の才能、それは非常の才の極みであり、この時代に生まれて、数々の転換点を越えなければ見出されはしなかったろう。

「そうですね。あの輝きの欠片でも、父の眼を眩ませるには充分でした。

捕虜交換式典の時に、父に会おうとした時に多忙を理由に断られてしまいました。

あの時、私が会って話をしていたら、何かが違っていたのかもしれない」

ヘイゼルの瞳を翳らせるフレデリカに、ヤンは逡巡してから告げた。

「でも大尉。歴史にもしもはないんだ。父が死んで、歴史めあてに士官学校に行つて、

いやいや始めた軍人だけれど、この道を歩まなかったら、君にも皆にも出会えなかった。

もしも、時間をさかのぼれるとしても、もう父の船から降りなかったのとは思わないよ」

「閣下……」

フレデリカは息を呑んだ。この穏やかで優しい青年の、心の奥底にあったもの。エル・ファシルの脱出行の後、散々にメディアアが喧伝した、若き少佐の経歴。大学受験直前に交易船の事故で父が亡くなったという一行に秘められていたのは、父と乗組員という家族、家である船すべての喪失だ。

「それに、エル・ファシルから民間人を避難させるには、今も同じ方法しか考え付かない。

もう一度同じことをやるよ。私は、リンチ少将らよりも二百万人の民間人を選ぶ」  
穏やかな黒い目が、フレデリカを見詰めた。十年前とあまり変わらぬ、駆け出しの青年士官にしか見えない容貌。エル・ファシルの脱出行が成功しなければ、彼も自分もここにはいなかった。父の負の遺産に悩む以前に、帝国で農奴にされて、生きていくのかどうかも怪しい。比べ物にならないくらい劣悪な状況で、ローエンングラム公の姉と同様の境遇になっていたかもしれない。

でも、そのもしもはなかった。自分はここにおいて、憧れの人の部下になり、一緒に散歩までしている。

「申し訳ありません。浅はかなことを言いました」

ヤンは慌てて手を振った。

「その、だからね。」

起こったことは変えられないが、現在から未来を変えていくことはできると私は思っている。

そりゃ、努力したって限界はあるがね。

例えば、私が今からトレーニングしてもローゼンリッター薔薇の騎士の連中みたいにはなれないよ  
うに」

不器用な慰めに、フレデリカは微笑んだ。こんな贅沢なことがあるだろうか。奇蹟のヤンの、困った顔を独占できるだなんて。

「まあ、たしかにそうですね」

「いや、大尉。そこはお世辞でも『そんなことはありません』だろう……」

ちよつとショックを受けている上官であったが、部下としてはそんなに暑苦しくなってもらいたくない。温和で知的で、よく見るとハンサムな、童顔のこの人が一番いいのだった。

「でも天文学的確率で、閣下が白兵戦部隊に転向されたら、私は困ってしまいます

から」

「そうかい……」

万が一以下の確率を明言されるような、己が貧弱ぶりを反省すべきだろうか。それとも、初々しくて控えめだった彼女を朱に染めた、先輩やら後輩やら部下達を恨むべきか。彼は、自分をすっぱりと除外していた。自分が色素の源だとは思ってもみないのである。ヤンガリストアップした連中は、それをこそ指摘するだろうが。「今のまま、というのはお体が心配ですから、

キャゼルヌ少将のような、健康的な体型を当面の目標となさるべきでしょう」  
「あれはご夫人の賜物だよ」

多忙な事務職で、妻は料理上手。それこそ太りそうなものだが、彼は結婚以来理想体重を維持し続けている。オルタンス・キャゼルヌの手腕は、まさに魔法であった。料理が下手なフレデリカとしては、羨望しきりだ。

「私も料理を教えていただけどうかしら」

「きつと喜んで教えてくれるよ。さて、これでだいたい十五分か」

「ええ、閣下。ところで、今日はここで仮眠を取られるんですか。」

でしたら、なにか上に掛けるものをお持ちしますが」

「いや、いいよ。最近、あそこで寝てると、薔薇の騎士の面々が順番に起こしに来てね。

三日前はマシユンゴ、一昨日はブルームハルト、昨日はついにシェーンコップが来た。

寝起きに見るのは勘弁してほしい面々さ。まったく、ちゃんと仕事してるのか、あの連中」

自分の事を遠くの棚に投げ上げて、私にプライバシーはないのかと嘆くヤンだった。それは、辺塞の寧日の最後の日々。梢に咲く、ジャカラランダの花々だけが知っていた。

---

作中の台詞は、映画『椿 三十郎』より。

『椿 三十郎』は、監督 黒澤 明氏、主演 三船 敏郎氏版が至高。  
異論は認めない。

## 閑話 擊墜王の教え

または、ユリアン少年の修行記。彼の一番の先生はヤン提督だったが、他の面々も色々教えを説いたことでありましょう。それはもう色々。時系列的には、たぶんもう少し前のことです。

「ありやな、もてないんじゃない。

本人が気付いてないのと、周りが鉄壁のガードをしていたんだと、おれは思っ  
ね」

断言したのは、ユリアンの空戦技術の師で同盟きつての擊墜王である。ベッドの戦果でも同じ称号を授けられることは、万人が認めるところだ。

「エル・ファシルに、アスターテにイゼルローンの英雄だぞ。

首から下が男ならな、乗ってる顔がブルドッグだって女は寄ってくるんだよ。

本人がその気ならな。おれには遠く及ばんが、顔はまあまあだし、背も普通だ」

「でも、提督はそういう方じゃありませんよ」

「そうだと少年。そいつが最大の問題さ。」

あの人はその気だったら、曜日ごと、午前午後夕方深夜、

それぞれに女を抱えられるんだがなあ。だがありゃいかん。鈍すぎる」

じゃあ、一週間でのべ28人の計算になる。無理だ、と首を振りかけて、ヤン宛に届くファンレターが脳裏に浮かぶ。人口の半分が女性、その四分の一が恋愛対象年齢、さらに容姿で選抜というポプラン式計算法を適用しても、軽くその数を上回る。

ユリアンは頭を振った。事は計算問題ではないのだ。

「……その前提条件も相当無理がありますけど、どのへんが鈍いんですか」

空戦の師は、緑の瞳にいつそ憐みを込めて、亜麻色の髪の子を見つめた。素質は極めて高いくせに、色恋の道では自分の後継者ではなく、黒髪の師父の後を追うような発言である。

「いかん、いかんぞユリアン・ミンツ。」

ヤン提督に憧れるのは結構だが、おまえまで鈍感道に進んではいかん」

それは、ある意味修羅の道だ！ 少年の肩に両手を置いて、そう力説する。

「考えても見ろ。あの、ミス・グリーンヒルが14歳だった時のことを！  
まさしく煌めくような美少女だったに決まってるだろ。」

それこそ、芸能界入りしてもおかしくない、学校一どころか避難民一の美少女に、差し入れまでしてもらって、覚えていないとは何事だよ！」

ダークブラウンの目がまんまるになって、次いで白い頬が紅潮した。

「ああ、本当にそうですね。思いつかなかった……。でも」

21歳の青年が、14歳の少女をそういう対象として捉えるほうが問題があるんじゃないだろうか。ユリアンの疑問に、『女しか相手にしない』男はこう答えた。

「おまえな、相手はいつまでも14歳じゃないんだぞ。」

4年経ったら18歳、6年経ったら20歳になるんだからな。

前途有望な相手は覚えておくもんさ。ひとつ、美人の顔は忘れるな。  
ポプラン先生の教えを心に刻め。わかったか？」

偉そうに胸を張る伊達男に、美少年は懐疑的であった。

「イエッサー！　　と言うべきなんでしょうか」

「言うべきだ。鈍感も過ぎると罪なもんさ」

「はい？」

またしても首を捻るユリアンに、ポプランはしたり顔で自説を述べた。

「あの鈍感ぶりじゃ、周りのガードにも気がついちゃいないだろうな。」

同盟軍の英雄に、変な女が近付いちゃまずいってことさ。

セックススキャンダルやハニートラップに、ころつといっちゃんいそうに見えるかな。

滅多な連中が寄ってこれないような場所にぼっかり異動してるだろ、ヤン提督」

「だから、出会いがないってぼやいてましたよ」

「ふうん、そうかねえ」

その言葉の割に、ご本人は飄々としているが。

「なんだかんだ言って、本人にその気がないんだろうがな。こんな状況じゃ、無理もないけどな。」

ひよっとして、退役するまで結婚はしない気なのかね」

だが、とポプランは胸中で呟いた。その滅多な女が近付かない所で、万全の相手としてミス・グリーンヒルを出してきたんだろうさ。ヤン提督も年貢の納め時か

な。弟子の淡い初恋が、散華するのは確定だな、と。  
結果として、ポプランの脳内予言はすべての的中する。親友に皮肉られた過去のた  
めか、口に出すことはなかったが。

---

ポプラン先生の教え

- 一つ、美人の顔は忘れるな。
  - 二つ、美人の名前も忘れるな。
  - 三つ、男のマナーを忘れるな。(色んな意味で)
  - 四つ 以下、青少年の健全な育成に不適切な発言のため削除されました。
- 「……まったく、困ったものだ」

## 第6話 食卓に並べたものは

### 記憶と愛

オリジナルのキャラクターが登場しますのでご注意ください。

ジャカラランダの青紫の花が散った7月。イゼルローン要塞に夏が訪れた。最高気温の設定が摂氏26度に変更されたただけであったが。

これに不満を述べたものが一人。

「まったくつまらん。女の子が大して薄着にならないじゃないか」

そう言い放った悪友に、コーネフは冷静に反論してやった。

「ここは軍事施設だぞ。何を求めているんだ、おまえは」

「違うぞ、商業区のほうだ」

イゼルローンの人口は五百万人。そのうち将兵は二百万人、残りの多くはその家

族だ。ずっと人数は下がるが、彼らを対象とする商業やサービス業の従事者もいるにはいる。

「ポプラン、よく考えてみる。

妙齢の美女がいても、かなりの確率で本人か親のどちらかがご同業だ。

立体TVドラマのような服が売れると思うのか」

彼のいうとおりで、需要が少ないので供給も少ない。華やかでひらひらした服を売る店と、それを着ている可愛い娘の両方が。いないこともないが、大体が接客サービス業の従事者、玄人<sup>エノ</sup>さん<sup>コ</sup>であった。ポプランが求めている相手とはやはり違うのだった。

「おまえ、夢も希望もないことを言うなよ……」

口説いた相手の親が、ムライのおっさんや要塞事務監の同類だったらと想像すると、色事師も動きが鈍るといふものだ。ああ、夏を満喫したい。森林公園をつくるんなら、ビーチの一つもつくっておけよ。盗人猛々しい不満を抱く、緑の目の撃墜<sup>エース</sup>王<sup>ス</sup>である。

そして、不調を訴えるものが一人。

「なんだか頭がぼーっとするなあ。夏ばてかな」

「提督のは四季ばてです。夏のせいにはしないでください」

被保護者に手厳しく切り返されて、肩を竦めて遠い目をする黒髪の保護者である。自分より大きなスーツケースを引き摺っていた、あの健気で小さな少年はどこに行っちゃったんだろう。

もう自分と背はほとんど変わらなくなった。中学校のころからスポーツ万能で、薔薇の騎士連隊から白兵戦や射撃を学んでいる。しなやかな肢体は、均整のとれた筋肉がついて若い一角獣ユニコーンのようだ。この前の健診結果では、体重は追い抜かれていた。遠からず、身長も追い抜かれるだろう。

「でもなあ、ここ何年かこの時期は艦隊勤務だっただろ。」

「十度も差があるんだ。身体がついていかないよ」

言い訳を口にするヤンを、ダークブラウンの瞳がじろりと見た。

「たしかにそうかも知れませんが、六月との気温の差はたったの二度です」

反論のしようもない正論であった。だが、ヤンの食欲が落ちているのも事実である。なにか、いいレシピはないものだろうか。口で厳しいことをいってみても、ユ

リアンもヤンに甘いのだった。夏服になった姿を見ると、その肩の薄さが目立つ。自分の方がずっと軍人らしい体形だ。この軍人らしさの欠片もない肩は何百万人の味方の命を背負い、帝国軍に抗してきたのだ。

ユリアンは戦闘艇のパイロットとして、初陣ではワルキューレ三機と巡洋艦一隻、先日の第八次攻略戦でもワルキューレ三機を撃墜した。だが、自分と友軍機、それを庇い合うのがやっとなかった。死の息吹を頬に感じて、食事も喉を通らないという状況を身をもって体験した。

それでも、志望を曲げなかったのは、やはり師父の助けになりたいからだ。今のところ、一番に役立つのは、ヤンの衣食住の面倒を見ることがだろうけれど。

細いイゼルローン回廊の中央に位置する国防の最前線。砂時計のくびれにはまった栓だ。押し寄せてくる帝国軍に、要塞と一個艦隊で抵抗し続けなくてはならない。イゼルローンが同盟の手に落ちる以前は、十二の宇宙艦隊があったが、大規模な会戦はそう多くはなかった。

幼帝エルウィン・ヨーゼフ二世の先帝、フリードリヒ四世は灰色の皇帝と称された。兄と弟が帝位を争って共に倒れ、宙に浮いた玉座に座った平凡な君主。何事に

も消極的で、国政も各尚書らに任せ、大貴族らをpushさえついたり重用するでもない。唯一、積極的と言えたのが、寵姫と関係を結ぶことだったが、歴代皇帝のなかではおとなしいものだ。

自由惑星同盟との戦争についても同様であった。53年前の第二次ティアマト会戦で、ブルース・アッシュビー元帥がもたらした、帝国軍にとっての『涙すべき四十分間』で、数十人の将官が戦死。この人的被害の回復に、三十年以上の年月を要している。それは彼の在位期間の三分の二以上に及ぶ。

だが、一転して今はどうだろう。ローエングラム公ラインハルトの姉を後宮に召した頃から、帝国と同盟の戦争は、再びの緊張状態となった。パトリック・アッテンボロー氏が、長男に、士官学校の受験をなかば強要していた頃とは状況が違う。これまでの140年の戦争は、同盟に地の利のある国境紛争であった。イゼルローン回廊という宇宙の難所を挟んでの攻防であったから、ほぼ二倍の人口を持つ国と拮抗できたのである。

帝国にとって、今さら同盟を併合する利は薄い。むしろ、貴族らに対して、団結や財政出動を促すために、見える敵である『叛徒ども』を利用していった部分がある。

これは同盟にとってもお互い様で、一時は帝国との会戦が政治ショーになっていた。人間、侵略者から国を守れと言われれば、ひねくれた考えなど遠くにうっちゃってしまふ。しかも、相手の親玉は四十億人を殺したルドルフの末裔だ。それは必死にもなる。

だが、アスターテとアムリッツアで、艦隊の三分の二を失い、軍事クーデターで残る四分の一を撃破せざるを得なかった。ここまでパワーバランスが崩れ、帝国の実質的な首座には戦争の天才が就いている。先日のガイエスブルク要塞の来襲など、これまでには考えられなかった戦法だ。貴族と言う見えざる敵がいなくなつて、見える敵に注力できるわけだ。おまけに門閥貴族の解体で、相当に財力にも余裕があるんだろう。羨ましい話だね、とユリアンと先輩後輩を前に、ヤンは長めの黒髪をかき回したものだつた。

こういう話を聞かされると、自分の保護者はローエングラム公に劣らぬ軍事的才能の持ち主だと思ふ。だが、あの絶世の美青年が、パジャマで髪に寝癖をつけたまま、もそもそ朝食を摂るとは思えなかった。いついかなる時も、完璧に華麗で、眩く美しいような気がする。

想像したユリアンは、軽く亜麻色の頭を振った。臣下として仰ぎ見るには理想でも、家族としては常に緊張を強いられそうだ。でも、いつも完璧な姿を要求されるのも、しんどくて孤独なことだろうな。こういう考え方ができるようになったのも、ヤン提督のお陰かもしれない。

「提督」

「ん、なんだい、ユリアン」

「提督はそのままでもいいですからね」

「どうしたんだい、急に……」

今日も食が進まないヤンは、てっきり注意をされると思ったので、少年の言葉に目を瞬いた。

「あ、でも野菜はきちんと食べないと駄目ですからね。それにヨーグルトも残さないでください」

「はいはい」

結局、注意はされてしまったのだが。

こんな調子で七月は始まった。ユリアンが義務教育中の間は、有給休暇を貰っ

て、二人で旅行を楽しんだりもした。しかし、ここはイゼルローン要塞だ。一万未満ものエリアがあるが、景勝地などはない。

おまけに、ユリアンも正式に軍人になって、まだ三月も経たない新米だ。軍属からの功績で、年齢の割に階級が高いが、服務規定上まだ有給休暇はない。

ユリアンがいない時に休んでも、昼食の算段をしなくてはならなくなる。仕方がないので、中央指令室や執務室でくだを巻くヤンであった。なにより、中央指令室は室温が16。5度。体に慣れた温度であった。

だが、これがよくなかったのである。それは、士官食堂で起こった。昼食を摂りにきたヤンと、シェーンコップ少将、リンツ大佐が同席になった際のことだ。このメンバーには、少々近寄りがたいものがある。副官も遠慮をして、少し離れた席にいた、事務部の友人らと一緒に食事を摂ることにした。

「比べる相手が悪いけれど、あの二人の前だと細いんじゃないやなくて薄いつて感じるわよね」

先日、司令官の健診の手配と、結果報告をした黒髪の美女がフレデリカに呟いた。「まあ、一月やそこらで劇的に改善するものじゃないんだけど、太るのって簡単な

のよ。

でもあまりお変わりになつた様子がないわね。ねえ、閣下はちゃんと食べてるの？」

「ユリアン、いえミンツ准尉の話だと最近では食欲がないみたい。

夏ばてっておっしゃっているそうだけれど」

「はあ？　これで夏ですって？」

フレデリカは苦笑した。黒髪の友人が、形の良い眉を寄せて短く非難の声をあげた。だが、これにしみじみと同情の眩きを漏らしたのは別の友人だった。こちらはフレデリカの一歳下。赤ワインのような色調の髪に、微かに緑を帯びた灰色の瞳。乳白色の肌にはほっそりとした体形で、繊細な可愛らしい容姿の持ち主だ。

「わかるわ、それ。室温と外の温度の差がよくないんですよ。

私は低血圧なんです、余計に血圧が下がるの。

食欲もなくなるし、ぼーっとして頭に血が回らないって感じなんです。それに」  
彼女が言葉を継ごうとしたときだ。先に食事を終えた黒髪の司令官が、椅子から立ち上がって姿勢を崩した。尻餅をつくように、椅子にへたり込む。

「閣下！」

同席していた、前職と現職の薔薇ローゼンリッターの騎士連隊長が顔色を変える。フレデリカも席から腰を浮かせ、駆け寄ろうとした。座り込んでいたヤンは、頭を左右に振って、呆然とした顔をした。

「どうなさいました」

「いや、何だか目の前が真っ暗になって……」

周囲が騒然となる。司令官が倒れでもしたら、大変なことになる。だが、赤毛の中尉は落ち着いていた。

「よくあなります」

静かな声は意外によくとおり、灰褐色の髪と瞳の美丈夫の耳まで届いた。

「どういうことだ」

彼女よりも体重が倍ぐらいありそうな、白兵戦の勇者の鋭い視線と詰問にも動じないのは、さすがにキャゼル又事務監の部下というところだろう。

「起立性調節障害。ひらたく言うなら」

灰色の瞳が、灰褐色の瞳をたじろぎもせずに見詰め返す。テーブルの美女ら二人

は内心で拍手を送った。

「たちくらみですわ」

皆が沈黙して席に戻り、食事を再開した。まったく、人騒がせな。同席者らが、非難の眼差しを向けてくる。ヤンは弁解を試みた。

「いや、私もこんなのは初めてだよ」

それに対するブルーグリーンと灰褐色の視線は冷たい。

「閣下、もっと体を鍛えるべきです」

「同感ですな。なんでしたら、小官がご指導しますよ。」

閣下の被保護者と並んで、訓練をお受けになったらよろしい」

「勘弁してくれないか……」

同盟軍屈指の肉体派たちに詰め寄られて、軍人のくせに文弱の徒はたじたじとなった。黒髪のチャベス大尉は、来月のヤンの健診項目に二種類の心電図検査を追加、と脳裏の予定表に書き加えた。フレデリカは、赤毛のブライス中尉に低血圧の克服法を聞いてみた。

体質ですから、諦めて付き合うしかありませんというのが、後輩の回答だった。

彼女は軍人の父を亡くし、病弱な母に金銭的な負担をかけまいとして軍人の道を選んだ。しかし、容姿も体質も母親譲り。なんとかかするべく、ジョギングに取り組んだり、食事に入浴方法まで様々に工夫していた。黒髪の大將よりも遥かに勤勉な努力家である。

しかし、それでも、立ちくらみや冷え性とは縁が切れないのだと語った。真夏でも手や足の先が冷たいというので、手を握らせてもらおうと、その冷たいこと。健康で活気に満ちた黒髪と金褐色の髪の美女は、申し訳ないような気分になった。

「結局、持って生まれた循環器系を総取替えしないといけないようなものなんです。運動してもそんなに改善はしないんですよ。残念ながら」

ジョギング暦7年、しかし今までの健診で、一度も最高血圧が百を超えたことはないという。大変に説得力があった。食欲と寝つきは良くなるから、一定の効果はあるそうだが。

「あとは、体を温め、冷やさないようにすることです。

肉や魚をきちんと食べて、生野菜は控えるようにしています。

ヤン提督がお好きな紅茶は体を温めるので、一工夫されるといいと思いますよ。

私は、ジンジャーとミルクと蜂蜜を入れて、チャイにして飲んでいますが」

そんなブライス中尉は、きちんと自炊している。今日もランチを持参し、士官食堂では温かい飲み物を頼んでいる。士官食堂に三食頼り切っている二人の大尉は反省しきりだ。

「ありがとう、ブライス中尉。そのチャイのレシピ、あとで貰えないかしら」

「ええ、もちろんです。奇蹟ミラクルのヤンのお役に立てれば光栄ですわ」

「それにしてもあんたも大変なのね……」

フレデリカも、チャベス大尉も、後輩の繊細な容貌を羨ましく思うことがあった。自身の容貌に愛着があっても、自分にはないものを求めるのが人間だからだ。だが、彼女は外見のみならず、体質もずいぶんとデリケートだった。そんなに都合よく、いいところばかりは選べない。ままならないものである。

フレデリカの元に届いた、ブライス中尉の低血圧冷え性克服レシピは、飲み物以外にもいくつかの補足があった。野菜や果物もきちんと火を通し、香辛料を活用して調理する方法。バリエーション豊かなスープの作り方も。恐らく、彼女とその母親、両方の食が進むものなのだろう。どちらかというと、病人食に近いものだった。

これはユリアン経由で、ヤン家の食卓を飾ることになった。ミンツ家ともキャゼルヌ家とも違う味に、黒髪の世帯主は首を傾げたが、スパイスの風味にも助けられて、たしかに食が進んだ。ジンジャーやシナモン、ナツメグ等は古来から薬草としても使われてきた。故なきことではないんだな、と男二人は感心したものだ。キャゼルヌ夫人の料理は、美味しいし栄養的にも優れたものだが、世帯全員が健康優良である状況を反映している。夏ばてしているヤンにはちょっと重たい。

ユリアンの料理は、祖母のミンツ夫人の味。厳しく、少年の母への偏見を隠さなかった彼女と、孫の心理的な折り合いは悪かった。でも、彼女はどこに出しても恥ずかしくないようにと孫を厳しく躰け、伝統的な料理を食卓に出したのだろう。ユリアンの得意なアイリッシュメニューを。

老婦人にとって、少ない負担ではなかったはずだ。ユリアンは年齢の割りに出来た子だが、心の蟠りわたかまを解くのはまだまだまだ時間がかかるだろう。だが、いつか気がついてくれるといい。ヤン家には伝わらなかつた家庭の味、それに籠められていた祖母の愛情を。

## 美味と義務

筆者の創作による独自設定が含まれるのでご注意ください。

さて、司令部付近の室温と外気温の差もよくない、ということ、ユリアンが出す紅茶もジンジャーティーに変化した。独特の香りと辛味があるので、ミルクと蜂蜜を加えられて。この香りに反応したのは、ムライ少将だった。怪訝な表情で室内を見回す。

「どうしたんだい、参謀長」

「いや、失礼を。いま生姜の匂いがしたものですから」

「ああ、ひょっとしてこのお茶かな。ジンジャーミルクティーというらしい。体を温めるといいということだね」

「そういうことでしたか」

「いや、よく生姜だとわかったね」

「ああ、日系イースタンは、よく薬味に使いますからな」

生のまますりおろしたり、細かい千切りにしたりして、一年を通して使う。夏なら冷や奴にそうめん、冬は甘酒や湯豆腐。また、甘酢漬は寿司の付け合わせに。閣下にも召し上がっていたんだけど、どれもイゼルローンでは入手が困難だとムライは語った。

「面白いものだね。ウエスタンでは、ジンジャーはお菓子用のスパイスだ」

「ええ、日系の伝統料理は魚を使うものが多いですからな。」

たしか、臭み消しと食中毒予防を兼ねたものだったようです。

わさび、ねぎ、大根おろしも同様の効果があるそうですね」

「へえ、すごい食文化だねえ」

ヤンは感心した。宇宙暦800年近い現在、人種の混血が進み、姓は祖先のルーツを示すだけのものになっている。ヤンも、黒髪に黒目という黄色人種の特徴を受け継いだけど、肌や顔立ちに格別にルーツを示すものはない。

だが、文化や風習を色濃く残している人々もいる。日系イースタンがそうだ。島

国であったせいとか、13日戦争から日本刀を守り抜いたことといい、伝統の継承に強い意欲がある。そのおかげで文化や料理が今に残っている。規律正しく、手先が器用で味覚が繊細という人種的特長のせいとか、日系イースタンは最高の料理人になるとも言われていた。

「美味しいものに貪欲だったのでしょう。平和な時代が長く続いた国家だったそうですからな」

「なるほどね」

「そう言えば閣下、体調はいかがですか」

「うん、まあだいたい気温に体が慣れてきた感じかな」

たしかに、一時期よりも顔色が良くなってきた。

「それは結構。スパイスのおかげでしょうか」

「さあ、それはよくわからないが、風味や香りですいぶん違うものだね。」

それに、このお茶はたしかに温まるよ」

ムライは頷いた。そして、ふと思いつく。香辛料を利かせた料理か。確か、二週間ほど前に妻から荷物を送ったという連絡があった。

「ふむ、では近いうちに小官の家庭の料理もご紹介いたしましょう」

思わぬ人の思わぬ言葉に、ヤンは黒い目を瞬いた。

それから十日ほど後に、彼からレシピを受け取ったユリアンはさらにびっくりした。意外にもほどがある。しかもこのレシピを元にした完成品だと渡されたもの。ハイネセンの最高級クラスのホテルの贈答品だ。この箱の大きさだと少なくとも50ディナールはする。

「あの、ムライ少将。こんなに高価なもの、いただけないです」

軍人を含む国家公務員の虚礼廃止。それに抵触はしないだろうか。そう思って慌てるユリアンの潔癖さに、ムライは慣れない笑みを浮かべた。

「ミンツ准尉、気にすることはない。これは間接的に家内が作ったものだ」

ダークブラウンの瞳が、疑問に丸くなる。

「家内はここに勤めていてな。これはムライ家の味を改良した製品だ。

さすがに、自家製のを四週間近く輸送するのは限界があるのでな。

たとえ冷凍するにしてもだ。だから、時々私あてにこれを送ってくるのだよ。

私も作れんことはないのだが、私の住居には調理器具が揃っていないのでな」

「え、ええ?」

もう何から驚いていいのやら。ムライ少将が既婚者であったことか、ご夫人がホテル・ユーフォニアでかなり高い地位にあるコックであることか、彼が料理を作れることか。

「まあ、いいからヤン提督と一緒に食べてみてくれたまえ。

レシピの方は、もうすこしあっさりとした素朴な味だがね。

私も家内もそちらの方が好きなのだが、

ホテルで出すならコクや旨みが濃い方がいいのだそうだ」

こうなると辞退するのは野暮な話なのだろう。キャゼルヌ夫人の手料理は何度もいただいているのだから。ユリアンは突っかえながら謝辞を述べた。

「は、はい。ムライ少将、どうもありがとうございます」

「是非、感想を聞かせてくれんかね。家内も喜ぶだろう」

「はい。早速今日の夕食に出してみます」

ムライは頷いた。

「お勧めのつけあわせはポテトサラダだ。レシピに載っているので参考にしてく

れ。では」

「御馳走になります」

ユリアンは、大きな箱をなんとか片手で持って、精一杯の敬礼をした。ずっしりと重い、その中身をヤン家に帰ってから開けてみる。日系イースタンの魂ソウルの家庭料理フールド。そして、姓の東西を問わず、嫌いという者が極めて少ないだろうそれ。

ユリアンの瞳と同色の、様々な香辛料を利かせた料理。ホテル・ユーフォニア製の各種カレーの詰め合わせだった。ホテルで食べると一食30ディナールは下らない、ユーフォニアのカフェテラスの名物だった。たとえば、社員割引があるにしろ、金額を上方修正しなくてはならないだろう。

一瞬どうしようかと迷ったが、ムライ家の味と、参謀長の奥方に対する興味が上回った。とりあえず、ご飯を炊こう。そして、お勧めのポテトサラダ、材料は買っておきの物で間に合うだろうか。ヤンが帰ってくる時間と、夕食の準備の算段を計算しながら、ユリアンは立ち上がった。

きつとびっくりするに違いない。自分ばかりが驚いてばかりじゃ不公平だし。それに、ヤンからの感想もムライ参謀長はきつと知りたいはずだから。思うに、これ

は一種の惚気のろけじゃないのかな？

炊飯器のスイッチを入れながら、ユリアンは小さく笑い、ムライ家のレシピをつぶさに読み始めた。主人か夫人のどちらの手になるものか、整然と手順と要点が記され、すばらしく達者な図解の入ったものを。よし、材料は間に合いそうだ。時間のほうも大丈夫。では、調理開始。

その晩、ヤン家の食卓にはカレーとポテトサラダをが並び、師父と弟子はそれを堪能した。流石にホテルの味で、たいそう美味しかった。二人揃ってムライに礼を言い、奥方の腕を激賞した。

また別の日、今度はレシピに記載されたカレーを作ってみた。すりおろした野菜や果物をベースに、ルーを手作りする本格派だった。たしかに、先日のユーフォニアのものよりさっぱりとしていて飽きない。素材の甘みと旨味が、辛さをほどよく抑え、香りを引き立てている。ヤンもムライ夫妻と同様、こちらの方が好みだと行って、珍しくおかわりをした。

「うん、おいしいね。ユリアンのアイリッシュチュウもいいが、

夏はご飯のほうが、水分があるせいか食べやすいような気がするよ」

「僕は甲乙つけがたいですね。でも、ホテルのレシピは流石に教えてはくれないでしょう」

「たしかにね。だが、教えてもらっても作れないぐらい難しいかもしれないぞ。

ほら、マダム・キャゼルヌのパイのように」

ユリアンは苦笑した。

「そうですね。ムライ参謀長の奥さんは、それを仕事で作っている方ですからね」  
ムライに礼を言った際に教えてもらったのだが、あのヤン作成の戦術立案書さながらのレシピは、奥方の手になるものだった。カレーは彼女が企画立案したものが、本業は製菓。同盟のコンクールで、何度も優勝をしているホテル・ユーフォニアの製菓部門長だというのだ。道理で、夫のイゼルローン赴任に同行できないはずだった。

「そうだね。羨ましいけれど、ご家族も大変みたいだよ。

コンクールや季節の新商品の試作に、随分付き合わされるんだそうだ」

「僕だったら喜んで試食しますけど」

「グリーンヒル大尉も最初はそう言っていたよ。」

だがね、一つのお菓子が生まれるまで、十種類は試作品がある。

季節商品は五つは必要だから、それを繰り返し返さないといけないとか。

まあ、試食は一口か二口ぐらいずつだと言うんだが」

「うわ……その中から選ぶんですか。それじゃたしかに大変ですね」

レシピの中には、いくつかのデザートがあったが、そんな試行錯誤と苦労の上でできたものだとは。ちよつとずつ材料や配合を変えた、同じケーキが十個ずらりと並んだ状態を想像する。お菓子は好きだけれど、考えただけで胸焼けがしてきそう  
だ。それを最低五回。それも季節ごとに。もはや立派に苦行である。

「本当だね。いいかい、ユリアン。甘くておいしいだけの仕事なんてないんだよ」  
しみじみと言い聞かせる、現在の給料泥棒にして戦場の名将であった。

このカレーのレシピが、ユリアンの元から旅立ち、キャゼルヌ家やブライス家で  
新たな味となるのは、それぞれの家庭の物語。ヤン家やミンツ家ではどうなったの  
か。食卓だけが知っている。

原作中の記述はありませんが、ムライ氏は既婚者だと思います。ああいう、真の意味でのいい男は周囲が放っておきません。きつといい人を紹介してくれるものです。

## 第7話 女王からの葬送曲

本作品は銀河英雄伝説原作に準拠しております。ゆえに、イゼルローン要塞は重金屬の海で覆われてはいません。ご了承ください。

ガイエスブルク要塞が、イゼルローン要塞にもたらした損傷。特に大きなものは、レーザー水爆によって穿たれた、直径二キロに及ぶクレーターである。当初、その巨大さにどう修理をしたものか、ヤン艦隊の幹部は顔を見合わせたものだった。

しかし、こういった損傷とその復旧方法については、帝国軍が想定済みであった。同盟軍による第五次攻略戦の被害によって定められたらしい。同盟軍の艦隊には、それを上回る被害を与えていたのだが。戦史上の大いなる皮肉である。

「まったく、なんともやるせない話だな」

要塞事務監のキャゼルヌ少将は、その復旧工事の手順書を探し出した部下を褒めてから、そう言って嘆息したものであった。だが、さすがにこれは軍の手に余る。

軍の技術、建築技師らがその手順書を協議し、設計図や仕様書を作成。そして、宇宙間施設の建設会社による指名競争入札を行うこととした。

キャゼル又事務監は補給の達人だ。要は、軍需物資をより安くよりサービスのよいところから買い叩くのである。彼の入札設定価格の的確さは恐るべきもので、業者に儲けがあるぎりぎりよりも皮一枚上。このボーダーを下回らないと勝てない。ゆえに多くの業者から尊敬混じりの恐れを寄せられていた。

しかし、今回は前例のない大工事である。キャゼル又が計算し、ヤンが言われるがままに記入した予定価格表は、いつもの基準からするとかなり甘めな設定である。エスプレッソコーヒーに、大匙一杯ぶんのお湯を足したぐらいには。

「ものすごい金額には金額ですが、これでできますかね？」

ヤンは、自分の給与額と比較することも諦めた。だが、こんな大穴をこの金額で塞げるものなのか。

「結局は応急処置さ。穴に蓋をするだけだ。破損エリアの修理は到底追いつかんからな。」

やりたい奴が手を挙げるから心配いらん。入札が不成立になったら再検討する

が、

この不景氣にあの派手な来襲だ。愛国的企業とやらが手を挙げるだろう。必ずな」

「はあ。

キャゼル又先輩がいたら、この要塞の建設責任者は詰め腹を切らされずにすんだでしょうにね」

同盟でも有名な話であった。イゼルローン要塞の建設を命じたオトフリート五世はしまり屋だった。建設費が予定よりも膨大なものとなり、建設責任者のリュージェリッツ伯爵は自殺を命じられた。

「俺が見るところ、そんなに単純なものじゃないがね。帝国の大企業は貴族資本だっただろう。

工事をこちらの公爵、建材を別の公爵なんてやっていたら、金額を切ることなんてできんさ。

建設責任者を処罰することで、貴族資本に釘をぶっ刺したんだろう。帝国側としてははな」

「おや、というと同盟側の理由はなんでしょね」

意味ありげな先輩に、黒髪の後輩は応じた。家計には大雑把なヤンだが、マクロ経済についての見識はなかなかのものだ。キャゼルヌが評価する部分である。

「事業の予算額をオーバーするようなことになったら、最終的な責任は任命権者にある。

処罰されるとしても、担当者が死刑なんてことはありえない。

責任を分散させる、民主共和制とは素晴らしいもんだよなあ？」

薄茶の瞳が人の悪い笑みを浮かべる。こういうことには察しの良い黒い瞳が、理解の光を瞬かせた。

「なるほどね。実話に基づくプロパガンダというわけですか。

たしかに歴史資料なんて、ふんだんにバイアスがかかっていますからね。

正義が勝つのではなくて、勝ったから正義なんですよ。我々も後世にどう評価されることやら」

歴史学徒の表情になったヤンに向けて、キャゼルヌは言い放った。

「後のことなんて知ったこっちゃないな。とりあえずは今だ。」

さっさと封筒に入れて、封印のサインを書け」

「はいはいわかりましたよ。任命権者の責任を果たすとしますか」

などと言いつつも気楽なヤンである。彼の任命権者は国防委員長だ。国防委員長の任命権者は最高評議会議長。ヨブ・トリューニヒト氏だ。自分が降格更迭されるなら、いっそ望むところである。それができないから、連中は難癖をつけてきたのだが。

「どの企業体が落札するかはわかりませんが、難工事になるでしょうね。」

いっそ、あちらさんにお返しして直してもらいたいですよ」

「おいおい、また取り返すとも言うのか」

「いえ、もはや帝国は実質的にローエンングラム朝といってもいいでしょう。」

自由惑星同盟は、ルドルフ・ゴールデンバウムの差別や弾圧からのアンチテーゼから生まれました。

ローエンングラム公が、貴族制を撤廃し、心身の障害者などへの差別をなくすなら、彼と対立する必要はなくなりませす」

もしも講和ができるなら。イゼルローン要塞の返還で済むなら安いものだ。だか

ら、あんな奇策でここを攻略をした。できるだけ、敵の損害も少なく済む方法で。

「ですが、もう互いに収まりがつかないでしょう。血を流しすぎましたからね」

ヤンは目を伏せた。アムリツツアでは二千万人。今度の第八次イゼルローン攻略戦では何百万人か。ごめんなさい、仲良くしましょうと言うには遅すぎる。だが、それをこの先輩に言うことはできなかつた。口に出したのは別のことだ。

「そうだ、兵員補充はどうかかなりそうでしょうか」

「おまえに同行した援軍が、半分でも残ってくればいいがな。」

要塞防御部門の方は、補充しても配置場所がないから、当面はこれでいくしかない

ガイエスブルク要塞の主砲は、イゼルローンに狭くとも深い爪あとを残した。硬X線ビーム砲による残留放射能。探査機器のガイガーカウンターが振り切れてしまふほどだ。遺体の収容も、破損した砲塔の修理もまだ先になるだろう。

「ずいぶん死角ができますね」

ヤンは髪をかき回して、渋い表情になった。

「それは駐留艦隊でなんとかしてくれ」

司令官の黒髪が、さらにもつれた。

「その演習をしようにも、残骸が邪魔でね。」

大変ひどい話ですが、雷神の槌トウールハンマーを使用させてもらいますよ」

9億2千万メガワットの出力だ。大物の残骸でも消滅させることができるだろう。まさに死者に鞭打つような行為だ。こちらとしても心理的抵抗は大きい、背に腹は替えられない。

「ああ、悪いが頼む。今のままだと物資や建材の搬入や、作業用艦艇の航行にも支障が出る」

「そちらの方はよろしくお願いします。」

そうだ、昨年通信衛星を作ってくれたチームの人員をまたお借りしますよ。

今回の戦闘で、だいぶ壊れてしまいましたからね」

「構わんさ。だが、また自家製でいいのか？ いま要求すればきつと通るが」

同盟軍上層部も、襲来の衝撃が冷めやらぬうちなら、索敵能力の増強に否やは言うまい。だが、ヤンは頭を振った。

「いえ、あれにはあれなりの美点があります。小さいから発見されにくい。」

それに、数をばら撒ける強みがあります。ちょっと試してみたいこともありますのでね」

キャゼル又は頷いた。事務屋として、経費削減ができるならばそれに越したことはない。

「あとはですね、分艦隊司令官や主要戦艦の艦長にも、

雷神の槌を撃つ側を体験してもらおうと思うんですよ」

黒髪の司令官は、行儀悪く頬杖をついた。その陰で溜息を隠しながら言葉を続ける。

「更にもうでもないことですが、今だったら攻撃範囲がわかりやすいでしょう」

きわめつけにやるせない事実であった。普段の演習では、こんなに膨大な数の標的を用意できない。雷神の槌の威力や可動域、あるいは時間や射程範囲の空隙を知る絶好の機会となろう。特に、駐留艦隊として雷神の槌の援護を受け、時にその矛先を避けなくてはならない側にとって。

キャゼルも、苦い思いを噛み締めながら頷いた。残骸を除去しないと艦艇を動かすのは危険だし、かなりの数が修理点検中だ。戦艦乗りは仕事ができないので、

交互に代休を取ったり、夏季休暇を前倒ししているが、緊張の持続も重要なことだ。

「まったくだ。だが、駐留艦隊の連中にとっては確かに重要な体験だ。

俺は今まで後方にいたから、本当には実感はしていなかったんだな。

おまえさんの言うとおり、軍人なんて業の深い稼業だよ」

先輩と後輩は、顔を見合わせて溜息をついた。苦い限りの一石二鳥。

「ところでヤン、おまえも当然参加するんだろうな」

考えてみれば、最も雷神の槌の運用経験が少ないのが要塞司令官ではないだろうか。実戦で撃ったのは、第七次攻略戦の時の二射。それもぶっつけ本番だ。着任後は駐留艦隊の訓練に重点を置いていたし、そうでないときは出張か出撃か、給料泥棒のどれかである。

「はあ、ばれましたか。ええ、もちろんそのつもりはありますよ」

この指摘に、ばつが悪そうな顔をして長めの黒髪をかき回すヤンだった。ヤンは雷神の槌に、あまり重きを置いていない。

イゼルローンを素通りして同盟領に侵攻するならば、その射程には入らないからだ。それをさせないための艦隊が重要なのである。補給基地でもあるイゼルローン

最大の利点だ。相手の行動限界まで粘ること。兵器やエネルギーが不足し、食えなくなったら撤退するしかない。同盟の六回の攻略戦の敗北も、原因の根幹にはこれがある。

「ただですね、帝国に『ここ』を攻めて取る気がなければ、雷神の槌に意味はないんですよ。」

実際のところはね」

「どうということなんだ」

ヤンは、第八次イゼルローン攻略戦の特異性を簡単に説明した。一か月あまりの艦隊戦というのは、戦史上でも異例の長期間である。なぜならば、艦隊に要塞という、食堂とベッドと病院がついてきていたからだ。巨砲巨艦主義もここにきわまりりという戦術だったが、補給、兵站という戦略上の観点においては、決して間違っているではない。

補給と兵站の達人は、しぶしぶながら頷いた。ヤンの話はなおも続く。あれをなした帝国の資金力と生産能力こそが恐ろしい。ローエングラム公ラインハルトは、戦略の天才である。彼は帝国の権力を掌握した。イゼルローン回廊の帝国側の

補給基地を増強し、イゼルローンに精兵をぶつけ続けられたら、たったの一個艦隊ではたまったものではない。損耗が蓄積し、互角の戦線が維持できなくなれば、要塞に引っ込むしかない。そうなるから、射程外を素通りされれば全く意味がないのだ、と話は結ばれた。

「ですが、イゼルローンに雷神の槌がある、というのは一種の固定観念になっていきます。」

我々にも帝国軍にもね。要は使い方次第ということですよ」

頬杖をついたままの、大学院生にも見える後輩は、一体何を考えているのだろうか。こいつが『魔術師』などと言われるのは、この温和な表情で奇策を打ってくるからだろう。

「どんな使い方を考えているのかは追求せんが、あんまりサボると下の連中に示がつかん。」

全部に参加しろとは言わんが、なるべく立ち会ってくれ。

では、フィッシャー、アッテンボローの両提督と主要艦の艦長か。

メルカッツ提督はどうする？」

「いえ、少将から大佐までとしましょう。参謀や主任級オペレーターも見ておいた方がいい」

単に艦長とすると、一万三千人あまりが該当するからだ。80メートル四方もある中央指令室には、その十分の一ぐらいいは入るだろうが、映画じゃあるまいし、一回ごとの入れ替え制ではあまり意味がない。

ヤンの言いぶんに、キャゼルヌも同意した。やはり、ここにメルカツ中將らを加えるのは酷だった。通達はするが、参加者リストからは外す。そのあたりが落としどころだろう。余計な心理的負担を与えるべきではなかった。

「あと、一応メンタルケアの準備をお願いします」  
「わかった」

あの不敵で不逞な美丈夫も、第七次攻略戦の際には、一方的な虐殺だと言ってしまったと白状した。ヤンが引きこもっていた戦勝行事の後、キャゼルヌとシェーンコップ、アッテンボローらが何とはなく集まり、飲み直した時のことである。自分と敵と一対一で、命の遣り取りをするほうがまだ気が楽だ。そうこぼしたものだ。キャゼルヌもまったく同感だった。

そばかすの後輩は、鉄灰色の髪をさらにもつれさせ、あんまり気にしたこともない肩をすくめた。だが、戦艦乗りは虚空に浮かぶ船の中、対等な条件下で敵艦隊とやりあっている。イゼルローンという堅牢な場所から、大規模破壊兵器を撃つのはまた違うと言ってやったものだ。

確かに、あの光景は胃壁と精神を直撃するだろう。ヤンが挙げた階級は、士官学  
校卒でも三十代以上がほとんどだ。十年も軍人をやって、生き残ってきた連中だ。  
ストレスに比較的強そうな面々を対象にしようというわけだった。だが、それでも  
心身の影響は考慮すべきであった。

結果として、この判断は正しかった。純白の雷霆らいていが漆黒の闇を貫くたび、標的とな  
った残骸がごっそりと消え去るのを見て、ベテランたちでも平静を保つのが難し  
かったからである。ヤン艦隊は、これに援護をしてもらうような艦隊運用をしてき  
たわけだった。そして今回の砲撃訓練。

いざとなったらお前らも撃てという、事務監の声なき圧力を感じる。私たちが  
やっていることの意味を考えてくれという、司令官の静かな声が聞こえる。

本当に一筋縄ではいかない先輩達だった。伊達と酔狂を掲げる若き提督は、背中

に氷塊を入れられたような気がした。その苦勞性な部下は瘦せ我慢をせずに、司令官らの配慮を活用しようと心に決めた。

フィッシャーは雷神の槌の充填時間と、標的への照準にかかる時間を記録しながら、艦隊運用にどう反映すべきかを再検討しようと考えていた。ムライヤパトリチェフもその提案に賛同をしたものだ。

だが、その光景を前にそんな計算も同様に消滅してしまった。彼らもただただ見詰めた。今までに同盟軍に六回、帝国軍に二回の膨大な死をもたらした、女王の白く無慈悲な指先を。

それが何度も、縦横無尽に振るわれる。一射ごとに消滅していく第八次攻略戦の残骸。数千光年の星の海を渡り来た、かつて艦艇や要塞であったもの。それぞれに、数十人、数百人、数千人、またはそれ以上の人を乗せて。帝国に生まれたという以外、ここにいる者となんら変わりはない、人間であったものだ。

そして、還らなかつた僚友たち。軍人としての道を選び、あるいは徴兵されてここに来た。先日まで、隣で笑い、訓練に音を上げて励ましあった。そんな彼らを乗せていた艦艇。それは自分たちであつたかも知れないのだ。

巨大なモニターを凝視する駐留艦隊の将兵の背筋は、ぴんと伸びて張り詰めていった。一人、また一人と右手が上がり、いつしか全員が敬礼を捧げる。

普段の不器用な動きを忘れて、黒髪の司令官が静かに立ち上がる。彼もまた、右手を上げた。いつもの今ひとつ決まらないものとは異なる、美しい敬礼であった。皆がモニターを見詰めていて、それを見た者はいなかったが。



## 第8話 黄昏に飛び立つ

## 巣立つ雛鳥

本作品は、銀河英雄伝説原作に準拠しております。バグダッシュを眠らせた方法は、特殊な睡眠薬によるものです。

宇宙暦798年8月20日。後世に『ねじれた協定』と称される、ローエングラム独裁体制に対する銀河帝国旧体制派と自由惑星同盟との協力体制が公にされた。自由惑星同盟最高評議会議長 ヨブ・トリューニヒトが、同盟領の全域に放送した超光速通信<sup>F</sup>で、エルウィン・ヨーゼフ二世の亡命と銀河帝国正統政府の成立を認め、協力を発表したのだ。

光のない雷光が、イゼルローンの中央指令室を奔り<sup>はし</sup>抜けた。ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムが作り上げた専制政治、それに対するアンチテーゼが自由惑星同

盟の出発点だった。それから二百年を経て、玉座から逃げ出した幼帝と共に、新たな独裁者を討つというわけだ。これまでの150年の戦争はなんだったのか。虚空に消えた何億人もの人命と、それに数倍する遺族らの悲嘆と涙は。

だが、それは音なき雷鳴の先触れであった。銀河帝国正統政府首相 ヨッフエン・フォン・レムシャイドが読み上げた閣僚名簿に、イゼルローンの一員が含まれていた。軍務尚書 ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ上級大将と。

メルカッツにも、副官のシュナイダーにも、まさに青天の霹靂へきれきであった。敬愛する上官も自分も、まったく与りあずか知らぬことであつた。無論、彼らに売り込みなどしていない。

イゼルローンの司令官 ヤン・ウエンリーは、シュナイダーの弁明を当然のこととして受け入れてくれた。自分がレムシャイド伯爵でも、同様の判断をするだろう。他に候補など考えられないと。

意外なことに、同感の意を表したのは、ワルター・フォン・シェーンコップ少将であつた。亡命者やその子弟の軍関係者としては、メルカッツ中将に次ぐ階級の持ち主だ。事と次第によっては、その地位に任じられていたのは彼であつたかも知れ

ない。

今さら迷惑以外の何物でもないことを、彼ほど実感していた者もいなかった。ヤン・ウエンリーという、望みうる最上級の能力と寛容さを持つ上官からの異動先として、考え得る最低級の上司と地位と場所である。一兵も持たず、今までの所業を忘却し、お題目に縋って美貌の覇者を打ち倒すという、甘い夢を抱いている連中に仲間扱いなどされたくもない。

これには皆、相当に堪えた。イゼルローンの幕僚会議の席上、紅茶やコーヒーの代わりに、司令官秘蔵のブランデーが会議卓を一巡したほどだ。司令官を皮切りに、事務監が横合いから掠め取り、要塞防御指揮官まで手酌のリレーとなった。参謀長が酒瓶を捕獲したが、自分にも注ぐことは忘れなかった。素面しらふじゃやっていられんこともある。皇帝の逃亡劇自体が、ローエングラム公ラインハルトの故意によるものの可能性に思い至ったからだ。

巧緻を極める謀略のパズル。踊らされているのは同盟と帝国の旧体制派。では、帝国の新たな権力者にも、パートナーがいるのではないか。消去法を使用する必要もない。国家と呼べるものはあと一つしかないのだ。

自治領フェザン。帝国と同盟を結ぶもう一つの回廊。交易商人が、公式に国交のない二国間貿易で富を得ている。宇宙全人口400億人の0。5パーセント、20億人が宇宙の富の12パーセントを生みだす。帝国と同盟の総生産額にも、フェザンとの貿易が少なからず占められる。実態は、表面上の数値よりもさらに富裕とみてよいだろう。

ヤンの思考は、回転を始める。地球時代の十字軍の遠征、あるいは元帝国の拡大。その背後にいたのは商人たちだ。戦争は経済、経済は戦争。キャゼルヌが比喻として言ったことに、もう一つ加えよう。経済が戦争を生むことを。

茫洋と遠くを見るような黒い瞳。その見通す先は、永遠の夜の彼方なのだろうか。キャゼルヌとの毒舌合戦に反応もせず、行儀の悪い姿勢で考え込む上官を見て、美丈夫は思った。

会議の中で、ムライ参謀長がメルカツツに去就の表明を迫った際に、ようやく口を開いた。組織人が、自分の都合だけでどうできるものではない。上層部の押し付けには、自分も言いたいことが山ほどあると。論法よりも含まれた意図が、幕僚らを説得した。まったく、この黒髪の司令官ほどそれを言える権利のある者はい

ないだろう。

休息時間の際に、もっと言ってやればよかったのにと揶揄してやったが、この年少の上官はあくまで正論を述べた。公開の席上で、現役軍人が政治批判をするわけにはいかない。

『きれい』な人だ。瑣末な軍規軍律には緩やかだが、国家や軍の基本原則にはとことん厳しい。思うのは自由だが、言うのは必ずしも自由じゃない、シベリアンコントロール文民統制下の軍高官にとってはなおのことだと、言外に告げて。

柄にもなく、自由の意味を問うてしまったのは、メルカツツと祖父を重ねてしまったからか。亡命の際に、入国管理官から受けた冬の寒風よりも冷たい扱いと蔑むような目つき。これまで、誰にも明かしたことの無い二十八年前の出来事を、ヤンに語っていた。

すでに一度祖国の喪失を味わった。それが二度になっても驚きはしないと。言うだけ言って、彼に背を向けた。まったく自分らしくもない。ヤン・ウエンリーという人間には、心の内側を開かせてしまう何かがある。当のご本人は、肝心な部分を全く覗かせないくせに。

前線の軍人がいくら考えたところで、軍上層部や政府の決定の前には無力である。シェーンコップの白兵戦や射撃の弟子でもある、ユリアン・ミンツが准尉から少尉に昇格。10月5日までにフェザーン駐留武官として着任せよ。

その命令を知った時、彼を初めとした薔薇の騎士一同、忌々しげな舌打ちと毒舌を吐いた。

「まったく、よくもやってくれる。査問会の席上から、イゼルローンに急行していただいて、

ガイエスブルク要塞を撃破してくださった、国家の恩人に対する報償がこれだとはね」

シェーンコップは吐き捨てた。ヤンから、ユリアンに随行させる人員の選考を依頼されたのだ。こんな理不尽な命令、ヤンがその権力を用いれば撤回は容易い。だがそれをしない、いや、出来ないのがヤン・ウェンリーという人間なのだ。

「正気ならば、伏し拝んで厚遇し、閣下が十分に働ける環境を整えるものだろうが」薔薇の騎士連隊長のカスパール・リンツ大佐も、完全に同意した。

「確かにユリアンの手柄は大きなものです。昇進に異存はありません。16歳で少

尉でもね。

だが、主な戦功はスバルタニアンの撃墜成果と、帝国軍の作戦を見破ったことでしよう。

「なんで、フェザーンの地表に貼り付けておくんだか。意味がないし、もったいない」

そう言って、要塞防御指揮官の机上に、随員候補者のリストを音を立てて置いた。珍しいことである。第14代目の現連隊長は、卓越した白兵戦の技量と鍛え抜かれた体躯に似合わず、日常では温厚な男だ。素人画家として、歌い手としての技量も玄人はだしで、金銭があったら違う職を選んでいただろう。人文的な趣味も感応するの、ヤンに対する尊敬が深い。その被保護者に対しても、年齢の離れた兄のように、ほどよい客観性と親密さを両立させて接している。訓練の厳しさに、手心を加えるものではないが。

「いままでの功績を鑑みるというのなら、空戦隊のエース候補として訓練を続けるか、

ヤン提督の許で、参謀なり提督なりの修行を積むか。一貫性のかけらもない。

嫌がらせにしか思えませんかよ」

部下の指摘に、シェーンコップは尖り気味の顎をさすった。査問会の内容を漏らすようなヤンではない。彼を吊るし上げていた連中こそ、おおっぴらになどできなからう。

だが、壁にミリアム、障子にメアリーだったか？ 非公開非公式のメンバーにある程度の目星はついている。軍上層部のお偉いさんが、予定にない会合とやらで席を度々外せば、受付や執務室付きの女性士官が不審に思わないはずがない。彼らの観察眼には恐るべきものがある。上司の機嫌が斜めなのか、断崖絶壁と化しているのか、一転して平伏して震え上がっているのか。

ヤンを拘束した連中は、副官嬢にも尾行をつけ、行動を監視した。だが、シェーンコップに言わせれば、全く迂闊な片手落ちだ。同盟軍でも屈指の美人が誰の部下であるのか、知らぬ者などいない。クーデターで失墜するまで、父親はエリート軍高官でもあった。

従軍して以来『嫁に貰いたい女性士官』の首座を占めていたのだ。『結婚したい軍人首位』である上官と、なかなかいい勝負である。そんな彼女が三千年離れた

任地から、単身で首都に来るわけがないではないか。

当然、その上官で同盟軍一の名将はどうしたの？　ということになる。イゼルローンへの帝国軍襲撃のニュース、ヤン提督を、グリーンヒル大尉を見かけたという話。これらを総合すると、うちの上官がヤン提督に何かやって、逆襲を食らった、とピンとくるものだ。

女の噂とよくいうが、あれは噂になった時点で、状況証拠の収集と裏取りが完了している。信憑性は、十中八九から九割九分と思って差し支えない。この噂を拾ったのは、シェーンコップの彼女の一人だった。イゼルローンの通信オペレーターは、軍本部との通信時の四方山話よもやまを聞き逃さなかった。

恐らく、あの大人しそうな顔と言動に似合わない、強烈な一撃を食らわせたのだろう。後方勤務本部長の顔色は、面白いほど変色したそうだ。だが、喉元過ぎて何とやら、早速仕返しをおっ始めたようだった。それがこの人事なんだろう。シェーンコップは鼻を鳴らした。

「まあ、あの人のことだ。上の言うことに唯々諾々と従うわけじゃあるまい」  
デスクの上で、両手のひらを広げてみせる。

「ヤン提督から見れば理不尽だが、坊やにとっては出世でもある。表面上はな」

リンツのブルーグリーンの目に、実に面白くなさそうな光がよぎった。確かにそのとおりだ。危険な最前線から、この世の富と享樂を集める星への異動だ。普通だったら、立ち上がって小躍りし、せっせと荷造りを始めるだろう。それが不満になるのが、ヤン司令官の存在なのだった。

「確かに。ポプランあたりなら大喜びでしょう」

「それを邪魔するような人じゃないからな。正式な命令とあらば断れないし、奇蹟のヤンが、養子可愛さに命令を捻じ曲げたなんて言われてみる。傷付くのは坊やだろう」

上官の言葉に、リンツはしぶしぶながら頷いた。

「はあ、まあそうですね。ヤン提督のことだから、きっとユリアンを説得するでしょう。」

それにしても、昨年からこっち、やれ帰還兵の歓迎式典だ、クーデターの鎮圧だ、査問会に帝国の来襲だ、ですよ。上層部の連中は、ヤン提督を何だと思っているんでしょね」

「おまえの言わんとすることは想像がつく。だから、その先は言うな。

俺たちが口にするのは、いかにもまずい」

最近では七歳の皇帝陛下もやったことだった。そして、シェーンコップらの父母や祖父母らも。その道を、黒髪の名将が逆行しないとは考えないのだろうか。あの連中は。

皮肉っぽく考えたシェーンコップの脳裏に、不吉な雷光が閃いた。そうだった。帝国からの亡命者の経路は、一箇所だけだ。二十八年前に彼自身を通り、これから亜麻色の髪の少年が赴く場所。自由惑星同盟と銀河帝国が共存している、宇宙で唯一の惑星。その弁務官事務所の駐留武官が新たな役職だ。

あれもフェザン、これもフェザン、みんなフェザンだ。

彼は顎をさすった。ユリアン・ミンツという少年の最大の価値は、スパルタニアンの新人パイロットとしての功績ではなく、帝国軍の動きを見破った慧眼でもない。現在のところはまだ。

同盟軍一の名将、ヤン・ウェンリーの唯一人の家族だということだ。兄弟と父子の中間の年齢差の二人は、双方の美点をあわせたような関係を築いている。ヤンを

イゼルローン攻略という魔術に踏み切らせた、14歳の少年は16歳の少尉になった。もし、万が一、フェザーンで帝国軍に誘拐されでもしたら。唯一の家族を人質にとらえて、亡命や敗戦を強要されることになるかもしれない。そうなくても、ヤンは個を優先させるような人間ではない。司令官としての務めを果たすだろう。

これは、想像の先走りすぎ、妄想と言われる類のことか。だが、この数年ろくでもない予想ばかりが的中する。この人選は重要だろう。シェーンコップは、リンツの提出したリストを手に取り、頁を繰り始めた。

麦藁色の髪 of 素人画家は溜息をついて、見習いの昇進よりも切実な懸念を口にした。

「ですが、ユリアンがフェザーンに行ったら、ヤン提督の生活はどうなります？

一人暮らしなんかしたら、干物になっちまう」

この言葉に、シェーンコップは思わず手を止めた。先月からイゼルローン要塞の気温は、夏季の温度に調整されたのだが、彼はそれで夏バテをしているのである。最高気温は精々26、7度だ。幹部一同、彼に揶揄や小言、叱責を贈ったものだ。当のご本人は、ここ数年この時期は艦隊勤務だったからと言いついていたが。

それでも、なんとか散歩は続けているらしい。暑いからと、軍用ジャンパーを脱いだシャツ姿を見かける。肩の肉付きの薄さときたら、大将の階級を示す肩章がはみ出すんじゃないかという有様である。シェーンコップら、陸戦部隊の猛者を基準にするのも誤りではあるのだろうか。

「まあ、なんとかするだろう。俺たちが気を揉んでも始まらない」

本人が言うように、坊やが来るまではなんとかしてきたのだ。かびと埃を友にして。士官食堂は二十四時間営業だし、衣類はクリーニングに出せばいい。ヤンが旧友と再開したところで、命に関わるもんじゃない。

「だといいんですがね」

「少なくとも、火急の危機にはいたらんさ。坊やのほうが重要だ」

先ほどの考えを発展させるうちに、もっと危険なことがあるのに気がついてしまった。つい先日まで、お偉方は銀河帝国正統政府などという、笑止千万なもののでっち上げ、悦に入っていた。ローエングラム公が苛烈極まる口調で、幼帝の『亡命』を『誘拐』と弾劾するまでのことだが。

『誘拐』を『亡命』と言いたてることも可能なのだ。しかも、ユリアンの母は亡命

者の娘だった。つまり、帝国系三世ということになる。その面においても、薔薇の騎士としての資格を満たしていたのだ。無論、ヤンにそんな考えなどなかったろうが。『逆亡命』と喧伝すれば、保護者の立場は微妙なものになる。

同盟軍上層部が、そのように手を回さないとは限らない。ヤンの能力はこき使いたい、だが権限は抑えつきたいという連中だ。ヤンが蛇蝎のごとく嫌っている、元国防委員長で現最高評議会議長の息がたつぷりかかった奴らである。フェザン駐在弁務官事務所も、トリューニヒト派の巣窟だろう。

珍しく、皮肉の一つも言わずにリストに没頭するシェーンコップに、リンツもブルグリーンの目を険しくした。敬愛する元連隊長は、非常に危機察知能力が高く、何度も薔薇の騎士連隊を救ってきた。そのシェーンコップの灰褐色の目を鋭くさせるようなこととは。

「何か、他に必要なことはありませんか」

「そうだな。フェザンに詳しい奴から情報がほしいところだ」

シェーンコップは顎をさすりながら考えた。フェザン駐留武官というのは、昨今ではお飾りの色合いが濃かった。赴任する連中は、箔をつけようという軍高官

や政治家の子弟が多い。ここにはいないし、いても役立つ情報はないだろう。フェザーンの盛り場や、賄賂を握らせてくれる連中の情報をもらっても仕方ない。

そう、情報だ。そういえば、専門家が一名いるにはいた。より上手なお人の対応から、自分が正体を見破り、二週間ほど睡眠を味あわせてやった奴が。なんとも頼りないが、食った飯の分は働かせるべきだろう。

「まあ、詳しくないなら詳しくなるようにどやしつけなければいい。

バグダッシュ中佐を呼べ。諜報、防諜の訓練もしないとならんだらう。坊やと随員の双方に」

「了解しました」

見事な敬礼をしてリンツが退出し、シェーンコップはリストの確認を続けた。

## 蝙蝠のダイアローグ

亡命者と転向者の問答。複雑なアイデンティティーを持つ二人。

ほどなくして人選は決まった。少尉の随員だから、それ以下の階級であること。信頼がおけて、腕が立ち、口が堅いこと。なにより、16歳の上官に従い、支えられるような人柄の持ち主でなくてはならない。この五つの条件を備える人間はそう多くはない。

心優しき褐色の牡牛という風情のルイ・マシユンゴ准尉。ヤンの査問会にも随行させた男だ。彼はその容貌や姓が示すように、直近の亡命者の子弟ではない。祖母は亡命者の娘だったが、同盟の人間は大同小異である。

元々は一般の陸戦隊員だったが、ずばぬけた勇猛さでシェーンコップらに見出され、最精鋭たる薔薇ローゼンリッターの騎士に編入されたのだ。本人は、むしろ名誉に思いこれを受けたのだった。こういう隊員も、最近はそう珍しくはない。イゼルローン攻略の立

役者という声望のお陰であった。

なにより、マシユンゴの容貌は、帝国人とは異質である。ユリアンの傍らにこの目立つ男がいれば、一種の境界線として作用するだろう。極力一人にはならない、しないように言い聞かせる必要があるが。

シェーンコップに呼び出されたバグダツシユは、辟易とした表情だった。彼を昏睡状態にした美丈夫も苦手なら、不埒な真似すりゃ即射殺という様子の美少年は天敵に等しい。冷ややかなダークブラウンの視線は、潔癖で妥協の余地がなさそうだ。

「諜報ちようほうと防諜ぼうちようの訓練ですか。前者は捨てましょう」

バグダツシユの言葉に、シェーンコップは灰褐色の片眉を上げた。

「ほう、なぜだ」

「あの二人は、容貌が目立ちすぎる。諜報というのは印象に残る人間には不向きだ。こんな短期間でノウハウを仕込むのは不可能です。

無理なことなら最初からやらないに限る。そのほうがボロが出ません」

「ふん、一理あるな。なかなか口が達者じゃないか」

たっぷりと毒を塗した言葉の棘に、肩を竦めて両手を開く。

「むしろ、フェザーンの状況、雰囲気を広く収集させたほうがいいでしょう。

彼らは目や耳です。分析する頭脳は別にいる。同盟軍の最高峰がね」

シェーンコップは再び鼻を鳴らした。こちらも一理ある。

「では、後者はどうする」

「最低ラインの守り方を教えましょう。だが多くを望んじゃいけない。

なにしろ、たったの十六歳だ。

そんなに割り切れるものじゃないし、平静を保てるもんじゃない。

あの少年にはあからさまな弱点がある」

それは、黒髪のプロテクターだ。師父は弟子に愛情を注いでいるが、逆からのベクトルの熱量はさらに高い。思春期の青少年しか持ち得ない、純粋な思慕と尊敬だろう。

「互いが互いの泣きどころ、というわけか。

確かにあれは見えない。貴官でなくてもわかるだろうな」

シェーンコップのあてこすりに、情報参謀はさらに肩を竦めた。

「シェーンコップ少将、そんなにいびらんで下さいよ。

小官はこれから本丸を攻めなくてはならないのですからな」

「これで音をあげているようじゃ、あの坊やは攻略できんぞ」

「やれやれ、期間も短いことですし、基本的なことしか教えられませんかね。」

何を言われても怒らず、何も言い返さない。だが、言った相手と内容を抑えさせる。

それが、ヤン・ウェンリーに関することでも。ここらあたりが限度でしょう。

ああいう、素直で潔癖なタイプには本質的に向きません」

「では、もう一人の方はどうなんだ？」

「そうですな……」

バグダツシユは、ルイ・マシユンゴ准尉ひととなりの為人をよくは知らない。筋骨逞しい

褐色の巨漢だが、おだやかな丸い目のおかげで心優しき牡牛といった風情の男だ。

しかし、能力については多少は知っている。その温和な印象とは裏腹に、ヤンの

護衛として、この白兵戦の名手が推挙する技量と勇猛さがある。状況判断や危機管

理の能力も高い。それもあって、グリーンヒル大尉もこの人選に賛成したのだ。

「いや、案外に向いているかも知れません」

ポーカーフェイスというのは、単なる無表情ではない。状況に応じて表情をコン

トロールすることだ。

「ああいう、能力と風貌が一致していない人間は、それだけで相手の意表をつきま  
すからな」

例えば我らが大将閣下のような。一方、その被保護者は、16歳で少尉、見るか  
らに利発な文武両道の美少年。あれには誰も騙されぬ。全力で警戒するに決まっ  
ている。向かないほうの代表格だ。

「例えは悪いですが、ミンツ少尉に囚に、あちらが目と耳になる。

おかしなもので、護衛を置き物だと勘違いする輩は多い。肉体派だとなおのこと  
だ」

陸戦隊員というのは、戦闘能力以外に、高度な判断力と統率行動を要求されるの  
だが、後方の連中はそれを理解していない。バグダッシュはそう指摘する。

「俺には、貴官の言うことが防諜というよりも、諜報そのものに聞こえるが」

バグダッシュも美丈夫にならって片眉を上げた。

「おっしゃるとおりですよ。諜インテリジェンス報スカウンターと防インテリジェンス諜スキューンは表裏一体。

防御が最大の攻撃となることが多々あります。

こちらが調べるまでもなく、相手に喋らせることができれば最上ですな。

だが、こんな小手先の防諜より、もっと重要なのはミンツ少年が身を守ることで「す」

さすがにシェーンコップの思惑は読まれていたようだった。

「彼はヤン提督の弱点だ。しかも、敵はフェザーンや帝国ばかりではありません」  
言わぬ先が示唆するのは、ヤンが心身を磨り減らして守っている祖国の上層部。  
彼に見限られるということを考え付かないのだろうか、あの馬鹿どもは。

「見える敵より見えざる敵が危険ということか。……厄介な話だ。

坊やは言質を取られぬよう、人質とされないように注力する。

マシユンゴはそれをサポートするということでもいいか、バグダッシュ中佐」

「ええ、イゼルローンでできる準備はそのぐらいですよ。

直行できるならもう少しの余裕もあるが、ハイネセンに寄ってから行けというお達しでは、

もう時間がない。ひととおり説明して、あとは情報分析の教科書でも渡すしかありません。

あの少年なら、それでも案外大丈夫に思えますがね」

イゼルローンからハイネセンへは三週間前後。ハイネセンからフェザーンは二週間前後。イゼルローンから直行すれば、その半分の日数で済む。ここにも軍上層部の悪意を感じた。

「本を読んだだけで、身に付くものでもないだろう」

「実際はね。小官だって、それなりに苦労はしてきたんですよ」

バグダツシユは苦笑した。ヤンの副官を気にしたばかりに、彼とシェーンコップに目論見を見破られてしまい、二週間も眠りの神の園ヒュブノスに閉じ込められていたのだ。そのせいで、自分に対するこの少将閣下の評価はからい。だが、あの魔術師に手の内を隠し通すのは難しい。

「言い訳させていただけるなら、ヤン提督は情報参謀としての才能も極めて高いんです。

第七次攻略戦の立役者たる、シェーンコップ少将ならばお分かりでしょう」

たしかにあれば、帝国軍の要塞司令官と駐留艦隊司令官が同格の大将であり、不仲であることを推察したからこそその詭計トリックだった。

「エル・ファシルの脱出行、というのは我々の間では語り草でしてね。

リンチ少将が、本気で民間人の脱出に取り組んでいないことを見抜いているんですよ。

彼の逃亡をじっと待ち、帝国軍がそれを得々として追い回したところで、

レーダー透過装置を切り、流星群のふりをして逃げ出したわけです。

三重の心理的陥穽を駆使した作戦だ。士官学校出た二年目でやることじゃないですよ」

「なるほど。シトレ退役元帥の秘蔵っ子はその頃からというわけか」

「いや、違うと思いますね。

在学中に戦術シミュレーションで、首席を破ったという頃からでしょう。

相手の為人ひととなりと戦術を見抜き、ご自分の戦術に嵌めて勝っている。

こっちも士官学校生にできるレベルじゃない。シトレ元帥にだって野心はあったはずだ。

見込みのありそうな生徒には目をつけるでしょうからね」

「は、士官学校と言うのもずいぶん生臭いものだ」

「だが、絶好の派閥の形成源にもなる。730年マフィアの例を挙げるまでもなくね」

シトレ派とロボス派。二人の退役元帥の権力闘争は、はみ出し者の薔薇の騎士連隊まで噂が響いていた。たった二年前の話である。いまにして思えば、ずいぶんと暢気なものだった。

「ユリアン少年にはその恩恵がありません。

教師陣は、ヤン提督ばかりでなくスター揃いですがね。

白兵戦と射撃にシェーンコップ少将、空戦はハートの撃墜王<sup>エリス</sup>。

こちらの方は、現役の士官候補生より恵まれた環境でしょう」

両手を広げて、芝居がかった口調で続けるバグダッシュに、シェーンコップはにべもない。

「別に貴官のお世辞はいらん」

灰褐色の視線の温度は、ダークブラウンのものに劣るとも勝らない。だが、バグダッシュはめげなかった。ユリアン・ミンツが真に必要なものとして持っているものは、もう一つあるのだ。苦手な相手だが、それを伝えないのはフェアではない。

「お世辞ではありませんよ。しかし、個人授業の悲しき、諜報以前の問題がある」  
シェーンコップは上げた片眉だけで、先を促す。

「帝国語の語学力です。あの少年は優等生ですが、それについては中卒レベルでしよう」

シェーンコップは黒髪の上官の癖がうつったように、灰褐色の髪をかき上げた。彼よりもはるかに様になっていたが。

「盲点だったな。そっちは保護者に似たわけか」

ヤンの帝国語の話法は、たどたどしくてアクセントも怪しい。はっきりいって下手くそだ。

「いや、閣下は読み書きの方は達人だったか。聞き取りにも問題はないな」

メルカッツ提督らとの会話はつかえながらだが、双方の意思疎通は円滑である。活字中毒者は、本にも国籍差別をしなかった。ヤンの帝国語の文章は丁寧なのだ。文語調でやや硬いが、それが逆にメルカッツらには馴染みやすい。イゼルローン攻略の台詞集は、ヤン・ウェンリー作なのだが、シェーンコップが添削をする必要はなかった。

シェーンコップがなりすましたラーケン大佐は、三十代はじめて巡洋艦の艦長という設定である。その年齢でその階級に到達するには、貴族号フッオンの所有者であるほうが自然だ。平民だと逆に目立つ。単に帝国語会話というだけでなく、貴族階級のアクセントで話す人材が必要だったのだ。シェーンコップでなければならなかった理由の一つである。

「ええ、ヤン提督はいささかいびつですが、帝国語の語学力はかなり高いですよ。通信教育履修者にはありがちで、読み書きと聞き取りに偏っていますかね。」

だが単語を沢山知っていれば、わりとどうにでもなります」

シェーンコップは顎をさすった。なるほど、こうやって個人史から能力、性格を推し量るのも情報分析というやつか。

「閣下の語学力が、通信教育の産物だとはな。情報参謀というのはそういう仕事か」  
「まあ、そういうことですよ。」

つけくわえるなら、訛りの少ない綺麗な同盟語と、教師っぽい口調も恐らくはね。  
よっぱおかしこど御蚕おかしこぐるみで育てられたんでしょう。船員なんて軍人より口汚い連中

だ」

「は、なるほどな。俺が貴官の仕事を理解したところで、さてどうする。

坊やに今から促成の帝国語講座を開くか？」

「いやいや、まだ時間はあるでしょう」

先ほどと矛盾することを言うバグダツシュに、灰褐色の眼光が続きを促す。

「ハイネセンまで同道するお人らがいるでしょう。ざっと三週間強の時間だ。

あちらさんにとっても、同盟のことを聞くチャンスです。どうです、一石二鳥だ」

「ふん、一石三鳥というのが正しいだろうが。貴官が坊やに長々講義をしなくてはよくなるしな」

しかし、バグダツシュの言の有用性を認めない訳にはいかないだろう。

「だが、たしかにいい方法だ。シュナイダー大尉は、比較的年齢も近いからな。

帝国軍の若手について詳しいだろう。それこそ、金髪の坊やの臣下にも」

「それもあるが、彼にとってミンツ少年の情報は極めて有益なはずですよ」

「あの坊やが、ヤン提督のことをやすやすと話すとは思えんが」

「いや、同盟での日常生活の情報ですよ。ここは元が帝国の施設だった。

施設設備の多くはそのままですから、彼らもいままで大きな不自由はなかったで

しょう。

だが、ハイネセンに行けばそういうわけにもいなくなる。

家事の達人のアドバイスは値千金のはずだ」

虚をつかれる言葉だったが、シェーンコップは、祖父母のことを思い出した。下級官吏だった祖父は、それでもかろうじて同盟語の読み書きができた。しかし、花嫁修業の後で家庭に入り、良き妻良き母として暮らした祖母は、亡くなるまで同盟語が不自由だった。一番幼くて、同盟の教育を受けたワルター少年が、祖父亡き後、祖母に代わって書類を書き、ソーシャルワーカーの助けを借りて役所に掛け合ったものだった。メルカッツ提督らは随分とまじだろうが、それでも家電一つとっても戸惑うことだろう。

「そういう考え方もあるわけか」

そして膝を打つ思いであった。メルカッツらへの通訳に起用されたのはそれが理由だろう。個人史からの性格と能力への推察。亡命時の想いは語らずとも、シェーンコップの経歴は記録されている。

しかも、キャゼルヌ少将の組織工学論講座の開始を兼ねていた。敏腕軍官僚作成

『同盟軍の規則等に関するダイジェスト』は、これを正式採用すべきだという完成度だった。帝国語に訳しながら、何枚の鱗が目から落ちたことだろう。まったく、あのお人は一石で何羽の鳥を落としているのか。

「ええ、思わぬ情報に、思わぬ価値がある。どうです、なかなかいい教材でしょう。我々がメルカツ提督らに根回しすることなく、ミンツ少尉がそれに気付くか否か。

彼への講義に、小官からもヒントを入れておきますがね」

確かに面白い。シェーンコップは端正な唇の片側を上げた。嫌いな奴からの挑戦だ。努力家の秀才は負けず嫌いでもある。だが、潔癖でかたくなな一面もある少年だ。反発することも充分予想できる。

「気がつかなかったらどうする」

「マシユンゴ准尉にはそのものずばりを告げておく。

リミットを定めて、それまでに気がつけば少尉の勝ち、准尉から教えられたら小官の勝ち」

バグダツシユはにやりと笑った。凶太いものである。軍事クーデターの際、諜報

とヤンの暗殺の密命を帯びて潜入したのに、ここに居ついてしまっているだけのことはあった。

「生きた教育でしょう？ 嫌な相手の言葉にもヒントは潜んでいる。

そして、情報の所有者を分け、リスクを分散化するというやつですよ」

ちよつとした意地悪さえ教材にしてしまう。この横着者の要領のよさを、ヤンは気に入っているのかも知れない。彼自身、自分にとって価値が低ければ手抜きをし、苦手だったら得意な者に任せているのだからして。

尖り気味の顎をさする美丈夫に、バグダッシュは告げた。

「ですから少将、こいつは内緒にしておいてください。

ヤン提督の翼の下を出れば、すぐに嵐の中だ。

あの少年にとってハイネセンへの旅が最後の準備期間になります」

「随分と親身じゃないか」

シェーンコップの揶揄に、バグダッシュは応えた。

「ヤン提督というのは、私ら諜報畑の人間にとっては、このうえなく興味深い題材ですよ。」

一年余り観察させてもらいましたが、いまだに底が見えない。

軍事の天才で、あれだけ色々な物が見えてしまうというのに、

根っこは真つ当な凡人だということが信じがたい。

天才なんていうのは、大体がどこかしら普通じゃないもんです。

あのローエングラム公なんて、相当に苛烈な人柄で、

信じられないほど精力的だとは思いませんか」

眩い黄金の髪と、超巨星の高温の輝きを閉じ込めた蒼い瞳。類まれな美貌は、霸気に満ち溢れている。寵姫の弟という立場、先帝の引き立てがあったにせよ、貴族たちとの権力闘争に打ち勝ち、若くして帝国と帝国軍を掌握したのも頷ける。ヤンが、天才、歴史上の奇蹟と絶賛するのも無理はない。

だが、身近に、例えばヤンの地位にいたら、部下としては堪らない。軽口のひとつ、からかいの一言も掛けられるものではない。要塞事務監のように、子どもの授業参観に休みをもらうなんて言い出せないだろう。シェーンコップは無言で頷いた。

「でも、ヤン提督はそうじゃない。ですから、私はあの少年にも興味があるんです

よ。

親の顔は子どもを通しても見えるものだ。そして、そう思うのは私だけではない」  
ヤンの庇護を離れ、だがその影はユリアン・ミンツについて回る。七光と陰口を叩かれ、時にはそれによって保護者もろとも中傷されるだろう。おそらくは生涯にわたって。それが短いものとなってしまいか、長きにわたるかはわからないが。  
「だから、これから広い視野と聡い耳が必要になる。その手始めに小官なりの饒別ですよ。」

あの時殺さないでもらった、礼をしないといけませんからな。彼の保護者殿にも」  
シェーンコップは鼻を鳴らして、バグダッシュの言を容れた。ユリアンもそうだが、マシユンゴにも一通りの講義を受けさせなければならぬ。時間が残されていないのは、こちらと同様である。

---

マシユンゴ准尉の家族については筆者の創作です。

だが同盟国民は、三代ぐらいさかのぼれば、誰しも亡命者の血を引いていると思  
います。

## さらば、梟の眠り

本作は、銀河英雄伝説原作に準拠しております。アスターテの会戦の際、パトロクロスに居合わせていたのは、ラオ大佐となっております。

その後、ヤンがどうやって被保護者を説得したものか、他人は詳細を知らない。だが、少尉となった亜麻色の髪の少年が、イゼルローンの知人らに出立の挨拶を始めた。薔薇ローゼンリッターの騎士連隊や、シェーンコップの所にもやってきた。本人が覚悟を決めたのに、保護者はまだ心配しているので、シェーンコップはからかってやったものだ。

ヤンがユリアンの事でおたおたするのはいつもの光景だったが、敏腕家のキャゼルヌ少将まで仕事を手につかない様子である。聞けば、後輩に12歳のユリアン少年を引き合わせたのは彼であるそう。キャゼルヌはヤンの6歳年上だから、ユリアンとは21歳差。こっちは若い父親の年齢だ。

家族ぐるみで付き合い、娘を嫁にやってもいいとまで言っていたというのは、そ  
ばかすの提督からの情報である。人事査定に厳しい子煩悩に、そこまで買われると  
は大したものだ。令嬢は上が八つで、下が五つだというが、ヤンとグリーンヒル大  
尉の年齢差は七歳。ありえない年齢差ではないな、とシェーンコップを笑わせたも  
のだ。

こちらも付き合いの長い、ヤンの後輩は少年に幸運のお守りを授けたのだとい  
う。門限破りを見逃してくれた、黒い髪の上級生と巡りあうきっかけになった物だ  
から、霊験はあらたかだと笑っていた。

そこまでならいいのだが、いつも齒の立たない先輩二人が浮き足立っているのを  
見て、大いに笑い、主任参謀にたしなめられていた。

「だってなあ。ヤン先輩、結婚もまだなのにあれじゃ花嫁の父だぜ。」

キャゼル又先輩はまだわかるけどな、あの二人があんなに動揺するとは」

肩まで揺らして笑い転げている。食堂で会ったシェーンコップは肩を竦めた。ラ  
オ大佐は渋い顔で首を振りつつ、常識的に諭した。

「愛情深くて結構なことじゃありませんか。」

16歳で少尉になって、遠くフェザーンに行くんですよ。

進学とは訳が違います。心配するのは当然でしょう」

「ほ、本番がどうなるのか考えてもみろよ」

後は言葉にならず、笑い声が続いた。たしかに気持ちはわからんでもない。娘二人の父親の。ユリアンは薔薇の騎士達にとっても、出来のいい教え子だった。

「つまり、キャゼルヌ事務監のお眼鏡に適うには、

あの坊やぐらいの能力と性格、容姿が要求されるわけか」

シェーンコップの指摘に、ラオ大佐はぼそりと呟いた。

「道理で、後輩らに嫁にやるとはおっしゃらないはずですね」

それを合図に、アッテンボローの笑いが咳に変わった。

「貴官もなかなか言うじゃないか」

シェーンコップは片眉をあげて感心し、アッテンボローは咳き込みながら反論した。

「ば、馬鹿を言うなよ。一体いくつ離れていると思ってるんだ。

それこそ、両親の結婚式に出た間柄なんだぜ。俺もヤン先輩も」

泡を食った上官に、ラオは身も蓋もない追撃をした。

「心配はいりません。」

お嬢さんたちが妙齢を迎えた頃には、父親の後輩のおじさんなんて鼻にもひっかけませんから」

「貴官、そんな言い方、誰に教わったんだ……」

どこかの保護者が被保護者にした問いかけを、奇しくも後輩が再現した。

「小官はここに来て、大人しくしていると損だということを周囲から学びました」

返答もまた似たりよったりである。ここにも朱に交わった者がいた。

「……なあラオ、おまえ何でそんなに俺に辛くあたるんだよ」

やはり家族ではなくて他人の差、アッテンボローはようよう質問した。問われた方は、腕組みをして冷たい視線を送る。

「小官が、アスターテで第二艦隊旗艦パトロククロスの艦橋にいたことをお忘れですか」

命の恩人にする冷やかしは、断固として許しがたい。その主張に、頷く者、賛同の声を上げる者。周囲のテーブルにいた少なからぬ人数に、シェーンコップは改めて驚かされる。

戦闘で死亡し、あるいは引き抜かれたとはいえ、ヤン艦隊の中核は、アスターテ会戦の生還者が占めている。その後のイゼルローン攻略戦、アムリッツアの会戦、一連のクーデターの鎮圧、そしてガイエスブルク要塞の襲来と、同盟軍でも最激戦を戦い抜いてきた将兵である。司令官の『不敗』という形容詞の、生きた証明者たちだ。

「すまん、俺が悪かったよ……」

旗色の悪さを感じて謝罪をする、アムリッツア以降加入の新参者。

「小官に謝罪をなさるのでしたら、ヤン提督を支えて差し上げてください。」

閣下の立場を羨ましく思う、小官らのためにも

「よくぞ言った！ そのとおりだ」

「ラオ大佐に敬礼！」

周囲から再び賛同の声。ラオ大佐を讃える声と敬礼に拍手まで沸き起こる。シェーンコップも思わずその輪に加わった。白兵戦で鍛えられた手からの拍手は、一際大きく食堂に響き渡る。時ならぬざわめきに、遅れて昼食にやってきた司令部一同が、怪訝な顔でその集団を見ていた。

「なんだ、あれは」

「さあ、なんでしょうなあ」

「せっかくの食事時に騒がしいことです。困ったものだ」

「おや、珍しい。中心はラオ大佐ですね」

中心人物に首を捻るフィツシャー。分艦隊指揮官として、アッテンボローの幕僚は顔見知りである。

「堅実で騒ぎを起こすような男ではないのですが」

ムライは中心人物の周囲に、反骨提督と年長の色事師を認め、眉間に皺を寄せた。原因はどちらかか、双方だろう。真面目な人間まで、赤くなるのはいかなものか。傍らで黒い頭を傾げる司令官にも、多大な責任があると思うのだ。また、後で釘を刺しておこう。彼ら二人に。ムライはそう決心した。日頃の行いとはいかに大切なものか、若き少将らが思い知るの間もなくのことだった。

そんな小喜劇を挟みながら、カレンダーのページは薄くなっていく。出立の準備の合間に、バグダッシュとマシュングの授業を横目で眺めもした。意外なことに、シェーンコップにとっても役立つ内容だった。

壁のミリアムと障子のメアリー。花園の花々も葉を茂らせて、根を延ばす。……なるほど。美丈夫は顎をさすり、褐色の偉丈夫の愛嬌のある丸い目は、いつもと変わらぬ様子だった。様々なえげつない諜報工作への対応方法を、理解したのか否か。たしかに、諜報に思わぬ適性があるのかもしれない。ちゃんとわかっているのならば、だが。

ヤンはなにやら考え事に耽<sup>ふけ</sup>っていた。時には、メルカッツらと膝を突き合わせて話をしていくようだった。メルカッツと副官のシュナイダーは、銀河帝国正統政府に合流しなくてはならない。ユリアンやマシユンゴと、ハイネセンまで同じ艦で旅をするのだ。その道中についていろいろ頼んでいるのか、あるいは銀河帝国の新たな権力者の情報を収集しているのか。

バグダツシュの言葉を聞いた今、さらに興味深い。あの平凡で、一見ぼんやりとした顔の下、その脳髓が何を考えているのか。こんなに見ていて面白い相手はいない。

民主共和制国家の軍人として、危険な考えだというのは重々承知している。しかし、ヤンも認める思想の自由は、憲章にも掲げられたこの国の根幹だ。だから、

シェーンコップが不埒な考えを持つのだって、立派に自由なのである。

金髪の坊やは、思うがままにその才能を發揮し、宇宙を動かしている。ヤン自身も亜麻色の髪の坊やに、似たようなことを望んでいる。人生を切り拓く力を身につけてほしいと。

だったら、黒髪の青年も宇宙を動かしてみればいい。その瞳の見通すまま、その才の翼の及ぶ彼方まで。

九月一日に行われた、メルカツ中将や、ミンツ少尉らの出立式の際に、いつもの二秒スピーチを返上して、百倍も時間を掛けた。その三分半に満たない時間に、六回も同じフレーズを繰り返すくらいだったら、さっさとこんな壊れかけた籠から飛び出してしまえばいい。強い要望とやらで、家族を引き離し、心強い味方をもぎ取ろうとする政府に、彼が忠誠を捧げる価値があるとは思えなかった。

ヤンが価値を見出しているのは、民主共和制そのものなのだろう。英雄や名主に依存することなく、凡人の一人ひとりの衆知を集め、よりよい方向を目指す制度だ。それは貴重で正しい考えだろう。例えば平和な世の中なら。

戦時においては迂遠というしかなく、天才の即断即決に常に先手を取られてしま

う。現在の同盟と帝国の図式そのままだ。

シェーンコップはふと苦笑した。なんのかんとユリアンを心配したのは、ヤンが帝国に寝返るような人間ではないことを熟知しているからだ。そして、第二のルドルフになれるような人間でないことも。

殺した敵、死なせた部下、そして殺した味方。それを忘れ、ローエングラム公の手を握ったり、同盟の最高権力者に君臨することなどできない。才能ではなく性格的に。だからこそ、あれだけの数の兵員が、最初から今まで生還を続けて、なお彼の麾下を望むのだから。

大人しい怠け者の昼行灯。だが、それはイゼルローンでまどろむ昼の顔。リンツが描いていた、なんとも幸せそうな寝顔が続くのも正直悪くはない。シェーンコップの希望である、150歳での老衰死が叶うならば万々歳だ。

だが、それはヤンの本質の一面に過ぎない。永遠の夜に見せるのは違う顔だ。彼方までを見通す瞳と微かな音まで聴く耳の所有者。音もなく飛翔し、生を刈り取る猛禽。まるで梟のようだ。同盟軍史上最高の智将に、知の女神ミネルバの遣いというのは相応しいではないか。

九月二十日。エルウィン・ヨーゼフ二世の廃立が帝国宰相ローエングラム公より公表される。即位したのは、カザリン・ケートヘン一世。生後八か月の女兒だった。ヤンは、その発表を一目悠然と聞いていたが、幹部らにはわかった。

ここ三ヶ月、昼寝して給料を貰っていた寝ぼすが、ようやく覚醒したことが。——ミネルバの梟は黄昏に飛び立つ。

結びの言葉は、ドイツの哲学者、ヘーゲルの言葉より。革新的な思想や思想家は、文化の末期に現れると言うほどの意味。この時期は、宇宙暦8世紀の世紀末にもあたります。

そして、梟が活動を始めるのも夕暮れから。一見愛嬌のある姿をしているが、大種は翼長が二メートルを越える、強力無比な夜の捕食者。

日本の最大種はシマフクロウ。アイヌ神話に最高神コロタン・カムイとして謳われている。



## 第9話 女帝と女王

### 黄金樹の墓碑銘

女帝の意味について。

なお、ルドルフの娘婿については独自設定としております。

銀河帝国正統政府と共に亡命してきたエルウィン・ヨーゼフ二世の廃立はいりゆうが公表されたのは、宇宙暦798年9月20日のことであった。自由惑星同盟政府の最高評議会議長が、得意の絶頂で彼らとの協定を発表してから、たったの一月後である。イゼルローン要塞の幹部らが、それを知ったのはもう少し後であった。

「大喜びでおいしそうな餌に食いついたら、でかい釣り針がついていたということですね」

灰褐色の髪的美丈夫は、同色の双眸にたっぷりと侮蔑の色を乗せて皮肉った。

「しかも、餌は毒入り。

食いついたお偉方からやられるならまだいいが、そうはならないでしょう」

黒髪の上官は、上の空で返答もしなかった。その気力も失せていたのである。銀河帝国正統政府に軍務尚書として指名をされて、イゼルローンから旅立ったメルカツ中將らが、ハイネセンについたかどうかという時点でこれだ。なんと迅速であることか。こちらは三ヶ月前の来襲の後始末に、ようやく終わりが見えてきたというのに。

ユリアンに託したビュコック長官への親書の内容が、現実のものとなるのにどれほど余裕があるだろうか。さしものヤンも暗澹あんたんとしてしまう。

新たに登極したのは、カザリン・ケートヘン一世。ゴールデンバウム朝最初の女帝だ。おんとし御年、八ヶ月。幼児どころではない、乳児である。これを聞いた時に、ヤンは王朝の名義変更を悟った。

初代皇帝ドルフが遺訓としたのは、男子相続である。これは古くからのしきたりだが、人間が本能的に知っていた遺伝学に合致する。男性の性別を決定するY遺伝子は、父からしか受け継がれない。つまり、父系を遡れば皇祖に戻るということ

である。

ゴールデンバウム朝二代皇帝は、彼の長女カタリナの子であるので、すでに直系男子ではない。ただし、カタリナの夫はルドルフの父系の男性だ。Y遺伝子は皇祖と同一の物である。

女帝の息子は、夫のY遺伝子を受け継ぐ。彼が即位をすると『夫の家名朝』の開始となるのだ。ゆえに、長い歴史の中でも女王、女帝というのは非常手段なのだ。夫の父系が帝室の血を受けていれればいいのだが、そんな血族はもういない。皇帝の兄弟は、大公や公爵といった地位に叙爵される。リップシュタット戦役で滅びた門閥貴族らであった。

生後八か月の乳飲み子に、皇帝の務めを果たせるはずがない。いずれ実質的な権力者に皇位を禅譲ぜんじょうさせられるだろう。万が一、彼女が成人まで在位し、その息子が即位をしても『ゴールデンバウム朝』は終わりだ。ルドルフの遺訓などもはや守る価値はないと。

貴族の中にはローエングラム公に与した者も、中立を保った者もいるはずだ。エルウィン・ヨーゼフ二世を奉じた際の、大義名分ももう不要というわけだった。

いや、ルドルフへの激しい憎悪さえ感じさせる。これは、恐らくローエングラム公の策ではない。彼は愛する者を奪った相手には苛烈きわまりないが、赤ん坊をこんな方向に利用する人物ではない。そして、女帝の歴史的な意味を知らないだろう。ヤンは、美貌の帝国宰相の部下の人名録を思い返した。人工の目と貴族号フフォンの所有者。まだ四十歳前だというのに、褐色の髪は半ばが白い。パウエル・フォン・オーベルシュタイン上級大将。

彼の策だろう。ルドルフが掲げた劣悪遺伝子排除法は、名君と名高いマクシミリアン・ヨーゼフ二世が有名無実化した。晴眼帝の異名を持つ彼は、帝位を巡って毒殺されかけ、ほとんど視力を失った。その経験から、障害者などの社会的弱者を救済し、帝国を建て直したのだった。

しかし、法律が有名無実化されても、偏見は一朝一夕に拭い去れるものではない。貴族階級出身者が、義眼を必要とする先天性の障害を持っていたら、受ける差別はいかばかりか。彼はゴールデンバウム王朝そのものを呪ったことだろう。皇帝個人に対するラインハルトの怒りとは質を異にする。

「やられたなあ……」

ヤンはベレーを脱ぐと、髪を乱雑にかき混ぜた。実に辛辣で、いっそ見事だ。

「彼らは、ポーカーをやっているつもり相手に、切札を引かせたと思わせて、ゲームをババ抜きに変えてしまったんだよ」

「なるほど、皇帝はババということですか。厄介ですなあ。

相手にもう一度引かせるということは、できないもんでしょかね？」

パトリチェフは、司令官が口を濁した言葉をずばりと口にした。そして、次の疑問は、ゲームになぞらえてはいたが、高度な謀略戦の示唆であった。本来陰湿な内容を要約して、ユーモラスにさえ表現できる。ヤンにとっては非常にありがたい存在だ。

「我々の手持ちのカードの数によるね」

これが最後のカードなら、ゲームは終了だ。

「じゃあ、結局こっちが『先帝』の面倒をみなけりゃならんということですか」

エルウィン・ヨーゼフは現在七歳。同盟の義務教育の就学年齢を過ぎている。少なくともあと八年、中学校を卒業するまでは保護が必要であろう。

「うん、人道的にはそうするしかないんだが……」

司令官の返答に、片眉を上げたのはシェーンコップ少将だった。

「ほう、それ以外の方法があるということですか」

「あちらが言うように『誘拐』の被害者として対処する方法もなくはない。

わが国の国是に、真っ向から対立してしまうけれどね。

『犯人』を拘束して本国へ送還、被害者は保護者の元にお返しする」

おっとりとした様子で、口にするのは悪どいマキャベリズムである。エルウィン・ヨーゼフの保護者は、ローエングラム公ラインハルトだった。

「たしかに来る者は拒まずでしたな。だが閣下、それは可能ですか。

小官の祖父は、借金を踏み倒して逃げてきたわけですから、立派に犯罪者だ」

シェーンコップはやや意地悪く問いかけた。今後、帝国での犯罪歴に左右されるなら、亡命自体の受け入れができなくなるだろう。

しかし、相手は一枚上手であった。伊達に16歳で父親の事故の後始末をつけたわけではない。

「いや、それは違うよ。同盟には、いよいよ借金が払えなくなったら破産という方法がある。」

帝国にそれがないなら、それは帝国法の欠陥であるという判断になるからね。

誘拐とは訳が違うよ」

「そういうものですか」

シェーンコップは尖り気味の顎をさすった。

「そうだよ。皇帝や貴族が正妻のほかに、側室を抱えるのは法律で認められているだろう」

ヤンは、同盟軍屈指の色事師にふさわしい帝国法を持ちだした。

「まあ、そうですが」

「だが、帝国で認められていても、同盟じゃ当然駄目さ。

帝国法では可でも、同盟では不可。あるいはその逆だってある。

だが、誘拐は同盟だろうと帝国だろうと重罪だ。違いますか？」

ヤンが水を向けたのは、薄茶色の髪と目をした敏腕の軍官僚だった。イゼルローン要塞の建材調達のために、フェザーンを利用して三角貿易をやるぐらいである。この面々、いや同盟軍の中でも、最も帝国法にも詳しい部類に属する。

「ああ、被害者と加害者の身分による刑罰の差が、呆れるぐらいに著しかったがな。

貴族が貴族を誘拐、しかも被害者が未成年なら最低でも懲役10年以上だろう。

そいつも、あの金髪美形が大幅に改正したようだがね。全く大したもんだよ」

ヤンは頷いた。自分の考えに渋面を浮かべながら対処法の一つを述べる。

「犯罪による逃亡ということで亡命の無効を宣告し、帝国国民に戻ってもらおうんだよ。」

国交のない国の犯罪は裁けないから、さっき言ったような方法をとる。まず、無理だがね」

「小官にはなかなか名案に思えますが、どうしてです？」

士官学校の先輩と後輩は顔を見合わせた。そして、揃って溜息を吐く。

「犯罪だという証拠が、ローエングラム公の主張しかないからだ。」

それに基づいてこの方法をとったら、フレイムアップでっちあげの時代に逆戻りさ。

絶対に世論が納得しない。そんなことを最高評議会議長がやるかな」

「そういうことだ。あれだけ派手に宇宙に喧伝してしまったからな。」

ここで手のひらを返したら、同盟は信義に値せずとして、やはり共犯の扱いをされる」

双方とも顔色が冴えない。キャゼル又は無論だが、ヤンもイゼルローン奪取後に講和を図るといふ青写真の下で、かなり帝国の法律を調べていたのだ。

「法律で対処すると、法律で反撃されるのがオチだ。」

「国交がないから、自国の法律で相手を裁くことになってしまおう」

「それに、なにか問題があるとおっしゃる？」

「大ありだよ。あちらには大逆罪があるんだ」

ヤンの指摘に、皆苦い顔をした。メルカツツから聞いた、リップシュタット戦役の状況。その後、フェザーンを経由して伝えられてくる貴族たちの末路。無味乾燥な官報に秘められているのは、残存した門閥貴族らの粛清であった。

「銀河帝国正統政府は、新帝に対する大逆罪を問われてしまう。」

「死罪にあたる重罪で、おまけに一族郎党連座させられる。」

『共犯者』である同盟も、その責を免れることはできないだろう」

「そいつは撤廃しなかったんですな」

「パトリチェフは太い腕を組んだ。」

「ローエングラム公が、玉座を篡奪さんだつするのも時間の問題ということですか」

ムライが眉間に皺を寄せた。

「ああ、そうだよ。女帝を立てたのはそういうことだ」

皆が怪訝な顔をする。男女同権が当然の同盟では、理解しにくいことだ。ヤンは頭をかきながら、歴史的な男子相続と女帝の意味を語った。

「キャゼル又事務監、どうかお気を悪くしないでくださいね」

そう前置きして。ヤンの説明が終わると、皆が言葉も出ない有様であった。

「ちよっと待ってくださいよ、ヤン司令官。」

ローエングラム公に味方した貴族だっているはずでしょう」

三人の姉を持つ、末っ子長男の立ち直りが一番早かった。士官学校時代、ずいぶん戦史の勉強を見てもらい、ヤンの歴史論に馴染みがあったおかげである。

「そいつらをどうする気なんです」

「どうするもこうするも、これからは俺の時代だと宣告したわけだ。

気に入らないなら野垂れ死ね、という意味に決まっている」

こう吐き捨てたのは、下級とはいえ貴族の血を引く美丈夫である。

「そのぐらい、あの金髪の坊やの権勢は絶大だということだ。」

平民と貴族に公平な法律を導入したのなら、絶対多数の平民が味方になる」

「シェーンコップ少将の言うとおりだ。

ゴールデンバウム王朝を緩やかに奪うことだってできたんだ。

先帝の孫娘のどちらかと結婚すればいいんだからね。

彼ほどの美貌と才能の持ち主なら、どんな女性も首を縦に振る。

リップシュタット戦役は起こらないか、もっと規模が小さく済んだだろう。

選ばれなかった方が、反旗を翻す程度の私戦になったろうね」

こう言った上官の背後、金褐色の頭部が微かに横に振られた。肝心の相手は全く気がつかなかったが。

「なるほど。あんな大規模な内戦の果てに権力を握ったというのは、

目指すものが違うということですか」

察しのよい副参謀長が、相槌を打つ。

「彼が目指しているのは、ゴールデンバウム王朝の打倒と払拭さ」

またも言葉をなくした幹部らに、ヤンは静かな笑みを向けた。不変の定理を述べる学者のように、淡々と言葉を続ける。

「永遠に続くものは、この宇宙のどこにもない。

いや、宇宙だってやがて終焉を迎える。王朝や国も同様だよ」

ヤン艦隊の幹部らの胆力は、低いものではない。だが、彼らの背筋を戦慄が駆け上がった。その中で、ムライが小さく咳払いをした。

「しかし、これは政治で解決すべき問題です。我々、軍人がどうこうできるものではない」

「たしかにそうだね、ムライ参謀長」

ヤンは同意したが、シェーンコップには歯痒い。

「ならば閣下、そのお考えを軍上層部に上申すべきではありませんか。

文ぶん民みん統とう制せいと遠慮をなさっている場合ではない」

「上申ならしているさ」

短く言ったのはキャゼルヌだった。ヤンが査問会から帰ってくるまで、司令官代理を務め、残務処理の多くを担ったのは彼である。ガイエスブルク要塞来襲、第八次イゼルローン攻略戦の戦況報告は、彼とヤンが連名で行っている。

「まさか、皇帝が亡命してくるなんて思わなかったが、

帝国が再び大規模な侵攻を行う可能性が高いことはな

苦々しい口調であった。

「あれから三か月以上経ったが梨のつぶてだ。帝国は次から次へと策を打ってくるのにな。

こっちも後始末で大わらわだが、同盟政府も、

幼い皇帝陛下の面倒を見るのにさぞや忙しいんだろうさ。

そんなものは、腕のいいベビーシッターに任せておけば済むことだがね」

宙域の残骸は八割以上の処理が完了し、要塞のクレーター工事の進捗状況も悪くはない。だが、ハードウェアが整ってきても、それを運用するソフトウェアが不足していた。

特に、要塞防御部門の兵員である。いままで同盟軍には宇宙要塞というものがなかった。それを帝国語のマニユアルを発掘して、同盟語に翻訳することから始め、演習を重ねてようやく育った兵員だったのだ。新人を補充しても、元の質に戻すのは容易くはない。

「では、何度でも繰り返し上申すべきだ。

一度無視されたからといって、諦めるのは我々に対して無責任でしょう」

シェーンコップの反論に、口を開きかけた先輩と後輩をヤンは手ぶりで制した。「シェーンコップ少将、聞いてくれ。政治的決着は相手が乗ってくれてこそだよ。残念だが、既に時期を逸している。」

相手はカードをうっちゃって、銃を抜こうとしているんだからね。

そっちは政府の仕事さ。我々は給料分の仕事をすればいい」

「ふん、給料泥棒がよくもおっしゃるもんだ」

事務監が揶揄<sup>やゆ</sup>としては鋭すぎる相の手を入れ、参謀長は再び咳払いをした。黒髪の司令官は、困ったような笑いを浮かべた。

「それが続いてくれる方が、同盟にとっては幸福なんだがなあ。」

私たちがやるべきは、ローエングラム公の出方に気を揉むことではなく、まずは、イゼルローン要塞と、グエン提督らの不在、二つの穴を塞ぐことなんだ。とりあえず、作業を進めよう。各部門長は進捗状況の報告を頼むよ。

期限は三日後。簡単な概要で結構だから」

やれ、司令官がようやくお目覚めのようにだ。穏やかな様子はいつもおりだった

が、イゼルローンの幹部は遠雷の響きを聞く思いであった。

---

参考文献は『アダムの呪い』作者…ブライアン・サイクス氏です。Y遺伝子に関するノンフィクションです。なお、女帝、女王の意味については事実です。欧州の王家のように、親戚同士である場合は影響が少ないのですが。

## 女王陛下に紅茶を二杯

ここまで、ちらちらと顔を見せていた魔術師の呪い。その正体は……。

残念なことに人的資源マンパワーの補充は望み薄であった。ヤンの帰還に同行した援軍5500隻のうち、アラルコン提督に率いられていた方は甚大な被害を出した。彼はグエン提督とともに敗走する帝国軍を深追いし、双方とも帝国の双壁の手にかかったのだ。

もう一人、ライオネル・モートン少将指揮する艦隊には、大きな被害はなかった。彼の手腕と力量は信頼が置けるものであり、ヤンもイゼルローンに残留してくれるように願い出ていた。駄目で元々、だが賭けなければ当たりも出ないということ。しかし、この援軍は宇宙艦隊司令長官のビュコックが、なんとかかき集めてくれた虎の子の戦力だった。やはりというかなんというか、却下されてしまった。それでも、宙域の残骸の除去や、哨戒にも大きな協力をしてくれた。宙域を片付けな

と、<sup>ハイネセン</sup>首都星に帰還するのも危険であったからだ。それもひととおり片付き、ユリアンより一足先にハイネセンに帰って行った。

それと入れ替わるように、クレーター修理の企業複合体<sup>ゼネコン</sup>がイゼルローン入りした。現在、建設作業艇が大穴に取りつき、修理を進めている。それがまた、絶景とつかつか圧巻というか、技術って凄いとヤンを唸らせた。司令官執務室にやってきたキャゼルヌに、あの艦、そこらの軍艦よりも高価いだろうなと呟いたら、数字の達人はあっさりと言った。

「ああ、一隻<sup>ヒューペリオン</sup>がお前さんの旗艦二隻に相当するぞ。万が一のことがあってはまずい。あれが退くまでは、要塞周辺の艦隊演習は禁止だからな」

「頼まれたってごめんですよ！」

ヤンは行儀悪く座っていた椅子から、危うく転げ落ちるところであった。それが三隻作業中である。恐ろしくて、艦隊など出せやしない。なんとか転落を免れたので、二人は応接ソファに座を移した。

副官嬢が、紅茶と珈琲を運んで来てくれたが、両方ともなんだかえらく色が濃い。口をつけた先輩と後輩は、無言になった。薄茶と黒の目が、薄めるために琥珀色の

液体を求めて彷徨<sup>さまよ</sup>う。しかし卓上にはなかった。

ややあつて、キャゼルヌが口を開く。

「だが、あの工事に影響しない部分の要塞砲台や、雷神の槌<sup>トールハンマー</sup>は使用ができる。オペレーターに算出させて、管制にも反映済みだ。

さあ、さっさと撃つて、せつせと宇宙塵<sup>デブリ</sup>を片付けろ。宙港周りを中心にな。

また追加の建材が入ってくるんだ」

同盟軍一の智将も、この先輩にかかつては掃除夫も同然である。

「はあ、わかりましたよ。ちょっとね、調べてみたいことがあるので、

私とスタッフでやらせていただいてもいいでしょうかね」

「かまわんさ。駐留艦隊の連中もあれには相当参っていたからな」

駐留艦隊の少将から大佐級が参加した、雷神の槌の砲撃演習。標的は、かつてガイエスブルク要塞と帝国艦隊であったもの。残骸になった無機物と有機物。

「帝国の要塞司令官と、駐留艦隊司令官の不仲の原因の一つだと思うんですよ。

戦艦乗りにしてみれば、安全なところから強力無比な兵器を撃っているだけだと思ふ。

だが、雷神の槌の砲撃を指示する側は、その強大さに尻込みをするはずですよ。キャゼルヌは思わず頷いた。

「味方を巻き込まないようにしなければならぬ。

だが敵だからといって一方的な虐殺をしていいものかとね。

シェーンコップまでそう言うくらいです。大変な重圧ですよ。

それを理解せず、雷神の槌の威を借りて、好きに戦っては危なくなると安全地帯に戻ってくる。

なんと気楽な戦艦乗りだと思ってしまうようになる」

「なるほどな。それでおまえさん、あの見学をさせたのか」

「そこまで計算づくじゃありませんが、安全な場所であっても、

決して容易いものではない、というのは知って欲しかったんですよ。

司令官は私が兼任ですが、部下の方はそういうわけにはいきません。

互いの仕事が見えにくいと、いろいろ不満も溜まるでしょう」

ヤンは何げなく口にしたのだが、キャゼルヌは溜息を吐いて同意した。

「たしかにな。」

普段のおまえを見てると、司令官はサインをするだけの簡単なお仕事だと思うかな」

「先輩にはいつもお世話を掛けて、すみませんね」

「いや、いいさ。部下や敵の命を計算するより、物資や人件費の金勘定の方が楽さね。」

「だがなあ、ヤン。俺はおまえじゃないんで、やはりもしもを考えずにはいられないんだ」

キャゼルヌの珍しい口調に、ヤンは黒い頭を傾げた。

「どうしましたか、急にしみじみしちゃって」

「ユリアンがフェザーンに行ったのを見てな。あの子の父親は俺の部下だったことがある。」

「ちょうど十年前、おまえがエル・ファシルの脱出行を終えたころだよ」

黒い瞳が少し瞳られる。

「それは初耳です」

「戦死したのは、俺の部署から次の異動先だからな。」

いや、ユリアンの父親のこともそうだが、おまえさん、あの時退役したがついてただろう」

「ええ、まだ年金は貰えないからって、先輩に止められましたよね」

ヤンは苦笑いを浮かべる。あの非常識な昇進で、出世は打ち止めだと思っていたものだった。

「ああ。きっと芸能界に引っぱり込まれ、いずれ政界からお呼びがかかると言っ  
な」

「美女と一緒に『私が選んだ究極の紅茶』とかCMで言うんですよね」

自分で言っちょつと身震いしてしまう。これは無理だ。そして、ヨブ・トリューニヒト氏やネグロポンティ氏と席を同じくするわけだ。駄目、とにかく駄目。渋い表情で、更に渋い紅茶を啜り、ヤンもしみじみ寂しくなった。

「そういえば、そんなことも言ったな。だが、今にして思うんだが、止めなきゃよ  
かったよ」

「冗談でも勘弁してくださいよ」

「真面目な話さ。この前の女帝の即位のニュースの時、おまえが色々言っただろう。

それで思ったんだよ。同盟に必要なのは名将ではなく、まともな政治家なんじゃないかとな。

おまえが政治家になっていたら、今よりもまじだったんじゃないかとね。

帝国とも、おまえ自身にも。おまえだったら帝国逆進攻には反対しただろう」

キャゼルヌの言葉に、ヤンは髪をかきあげた。記憶力のいい人というのも、一面で大変だ。ちょっとしたことでも、ずっとずっと覚えているんだから。そんなに気に病む必要なんてないのに。

「ですが、ローエングラム公の天才は変わりません。イゼルローンが帝国のものだったら、

アマリッツアは起こらなくても、帝国の侵攻はもっとスムーズだったと思いますよ」

「そんなもんかね」

キャゼルヌは苦く言って、更に苦い珈琲を啜った。彼は薄茶の瞳を漆黒の水面に向け、眉間に皺を寄せた。その表情がカップの中に写りこんでいる。これは後輩にも自分の胃腸にもよろしくない。グリーンヒル大尉には、教育的指導が必要だろう。

「歴史のもしもを数えてもしかたがないとはそういうことです。

だから先輩、あの時の笑い話を気に病む必要なんてありませんよ」

「究極の紅茶か？　だが、まずは普通でいいと思うぞ、俺はな」

料理名人の夫の言に、乾いた笑い声を上げるしかない独り者である。だが、それでふっと思いついたのだった。密命を指示していた技術士官からの課題を。

その後、ヤンと技術スタッフらが、雷神の槌の砲撃訓練兼宙域の清掃を開始したが、誰もあまり気にしなかった。ガイエスブルクの残骸処理は、すでに常態化した光景になっていたからだ。イゼルローンにも60兆トンの質量なりの引力があるので、処理を繰り返しても宇宙塵が寄ってくる。

もしも、シェーンコップ少将が管制室に同席していたら、砲撃の合図と発射の間差を不審に思ったかもしれない。だが、彼は彼で要塞砲台の補充兵の訓練が忙しく、ヤンに同席するどころではなかった。艦隊戦の名将は、狙点や攻撃範囲の見極めも優れている。今さら手出しもいらないかと、本来の職務を優先させたのだ。半ば、ヤンの狙いのとおり。

漆黒の魔術師が、白銀の女王にかけた呪い。

呪文によって、女王の剣を封印し、違う呪文によって抜刀させる。

新たな呪文に魅了された彼女は、使い古された言葉に耳を傾けなくなる。

ただ、その呪文のあまりのセンスのなさに、技術士官達は困惑したが。

「ヤン提督、本当にこのキーワードでよろしいのでしょうか」

「うん、かまわないよ。あんまり洒落た言葉だと、

似たようなCMを傍受して不具合が起これると困るだろう」

ヤンはもっともらしく言って、不器用に片目を瞑ってみせた。内心では、己の言語センスの乏しさに落胆をしていたが。これじゃ、キャゼル先輩のキャッチコピーの方がまだましだ。

「は、了解しました。ではどの回路に潜ませますか？」

「そうだね……」

ヤンは黒髪をかきまわした。

「ガイエスブルク要塞主砲の被弾エリアに、生きているコンピュータはあるかい？」

指示を受けた技術士官は、司令官の指示に絶句した。そこは、ガイエスブルク要

塞の主砲の直撃を受け、兵員の多くが死亡。残留放射能のせいで、近寄ることもできない。遺体の収容が可能になるのは、五年後との試算が出されたばかりだった。砲台は壊れ、操作する兵員はいない。だが、すべての機器の機能が失われたわけはなかった。

「お待ちください、ただいま調査します」

ややあって、彼は返答した。

「ありました。LB29ブロックの機器に、正常に稼働できるものがあります。

中央管制室へのアクセスにも問題はありません。中央管制室回線の任意切断、接続も可能です」

「じゃあ、そのコンピュータにしてくれ。

あと、二つ目の呪文の受付は、宙港管制室からもできるように頼むよ」  
「了解しました」

「ありがとう。引き続き、内緒にしておいてくれ。たのんだよ」

技術士官らは、労いの言葉を口にする司令官に敬礼をした。

ヤンは無抵抗主義者ではない。一発殴られたら、1。1倍ぐらいにはお返しを

してやりたいのだ。あのエリアに取り残された、二度と目覚めぬ兵士たち。

もしも、ヤンの予測が的中してしまつたら、五年後によくやく可能となる遺体の収容は不可能だ。それまで、彼らには罍の番人となつてもらおう。あそこの検査までは咄嗟に思いつかないだろう。そして、呪いの箱を物理的に除去することもできない。

魔術師が女王に捧げる二杯の紅茶は、甘い毒に満ちていた。

## 余話 ティータイムの接遇研修

フレデリカ・グリーンヒルは困惑した。急に人事研修の通知が舞い込んできたからである。命令権者は、イゼルローン要塞事務監 アレックス・キャゼルヌ少将。これは納得ができる。

日時は明日の14時から。ちょっと急すぎる。こういう人事研修は、二週間前には通知が来るものだ。幸い、明日は大きな予定は入っていないが、あのキャゼルヌ少将がこんな余裕のない日程を組むものだろうか。

そして場所を見て、ますます訳が分からなくなつた。要塞事務監執務室、及び給湯室。タイトルは『接遇研修』とある。そして、講師がアッシュフォード少佐。キャゼルヌの副官的な役割の女性である。

フレデリカは考え込んでしまった。直属の上官であるヤン司令官や、彼の幕僚に對して、不適切な対応をしたのだろうか。従軍してからの二年目で、副官という一人職に就いた。自分なりに一生懸命やってきたつもりだったが、やはり至らぬところがあったのだろうか、と。

半個艦隊を率いることになった駆け出しの提督。フレデリカが配属された時のヤン少将である。エル・ファシルの脱出行の時とさほど変わらない、年齢に比べて若々しい青年だった。物慣れぬ印象の、ちょっと頼りなさそうな表情はあの頃のまま、それは今も変わらない。

変わったのは、彼の地位と立場だった。フレデリカが着任して早々に成功させた第七次イゼルローン攻略戦で、中将に昇進。直後に行われた帝国逆進攻。その最後のアムリッツアの会戦で、同盟軍は二十万人に及ぶ未帰還者を出す。歴史的な大敗であった。そのなかにあつて、殿軍を務めて味方の生還に尽力し、自らの艦隊も七割以上の生還を誇る。その功績により、大将に昇進。彼が少将に昇格したアスターテ会戦から、一年で三階級の昇進である。将官にあつては、史上最短記録と言えよう。

その後の軍事クーデターを鎮圧し、先日の帝国軍による第八次イゼルローン攻略戦も退けた。同盟軍の艦隊司令官の多くが、アスターテとアムリッツアの会戦で、戦死してしまったのは事実だが、同盟軍史上最高の名将という評価は過大なものではないと思う。

軍事クーデターの首謀者は、彼女の父だった。その場で罷免ひめんや更迭こうてつをされても仕方なかったのに、ヤンはフレデリカをずっと信任してくれている。時折、副官と事務監任せの給料泥棒に変身することがあるが、彼が勤勉になるのは動乱が襲ってくる前兆だった。

先日の幼帝の廃位と女帝の即位のニュースに接して、ヤンは歴史愛好家らしい女帝論を語った。それは伊達と酔狂の青年提督も、不敵で不逞な白兵戦の名手も、神経が特殊鋼ワイヤー製の事務の達人も、一様に言葉を失うものだった。

男子相続とは、初代皇帝のY遺伝子を継ぐためのもの。Y遺伝子は父親からしか受け継がれない。女帝が立ち、その息子が次の皇帝になると、夫の遺伝子の王朝の開始となる。ゴールデンバウム王朝が存続するには、女帝の夫は初代皇帝のY遺伝子を持つ者でなくてはならない。それは皇帝の兄弟に連なる、大公家や公爵家の男性。リップシュタット戦役で粛清された、高位の門閥貴族である。その血を持つ者を、ことごとく滅ぼしてから女帝を立てた。おまえの息子は、ゴールデンバウムの男ではない。もう現王朝は終わりだ。十数年待つ必要はないという意味だと。

一同が絶句し、口論となりかける場面もあったが、司令官の一声で治まった。そ

して、ヤンが久々に給料泥棒から目覚めて、再起動を開始した。

その矢先に、急の人事研修。余程に悪い事をしてしまったのかと、フレデリカが動揺するのも当然だった。ヤンは怠け者ではあったが、穏やかで紳士的な上官だった。知らず知らずの内に、非礼を働いているのかも知れない。講師役も、先日育児休暇から復帰したばかりで、よく知らない女性少佐である。フレデリカとは階級の差が一つだが、これはヤンの戦功の余慶である。従軍してまだ四年目なのだ。考え出すと、色々思い出されて、くよくよしたり、恥ずかしくなったり。コンピューターの又従姉妹と言われた記憶力も、プラス面ばかりではないのだった。

あまり寝付けなかったその翌日。それでも若さのお陰で、目立つほどの隈はできずに済んだ。いつもより、ややしつかりとファンデーションを塗り、頬紅を広めに刷いた。とりあえず、これでいいだろう。彼女は気を取り直して出勤した。

午後の研修は気がかりではあるが、仕事は毎日待っている。ヤンが司令官らしいことを始めると、増加の一途を辿る。先日、ガイエスブルク要塞襲来後の、復旧状態の報告を求めたので、各部門から報告書が提出されてくるのだった。

ヤンは要塞防衛指揮官からの報告書を見て、くすりと微笑んだ。

「閣下、どうかさいましたか」

「いや、先生も生徒も両方優秀だなと思ったんだよ。

内容が見違えるほど、簡潔で具体的になっている。

おまけにページも少なく、結構結構」

「少ないほうがいいんでしょうか」

「決裁する方は楽だよ。隅々まで読める」

「まあ」

副官の声に、上官は黒髪をかきながら弁解をした。

「分かりやすい事は大事だよ。戦闘中に長々した文書を読んではいられないだろう。

普段の文書だって、ぱっと読めてぱっとわかったほうがいい」

「そうでしょうか」

なおも疑わしげなヘイゼルの瞳に、黒い瞳の持ち主は優しく諭す。

「世の中、君のように記憶力や処理能力に優れた人ばかりではないよ。

報告書や計画書に求められるのは、相手に直感的に分かることだ。

それが、昨日まで中学生だった兵士でもね」

「すみません、私があさはかでしたわ」

「いやあ、そんなに深刻にならなくてもいいよ。士官学校出はどうしても忘れてしまいがちだ。」

特に、イゼルローンの女性士官はみんな優等生だったろうからね」

そう言うあいだにも、報告書のページを繰って活字を追う視線は止まらない。最後まで読み終わると、大きく頷いて決裁欄にサインを記入する。その下に小さく、『大変素晴らしい』とコメントを書き加えた。

「じゃあ、こちらを届けておいてくれないか。」

それからグリーンヒル大尉、今日は研修だったね。頑張ってきたさい。

終了時刻が定時に近くなったら、直帰してくれてかまわないよ」

「ですが……」

「たまには、要塞管理部の友人とおしゃべりでもしてくるといい。」

雑談というのも大事な情報交換だからね。こっちはまあなんとかするから」

「はい、了解しました」

研修の開始まであと45分。要塞防御部のオフィスに寄っていても、そんなに

時間が掛かるものではない。要するに、顔つなぎのお使いを兼ねて、気分転換をしてきなさいという意味なのだろう。ヤンの出世のスピードでは、頻繁に昇進者研修への出席を求められていただろう。部下の憂鬱もお見通しということだった。

こうまで言われれば、断ることはできない。手元の情報端末で、シェーンコップ少将の在籍を確認し、これから決裁後の報告書をお持ちします、と伝えた。美丈夫の深い美声は、美女の訪問はいつでも歓迎だと笑い混じりのもので、フレデリカを苦笑させた。

徒歩で5分とかからない、要塞防衛指揮官のオフィス。灰褐色の髪と瞳の美丈夫に取り次いでもらうと、司令官の決裁済みの報告書を返却する。そのサインに添えられたコメントに、シェーンコップは整った片眉を上げた。

「グリーンヒル大尉、わざわざすまないな。」

『大変素晴らしい』とは光栄だと、ヤン提督に伝えておいてくれ」

「はい、そういたします。あの、シェーンコップ少将にお伺いしたいのですが」

美女の言葉に、問われた方は内心で首を捻った。この根っから育ちのいいお嬢様が、この俺に何を聞いてくるのだろうか。

「美人の質問も大歓迎だが、俺にわかる内容か？」

「事務部のアッシュフォード少佐、という方はご存知でしょうか」

「顔と名前以上の事は知らないな。9月の新年度から産休復帰してきた新顔だろう」

「少将がご存じということは、美人なんですな」

シェーンコップは肩を竦めてにやりと笑った。

「ご明察だ。アッシュブロンドにスカイブルーの目の、きりりとした美人だな。」

独身時代に知り合えなかったのは残念というところだ。

年齢は二十代の後半から終わりごろといったところか。しかし、敏腕だな」

ずいぶんよくご存じで。フレデリカは苦笑した。伊達に多くの浮き名を流してきたわけではない。だが、フレデリカは最後の言葉には頷いた。女性の後方職で、産休を挟んで20代後半の少佐というのは、かなり昇進が早い。そんな人が講師役になるとするのは、ひょっとして自分の仕事ぶりは相当まずいのだろうか。

「おやおや、あたり美女が暗い顔をするのもったいないな」

「いえ、なんでもありませんわ。シェーンコップ少将、ありがとうございました」

「俺の見たところ、アッテンボロー提督の同期か、後輩ぐらいだと思うがね。

だが、情報収集よりそろそろ行ったほうがいいだろうな。ご苦労だった」

「失礼いたしました」

どうやら、フレデリカの研修もご存じのようである。時間よりやや早いだが、彼女はそのままで塞事務務監執務室に向かった。受付役のブライス中尉に研修のために来訪した旨を伝える。

「はい、了解しました。グリーンヒル大尉、執務室に入室してください。

頑張ってきてくださいね」

赤毛の後輩は、灰色の目の片方を閉じて激励してくれた。フレデリカは大きく深呼吸した。ノックをして、姓と階級を告げる。キャゼルヌの声で、入室の許可が告げられる。

「失礼します」

マナーのとおり、声を掛け、ドアを開けて扉をくぐる。

「忙しいところ、急にすまんな」

薄茶色の髪と目の、ヤンにとって頭の上がらぬ先輩が、気さくな挨拶を掛けてき

た。

「まあ、そんなに硬くならんでいい。今日の研修というのはな、要するにお茶くみのやり方だ」

ヘイゼルの瞳を真ん丸にする美女に、隣に控えていた女性が声を掛ける。

「ほんとうにキャゼル又事務監もお人が悪いんですから。」

グリーンヒル大尉、小官が本日の講師、と言っているものかしらね。

アッシュフォード少佐です。短い時間ですが、よろしくね」

「は、はい、こちらこそよろしくお願ひします」

一瞬、呆然として慌てて敬礼をする。シェーンコップ少将が形容したとおりの美人が、それに苦笑いをした。

「キャゼル又事務監のおっしゃるとおり、そんなに硬くならないでいいわ。

ヤン提督の従卒だったミンツ少尉が異動して、貴官も仕事が増えたでしょう。

お茶くみに取られる時間も、正直馬鹿にならないでしょうからね」

フレデリカは思わず頷いた。

「司令部では貴官が最年少で一番階級も低いし、

紅一点だから貴官の仕事になってしまっているでしょうけど。

お茶を出す、出さないのルール作りの方法と、

お茶やコーヒーの淹れ方についての研修になります。

まずは、小官が淹れますから後ろで見えてね」

フレデリカは告げられた内容に、安堵の吐息をついた。よかった、てっきり嚴重注意がくるのだとばかり思っていた。

「はい、よろしくお願いします」

「アッシュフォード少佐はシロンの出身だからな。」

珈琲も紅茶も淹れるのが上手い。よく習うといいだろう」

「あの、ここの給湯室で研修を？」

「そうだとも」

キャゼルヌはさっさと執務机に戻った。

「俺が味見役さ。さあ、俺がよしと言えば、研修はそこで終了。」

もういい、と言えよしと言うまで日を替えて続行。今日で終わるように頑張ってくれ」

ヘイゼルの瞳が、スカイブルーの瞳を継るように見詰めた。アッシュフォード少佐は、四歳下の後輩の肩にぽんと手を置いた。美しい笑顔で一言。

「では、頑張りましたよ」

彼女が見本に淹れてくれた珈琲や紅茶は、本当に美味しかった。自分が淹れたものと比較すると、敬愛する上官に平伏して謝罪しなくてはならないだろう。

「この研修、一日で終わるのかしら」

フレデリカは蒼褪めて呟いた。ある意味、たいそう厳しい内容の研修であった。「違うわよ、グリーンヒル大尉。終わらせるの。」

ヤン提督とキャゼルヌ事務監の胃腸を悪くするわけにはいかないものにこやかにスパルタな発言をするお茶くみの達人。

「私、料理が苦手なんです」

「私が見たところ、一番の問題は経験不足ね。次は知識の不足。」

貴官、理数系は得意だったでしょう。料理は化学なのよ。

適切な素材の配合、適切な温度による調理、浸透圧の差によって調味料の加え方も変える」

料理とは咄嗟に結びつかない内容に、金褐色の髪の下の働きが止まる。それをよそに、月光色の短髪の美女の講義はまだ続く。

「お茶や珈琲も同じよ。お湯の沸騰のさせ方に注意して、酸素を水に残すように注意する。

その注ぎ方や湯温を変えることで、成分をバランスよく抽出させるの。

はい、これをよく読んでみて」

渡されたのは、お茶と珈琲の入れ方のレシピだった。ポットやカップの温め方まで、丁寧にタイムテーブル化されていて、まさに直感的に分かるようなものだった。「よく読んで、まずは一杯淹れてみましょう。

あなたが理解できてからでいいわ。キャゼルヌ事務監、時間制限は設けていないしね。

とりあえず、見本のおかわりはいかがかしら？ お茶菓子もあるわよ」

「いただきます」

「珈琲と紅茶、どちらにする？」

「半分ずつ、両方を」

真剣な表情で、レシピを熟読するお茶くみ初心者に、黒褐色と琥珀色を湛えたカップを出してやる。さらに真剣な面持ちで、その味見をする後輩に、少佐は笑い混じりに訊いた。

「お味はいかが？」

「本当に美味しいです。紅茶はミンツ少尉と同じくらい。

珈琲はホテル・ユーフォニアと同じくらいですわ」

「光栄ね。でもね、美味しいものを作るのに、眉間に皺を寄せては駄目よ。

お茶菓子も食べてごらんさい。ブライス中尉の自作だから」

言われるがままに、バターケーキを口に入れる。しっとりとして、ブランデーの香りがする。中に混ぜられているのは、薫り高いアールグレーの茶葉だった。こちらも本職顔負けの美味しさだった。

「こちらも本当に美味しいですわ」

「昨日非番だったから焼いたんですって。まめな子よね」

休日に、手作りのケーキを焼くというのがなんとも女性らしい。敗北感を覚えてしまう。

「ええ、本当に。皆さんすごいですね」

「あら、あなたの方がすごいし大変だと思うわよ。」

あなたと立場を交換するなんて言われても、ちょっと遠慮するわ。

ヤン提督の手助けをするなんて、あなた以外にできないわよ」

「ありがとうございます……」

なんだか、研修と称したティータイムになってしまっているがいいのだろうか。

「あなたも毎日大変でしょう。」

周りは一人を除いておじさんばかりだし、上官は色々と凄い人だし。

学生の頃は、あんなに出世するとは思わなかったんだけど」

「少佐は、学生時代のヤン提督をご存知なんですか？」

「私が入学したときにあちらは最上級生だったから、遠目に見るくらいだったけど。」

同期のラップ候補生や後輩のアッテンボロー提督のほうが目立っていたわね。

あと、キャゼルヌ事務監が士官学校事務局にいらして、当時から親しくしていた

わ。

目立つ人たちの大人しい友人って感じだった」

「閣下とお二人は、長いお付き合いだったんですね」

「そうよね。もう12年前のことだもの。本当に時の経つのは早いわね」  
フレデリカは思わず頷いた。

「あれから12年で、大將まで出世している人がいるのは不思議な気持ちだわ。

その人が、あの目立つ人たちの上官なんだから、わからないものね」

「よく覚えていらっしるんですね」

「あれだけ年齢差のある先輩後輩関係って、やっぱり珍しいもの。

狐と黒猫とシユナウツァー犬なんて、言ってた子もいたわよ」

目を真ん丸にしたフレデリカに、アツシユフォード少佐は微笑んだ。

「だって、ヤン提督とアツテンポロー提督は二歳の差だけけど、

キャゼル又事務監とは六歳と八歳差よ。よくも話が合うものだと思ったわ」

彼女は軽やかな笑い声を上げた。

「言わば貴方とミンツ少尉くらいの差ね。キャゼル又事務監がとても大人に思えたし。」

あの頃は、イゼルローンで彼の副官にお茶の淹れ方を教えるなんて想像もしていなかったわ」

その麗しく優秀な副官が、こんなにお茶くみが下手だということも。これはあれだわ、と金髪碧眼の少佐は思う。『弟』の食生活の挺入れを始めたのね。だが、そんなことはおくびにも出さずに続けた。

「あなたもそんなに緊張せずに、息抜きでもしなさいよ。たまには単純労働もいいでしょう」

「あの、あまり単純じゃありませんけど」

フレデリカは眉を寄せた。このレシピに、ヤンが『大変素晴らしい』と記入するのは間違いない。だが、珈琲紅茶の淹れ方に、こんなに細かなテクニクがあるとは。単に湯を注ぐだけのものではなかったのだ。お湯の沸騰温度の見極めとか、カップやポットを温めるタイミングだとか、湯の注ぎ方だとか。フェザーンに立った亜麻色の髪の少年に、改めて尊敬の念を送らざるを得ない。

「ああ、それは簡単よ。勘で追いつかなければ、道具を使えばいいから。

茶葉用のスプーン、ケトル用の温度計、タイマーや砂時計とかね」

ふたたび目を丸くする見習いに、数字に強い達人は空色の片眼をつぶった。

「言ったでしょう、化学だって。実験と同じで正確に計時計量を行えば、

大きな失敗はしないものよ。名人には及ばなくてもね」

「あの、料理もですか？」

「ええ、もちろんよ。でも今日は珈琲と紅茶。今日のうちによし、と言っていただけかないと」

それも一発合格させてあげないと、『嫁』としての査定が下がりそう。彼女は、水っ腹になるのを覚悟した。そして今晚の不眠も。明日は午後半休だからまあいいけれど。

「はい！」

フレデリカは力強く返事をした。今日はいいが、明日からは本当に忙しい日程が始まる。その前に、もうちょっとまじになった紅茶を出してあげたい。『息子』が旅立って、元気がないあの人に。

その後、キャゼル又事務監に一発で『よし』を貰う事ができた。しかし、試作と試飲に付き合ってくれたアッシュフォード少佐は『もういい』の心境だっただろう。

両手の指を全部折るほどの回数であった。フレデリカも、その日の夕食が不要だったことは述べておく。

だがその結果、司令官が紅茶をブランデーで割る頻度が減少したことは、大いなる功績だった。



## 最終話 星を墜とす者

## Longest March

本作品では、同盟の年度の始まりを9月、年度末を8月と設定しております。なお、ドールトン事件については、筆者作『銀河英雄伝説外伝IF 辺塞寧日編 ヤン艦隊日誌』の設定を受け継いでおります。

---

ユリアンに託した信書は、確かにビュコック提督に届いたようだ。イゼルローン以外の経路による、帝国軍の侵攻の予測。その道はフェザーン。あちらを通られれば、ここを守る意味はなくなる。そうなった時、ヤンが最適と思われる行動を認める。自由惑星同盟軍宇宙艦隊司令長官の名において、出された命令書にはそうあった。

自由惑星同盟と銀河帝国を結ぶ、もう一つの回廊に位置する自治領。成立は百年

前、地球出身の商人レオポルド・ラープの強い働きかけによるものだ。正式な国交のない、二国間の貿易で潤う富の星。ヤンの被保護者だったユリアンが、先日赴任したばかりだ。人口は二十億人。宇宙の人口の0。5パーセントが、12パーセントの富を生み出す。

だが、フェザーンの真の宝は別にある。二国との貿易で得られた、どんな富よりも貴重なもの。両国の航路図だった。フェザーンが帝国の手に落ちるということは、この情報も彼らが手にすることとなる。この百五十年近い帝国との戦争で、同盟側にあった地の利もまた失われる。

帝国軍と初めて戦った、リン・パオとユースフ・トパロウルらによる、圧倒的な勝利を得たダゴンの殲滅戦<sup>せんめつ</sup>。同盟軍史上最高の英雄、ブルース・アッシュビーによる第二次ティアマト会戦。専制君主から国を守るといふ、強い意志による人の和以外には、唯一とっていい同盟の有利性だった。

考えながら、ヤンは黒髪をかき回して呟いた。

「なんてことだ」

既に自分は過去形で思考をしている。杞憂であってほしい。

だが、自分でも思いつくような策を、あの奇跡のような天才が考え付かないはずはない。

フェザーン商人に、帝国侵攻を示唆することによる抵抗戦についても上申をしたが、これは他人様ひとさまの懐と命をあてにした策であり、効果があるとは思えなかった。ヤンも商人の子だからわかる。長いものには巻かれるし、命あつての物種だというのが商人の思考法だ。

フェザーンは、帝国貴族資本にとって大株主だった。今までフェザーンを経由した同盟への侵攻案がそじょう狙上そじょうに上つても、大貴族らを通じて圧力を掛け、実現をさせてこなかったはずだ。だが、大貴族が滅び、彼らの企業は国有化された。フェザーンが保有する株券は紙屑になつただろう。こうなると、帝国の侵攻に対して撃肘せいちゆうする術はない。門閥貴族に対する、苛烈な肅清は同盟の侵攻への布石だったのであろうか。

「まあ、そうだとしか考えられないけどね」

ヤンは、溜息と共にぬるくなった紅茶を飲み下した。先日の接遇研修のおかげである。冷めたら飲めないほどの渋みはなくなった。亜麻色の髪の紅茶名人には及

ばないが、自分で淹れるよりずっと美味しい。もうブランデーで希釈する必要もない。要塞事務監と講師に限りない感謝の念を捧げるヤンだった。

まったく、ローエングラム公は天才だ。遙か高みへと駆け上がる黄金の有翼獅子<sup>グリフォン</sup>。飛翔する鳥は巨体を持たず、敵を咬み裂く牙もない。獅子の瞳は遠くを見通すことはなく、その歩みは飛翔より遅い。一つでも凡人が持ちうる才ではないのに、双方を兼ね備えるか。まさしく、神話の幻獣<sup>なぞら</sup>に擬えるのにふさわしい。あの容姿も神の大盤振る舞いに思えてくる。

彼を筆頭に、帝国の双壁、そして綺羅、星のごとき将帥たち。謀臣のオーベルシュタイン上級大将。到底勝てる陣容ではない。兵法の基本の基本、数の論理は絶対の方程式だ。ヤン艦隊以外の第一、第五艦隊と各星系警備隊を総動員しても、ローエングラム公が動員しうる艦隊に質量ともに及ばないのは明らかだった。

しかし、なにも全員とやりあう必要はない。ヤンが思いついたのはそれであった。艦隊の数がほぼ同数であったら？　まだしも勝ち目が出てくるのではないか。

メルカツ提督からの情報には、興味深いことがあった。帝国元帥の特権のひとつが、元帥府の開設ができることだ。自分の下に、有力な子飼いの将帥を集め、彼

らは通常の人事異動から除外される。元帥を中心に、強力な集団が形成される。精兵を育てるうえで、確かに有効だった。えりすぐりの集団は、元帥に対して強い忠誠心を持つことだろう。ヤン艦隊の熟練者の引き抜かれぶりを思うと、羨ましいかぎりだ。

だが、一面では人事の固着化につながることもあった。言い方は悪いが、元帥のお友達集団だ。元帥という恒星の周りに、部下たる惑星が取り巻く。では、惑星同士の連携はいかほどのものであろうか。双壁と謳われる、ミッターマイヤーとロイエンタールの両提督が、親友だということは有名だ。だが、その他の将帥達は？ 僚友であると同時に、競争相手でもあるだろう。

近い将来に、皇帝となるだろうローエングラム公の寵に対しての。第八次イゼルローン攻略戦の司令官の敗因は、ヤンが思うにそれである。双壁と呼ばれる二人の戦功が一段高く、他の将帥は彼らを追う立場だ。

貴族とは名ばかりの境遇から、わずか21歳で帝国の実権を掌握した眩い超巨星。その青白い輝きを至近で見れば、目が眩むだろう。重力に引き寄せられるだろう。彼ら部下もまだ若く、いずれ劣らぬ才覚の持ち主らだ。我もと野心を燃やす。

だが、燃えている同士が近づくかどうかだ。参謀たるオーベルシュタインは、『皇帝ラインハルト』に匹敵するような存在を望まないことだろう。

絶対君主は、太陽であるべきだ。太陽に連星は必要ない。重力が乱れ、惑星同士がぶつかりあうことになる。傍らに控えていた、穏やかな赤い星の消失。そこには権力闘争が隠れていないか。

そして、孤独となった恒星を取り巻く、違う軌道を回る惑星たち。これ以上、惑星同士の軌道を結び付けようとはすまい。すでに二つの巨大惑星が近い位置にいるのだから。

ここに付け入る隙がないか。唯一の恒星が消失したとき、惑星はどうなるだろう。遙かな古代、征服王として名を轟かせたアレクサンダーは、征旅の途上で倒れた。後継者を定めなかった彼の死後、帝国は四分五裂した。ローエングラム公ラインハルトは未婚だ。少なくとも嫡出子はいない。彼の親族はグリューネワルト伯爵夫人アンネローゼだけだ。彼女は二代前の皇帝フリードリヒ四世の寵姫だったが、同じく子どもはいない。

血縁として立てるべき者がいないならば、部下がその跡を襲うというのは、古来

よりの世の習いである。どんな大帝国であろうとも玉座の定員は一人分だ。ラインハルトという絶対のカリスマだから、あれだけの将帥を従えられるのだ。他者がそれに倣えるかというのと、ヤンは疑問符をつける。

例えば双壁。ほぼ同等の武勲の所有者で親友同士。どちらかが上に立つのを相手が承服するだろうか。

あるいは、オーベルシュタイン上級大将。だが、同盟軍でも参謀は主流勢力ではない。

ヤンにも経験があるが、冷徹な献策をする者は忌避される。あの冷めて体温の低いような顔つきからみて、若く血気盛んなような提督たちという関係を築いているだろうか。顔に真っ直ぐで誠実と書いてあるようなミッターマイヤー提督あたりとは、水と油のような気がするのだが。

ロイエンタール提督は、知勇の均衡の取れた名将だ。退却戦の綺麗さを見るに、基本的には守成の人だと思われる。帝国国内に、赤ん坊の女帝だけが残されるといふ危険性に気が付くだろう。ローエングラム公は帝国宰相に過ぎないのだ。残った貴族の誰かが新たな帝国宰相になれば、現在の軍政は危うくなる。

まあ、こんな皮算用をしてもしょうがない。獲ろうとしているのは狸どころじゃなく、有翼の獅子だ。しかも、フェザン回廊からの侵攻が起こるといふ最悪の大前提がある。そしてフェザンを攻める際に、イゼルローンを野放しにしておくだろうか、という点だ。軍事において、二正面作戦は基本的には行うべきではない。だが、彼我の戦力差が圧倒的ならその限りではない。

「ま、放つといてはくれないだろうなあ。私が彼ならそうするさ」

ヤンはベレーを脱いで、黒髪をかき回した。ユリアンとメルカツツの出立式のために散髪したが、あれから二ヶ月近く。少々伸びかけてきた。冴えない表情とおさまりの悪い頭髪の下で、その頭脳は回転を加速させる。

悲観的というか、救いのない未来予想図だったが。同時、又は多少の時差を設けて、イゼルローン回廊とフェザン回廊の順に攻略する。ヤンをこちらに貼り付けておいて、通商の道であるフェザンを攻める。これには双璧をあててくるだろう。自由惑星同盟侵攻の先鋒であり、最大の難所でもある。

豊富な手持ちのカードから、最善の陣営で臨むに違いない。ラインハルトの天才性とは、正統的な正攻法を限りなく精密で壮大に計画し、狂いなく実施できる点に

あるのだから。わかっちゃいても手の施しようがない、というのが辛いところだ。フェザーンには手が届かない。では、イゼルローンを堅守するか。だが、それは無意味だ。フェザーン側からいくらでも帝国軍が攻め込める。あちらはもともと貿易の中心地だ。帝国側の輸送網も、同盟と同様元から整備されている。イゼルローン側の補給路の補強よりも容易であろう。

「困ったな。どうしたもんだろう」

ぶつぶつと呟きながら、ヤンは一見ぼんやりと書類の山を眺めていた。各部門から提出されてきた報告書に計画書。予算執行に関わる文書。今が、新年度が始まったばかりでよかった。昨年、捕虜交換式典に同行した際は、797年度予算要求書の提出時期と重なるため、キャゼルヌが火を吹かんばかりに憤ったものだ。

ヤンも随分と出発前にサインをさせられた。道中のドールトン事件で、ハイネセン到着が十日も遅れ、予定が大幅に狂ってしまったのは苦い思い出である。せめて、もう少し根回しができていればよかった。結局、三日間しかハイネセンには滞在できなかったのだ。あの時にジェシカ・エドワーズと会ったが、それは彼女との最後の別れになってしまった。

そんな脈絡のない連想の水底みなぞこから、脳の表層に浮かんできた水泡みなわが一つ。ヤンら一行が、輸送船の中で日程の遅れに右往左往していた時には、フィッシャー少将は異変に気がついていたらしい。艦隊運用の名手は、航法畑の出身でそちらの方が本職であった。本来バークラト星系に到着すべき日に、定時報告がないことを不審に思ったというのだ。バークラト星系には通信途絶域がないので、通信ができなくなることはない。予定の変動で、跳躍やハイネセンへの降下を行うなら、定時を待たずに連絡を入れるべきだと。

その翌日から、一切の連絡が途絶した。まさか、同盟中に所在確認の通信波を撒き散らすわけにはいかない。彼は管制センターの記録から、帰還兵輸送船団の足取りを探し出そうとした。口実にしたのは、イゼルローンの民間人の避難の想定。ちようど同等規模の船団の到達日時を知りたいという名目で、経路にあたる管制センターに調査を申し入れた。

その結果から、二月末にはハイネセンへの進路がねじ曲がり始めていたのを看破した。だが、三月六日以降は、帰還兵輸送団を見つけることはできなかった。

ハイネセンから千三百光年も離れた、恒星マズダクに突っ込まれる寸前だったと

聞き、あわや卒倒するところでした、といつも無口な人がヤンに語ったものだ。通信途絶直前の座標から、恒星マズダクに行くまでには、いくつもの危険地帯があったと彼は言った。例えば、光さえも逃れられない重力の渦、その一步手前の状態の中性子星などなど。

聞かなきやよかった、とヤンは思った。同行した男性陣も一樣に白茶けた表情になった。薔薇の騎士連隊長といい、空戦隊の二人の擊墜王エースといい、いずれも豪胆な連中である。被保護者と副官が席を外した時だったのは、実に行き届いた配慮だった。

アーレ・ハイネセンが始めた『長征一萬光年』で、バーラト星系などを発見するまで五十年を要した。ハイネセン自身も事故死し、四十万人の難民は四分の一にまで人数を減らしていた。帝国と同盟の間の暗礁地帯ダークゾーン、変光星に重力異常。同盟の星の海は帝国に比べて荒々しい。建国二百年では、同盟領の安全な航路を探し出し、危険個所を多り出すのが限界だった。人類発祥の地である地球から、人類が宇宙へ漕ぎだしたのはおよそ千年前。古くから人間が進出していた帝国領よりも、跳躍ワープにしる通常航行にしる、技量と細心さが要求される。

ヤンが、フィッシャーの手腕に全幅の信頼を寄せ、深い敬意を捧げる理由である。彼が水先案内人であるかぎり、何千光年を航行しようとも、迷子になったり脱落艦が出たりすることはない。

ふむ。ヤンは頬づえをつけて、脱いだベレーを右手でくるくると回した。イゼルローンからは、帝国首都オーデインの方が同盟首都ハイネセンの倍の距離にある。だが、所要日数は倍までは違わない。両国の戦艦の性能はほぼ互角だが、同盟宙域の方が跳躍や通常航行の難易度が高いからだ。フィッシャーは第13艦隊設立当時、寄せ集めの集団を見事に運用してくれたものだった。

たしかに、フェザーンは同盟領の航路図のデータを所持している。だが、それは商船用の航路が中心だ。軍事基地のデータも無論あるが、商船と戦艦では通れるルートも異なる場合がある。ローエングラム公ラインハルトは、戦略の天才である。その程度の差異は、たちどころに見抜き、解析を怠らないだろう。

だが、航路外の領域大についてはどうか。同盟で生まれ育ち、専門の教育を受けてさえ、ベテランと二十代後半附ではその知識に歴然たる差があった。帝国に生まれ育った者は、ベテランであってもデータだけでは把握をしきれまい。

「もっとハンデが欲しいところだよなあ」

それでもまだ、地の利のすべてを明け渡すことにはならないだろう。ハイネセンたちの命で購われた航路図。およそ、三千光年にわたって広がる星の海と惑星という島々。それを知り尽くした練達の水先案内人。

ヤンが、帝国軍にもフェザンにも勝ると確信する宝だった。もう一度、髪をかき回してからベレーをかぶり直し、机のコンピュータを不器用な手つきで操作する。司令官より副司令官への、極秘作戦会議の依頼だった。

それから、慌ただしく決裁のサインの記入を始めた。宿題が山積しては、悪だくみをする余裕もない。遠くのローエングラム公よりも、すぐそばにいる事務監のほうが目に見える脅威であった。ユリアンがフェザンに行つてから、オルタンス夫人に夕食をご馳走になる機会が増え、胃袋も握られている状態だ。おいしいご飯をいただける恩というのは、至上のものだとヤンは思う。ますます、マダム・キャゼルヌのご亭主に頭が上がりません。

ヤンは黒い瞳を瞬かせた。思惟しゐいの表面に弾ける水泡がまた一つ。サインの手を止めず、それについても考え始めた。

——星を墜とす。その方法を。

## Lonliness March

熟田津にきたに 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

ヤンからの会合通知を自端末で確認したフィッシャーは、わずかに首を傾げた。面倒くさがりで、コンピュータの操作が不得意だという司令官は、こういった通信は副官任せにしてある。だが、この司令はヤンの端末とIDで行ったものだ。つまり、他言無用ということだった。

ヤンは、組織運営の調整役としても非凡な手腕を持っている。自分の不得意分野を得意な者に任せるのだが、これは他者の力量を見抜くのに長けているのだ。一方で、任せた相手がそれを抱え込まないように、上手にサポート役を買って出たり、あるいはまた違う者と結びつけたりもする。自分が相談すべき相手を選ぶのも的確だった。ムライ参謀長が言うように、人使いがうまいのも才能なのだろう。

参謀長と副参謀長の人事の妙など、まさにそれであった。年長者の規律への厳し

さを重視しつつ、朗らかで説明上手なクッション役を挟んで、奔放な若手連中にも納得しやすい状態にしている。

メルカッツ提督らを受け入れる際にも、同盟軍屈指の軍官僚キャゼルヌ事務監と、亡命の先輩格のシェーンコップ少将とのトリオであたっている。どれも、相手を尊重して敬意を持っていることがわかり、下の者たちは自ずとそれに倣う。

先日のガイエスブルク要塞で、シェーンコップ少将とメルカッツ提督が果たした役割は大きく、功績は目覚ましいものだったから、やれ亡命者という色眼鏡で見られる者は少なくなった。亡国の宿将と副官が、名前ばかりご大層な銀河帝国正統政府に指名されて、イゼルローンを離れることになった時には惜しむ声が続えなかったものだった。

フィッシャーも彼らの離任を惜しんだ一人である。無口な彼の場合、大声を上げるようなことはしなかったが、それでも何とかならないものかと司令官に訴えたものだ。ライオネル・モートン少将の残留にも、ヤンと連名で陳情している。

確かに艦隊運用には自信がある。ヤンという、不世出の名將の指揮下においてそれに専念できるならいい。だが、分艦隊司令官として、攻撃指揮もしなくてはなら

ないというのは荷が重い。アッテンボロー提督に自分の分艦隊も任せたいところだが、彼はグエン提督の穴を埋めるために四苦八苦しているところだ。猛将の突進に慣れた連中を、ヤンの戦術思想に近いスタイルに仕立て直さなくてはならない。経験に裏打ちされた重厚な正統派の不在を、どうにかするための相談であろうか。自分ではあまり役に立てそうにないのだが。

こう思いながら、会合通知の出席を返信すると、ほとんど間をおかずに会合場所についての打診が来た。あまり人目につかず、かつ同盟全体の星域と航路が見られる戦術コンピュータのある場所がいいのだがと。フィッシャーはすこし考えてからこう返信した。イゼルローン要塞駐留艦隊司令官室はいかがでしょうか、と。

要塞司令官と兼任のヤンが、ほとんど使用していない部屋だ。要塞司令官執務室に不具合が出た際の予備として整備されたものだ。危機管理対策から生まれた、第七次イゼルローン攻略の落とし子のひとつである。

ヤンからは副司令官が使ってくれていいと申し渡されていたが、彼の方も宙港管制室を主な仕事場に使っていた。機器は同盟のものが入っているが、調度や什器の類は帝国時代のまま。絢爛豪華な貴族仕様で、居心地が悪いというか、真紅や黄金の

色調が目には優しくないと言おうか。とにかく使いづらいので放置されている、エアポケットのような部屋だった。

ヤンとフィッシュャーは、作戦会議の為に久々にそこに入室した。戦術コンピュータを起動させ、ヤンのリクエストが叶う状態であることを確認した。そして、顔を見合わせて溜息を吐く小市民が二人。

「それにしても、私には場違いな部屋だね」

「はい、小官もです。こういう環境で生活するのは骨が折れそうですね」

巨大な立体モニターの投影装置は、重厚なマホガニーと黄金で装飾されている。それを観覧するための椅子は、背中と尻が埋もれるほど柔らかなクッションの肘かけ椅子。黒檀と真紅のベルベットで作られたもので、床に固定されてもいないのに、ヤンを始めとする軽量級の面々では重くて動かせなかった。豪華な絨毯の毛足が長くて、引き摺りにくいせいでもある。

結局、要塞防御指揮官とその部下が配置を替えてくれた。軽々と持ち上げたブルームハルト少佐が言ったものだ。

「無理ですよ。この椅子、70キロ近くありますね。閣下よりも重たいですよ」

「そうだったんだ。持っただけでよくわかるもんだね。

それにしても、貴官は私の体重を知ってるのかい？」

「いや、そんなの白兵戦部隊の人間なら見りゃわかりますって」

ヤンはそろそろと背後を振り返った。複雑な表情のグリーンヒル大尉が佇んでいる。倍の時間を掛けて首を戻し、純朴な童顔の青年を諭したものであった。

「すごいね。でもブルームハルト少佐、それはあんまり口に出さない方がいいと思うな」

そして、それを毛ほども示さぬ、かの前連隊長をさすがだと感嘆したものである。そう言えば、現連隊長もそんなそぶりを見せていない。あの純情青年にも指導をしてやって欲しいものだ。

そんなことを思い出しながら、ヤンはフィッシャーに椅子を勧め、自分も傍らの椅子に腰かけた。そして、副司令官に対して、先日来の考察を話し始めた。

「私なりに、最近の帝国の情勢を考えてみたんだがね」

そして語ったのは、フェザーン回廊からの帝国軍の大侵攻の予測。それを邪魔されぬ為には、その前か同時にイゼルローンにも進攻を行うだろうと。この二つの回

廊の攻略は、帝国の双壁があたるだろうということも。

「この回廊攻略は、同盟領侵攻への初戦であると同時に、最大の難所でもあるからね。」

帝国の将帥の中で、最も力量のある人材を起用するだろう。他の人選は考えられない。

万が一にもローエングラム公が斃れるようなことがあってはならないしね」  
フィッツシャーは無言で頷いた。

「これは私の憶測だが、フェザーンをミッターマイヤー提督、イゼルローンはロイエンタール提督が攻略すると思うんだ。」

『疾風ウォルフ』の用兵を生かすには、ここは狭すぎる。

「あちらは、速攻して本星を抑えないと、必要なデータが手に入らない」  
「閣下、必要なデータとは、まさか……」

「同盟領の航路図。フェザーンの航宙管制センターにある真の宝さ」

「やはり……帝国は同盟国民が出発してきた所でしたから、文献もそれなりにありましたし、

亡命者からの情報もありました。このイゼルローンを陥落させた時に、更に大量のデータも入手できました。しかし、同盟からの逆亡命は絶対数が少なかった。

それに、同盟軍の艦船は降伏信号を発信すると、

星図データを自動破棄するシステムになっています」

「ああ、さしものフェザン商人だって、同盟の航路図は帝国に売らなかった。さすがに商人の仁義にもとるし、競争相手だって増える。

商品の供給源は同盟の方が高い割合だろう。

遺伝病や代謝異常の薬品なんか、ずいぶん吹っかけているらしいよ。

まあ商道徳はさておき、私の憶測が当たると、

こちらにはロイエンタール提督が来ることになる」

「厄介な相手ですな」

「まったくだよ。戦術という点では、ローエングラム公を凌ぐ名将だ。

知勇の均衡といい、冷静で広い視野といい。

帝国軍の将帥は、いずれ劣らぬ名将揃いだ、攻勢型が多いように思うんだ。

ローエンングラム公もそうだから、似たタイプが揃うのかな。

だが、彼は基本的には堅守型だ。こういう名將に粘られると、早々に決着はつかない」

深々と溜息をついて、行儀悪く片膝を立てるヤンだった。そういう司令官こそが、柔軟な防御を得意とする名將なのだが、似たようなタイプだけに想像がつかのだろう。フィッシャーも溜息を吐いた。

「先日の退却戦はそれは見事なものでしたからな」

ヤンも無言で頷いた。ブランドーとグラスを持ってくるべきだったと後悔しながら。

「こちらが帝国防戦に手一杯でいる内に、フェザーンを衝いてくると思うんだ。

そうなってしまふと、もうどうしようもない。

ヤン艦隊を除けば、第一、第五艦隊となんとかかき集めてあと一万、三万を越えれば上等だ。

相手は、ローエンングラム公と名だたる提督、概算で一ダースといったところだ。ここまで戦力差がつくと、名將も作戦もあつたもんじゃない。

これこそが戦略の天才たるゆえんだがね」

フィッシャーはあまり酒が強い方ではなく、司令部名物ブランデーリレーに普段は参加しない。だが、この時は一杯欲しくなってきた。素面じゃやってられんというヤンの気持ちがよくわかる。と同時に、疑問が湧いてきた。ここまでの話題は、分艦隊の指揮でもなく、ヤン艦隊全体の運用でもない。では、この黒髪の魔術師は、自分に何を求めているのか？

「閣下。小官へのお話とは何でしょうか」

「あんまり大きな声じゃ言えないし、私も自分のろくでもない考えが妄想ならいいと思っっている。」

だが、帝国がフェザーンから侵攻してきたら、同盟は戦略的には勝てない。

しかし、戦術的には勝つ手段は残されている」

静かな口調だった。フィッシャーは、司令官の学者のような顔を凝視した。

「とても正道とはいえない。ゲリラ戦術によるテロというのが正しい。」

ローエングラム公ラインハルトを狙い、彼を殺すことだ」

もはや言葉も出ない初老の提督を前に、息子のような年齢の司令官は淡々と言葉

を続けた。

「いくつも大前提があるんだがね。まずは、双壁に両回廊の攻略を成功させること。フェザーンの方は、ほっとけば成功するから考えなくてもいい。というよりも手が出せない。

問題はこっちだ。艦隊の損耗を極力減らし、イゼルローン要塞を脱出する。勝たせたことを、相手に悟らせないように。これ一つでも難題なんだがね」

「なぜなのか、お訊きしてもよろしいですか」

「ローエングラム公は、戦功によってここまで栄達してきた。

彼らの部下も同様だ。何千年も前の中国や日本みたいに、極端な軍事政権なのさ。現在もその筆頭たる双壁が、これ以上武勲を独占するのは望ましくない。

彼らが戦功をたてたら、次は他の提督を起用して武勲の均等化を図るだろう。

私がオーベルシュタイン上級大将ならそうするね」

先日の、エルウィン・ヨーゼフ二世の廃立とカザリン・ケートヘン一世即位の際、歴史論から見た女帝を語った人の言葉だ。喩えたとようもない凄味があった。

「彼ら双壁に比べれば、まだつけ入る隙がある。メルカッツ提督から伺ったが、

あの二人は、二十代で少将まで出世したホープなんだ。今の同盟よりずっと人材が多い中でね。

他の将帥はローエングラム公に付いたがゆえに、ここまで早く昇進した側面がある。

無論、同盟にいてくれれば、名将として敬われるだろうがね。

彼らにとっては、互いが競争相手でもある。ローエングラム公の寵に対しての」  
ここまで語ると、ヤンは立体モニターを起動させた。たどたどしい手つきで、同盟全体の星図を表示させる。そして、各所の軍事基地も。四十を超える光点が赤く輝き、同盟領の中央付近に夜の車道が出現した。

「この競争意識を利用するんだ。アスターテ会戦の逆だね。

どこに出没するかわからない私を、追い回してもらおうのさ。

こちらが各個撃破するために、相手をばらばらにするんだよ」

「それはどのようなさるのです」

「帝国逆進攻のさらに逆。敵陣深くに踏み込ませて、補給線を断ち切る。

そしてのらりくらりと逃げまくる。」

異郷にあって、空腹で、しかも同僚と出世争いをしなくちゃならない。

こんなに冷静になれない状況もそうそうないと思うが、どうかな」

ヤンは、悪いことをきわめて穏やかに言った。これは学生時代に、学年主席を破ったシミュレーションの戦法でもあった。

「こちらにはまだまだ地の利もあるだろう。それに、補給場所を知っているというのは大きい。

何人もの有能な将帥と戦って、私が勝ち続けるという非常に高いハードルがあるが、

そうだったらローエングラム公本人が出馬してくると考えられるんだ」  
フィッシャーの目が銀色の眉の下で大きくなった。

「帝国の中心人物がですか。そんな、まさか……」

「彼は私の意図を見抜くよ。そして、投げつけられた手袋を無視できるような性格ではない。

若くして成功を重ねてきた天才だからね。フリードリヒ四世の引き立てもあったにせよ、

昇進も非常に速かった。幼年学校を出たばかりで少尉、その五年後には元帥だよ。つまりまあ、せっかちだと思ふんだ。そして完璧主義者だ。

これは、顔や言動を見れば一目瞭然だがね」

フィッシャーは深く同意の頷きを返した。絶世の美貌は覇気に輝き、容貌の華麗さをさらに引き立てる。銀河帝国正統政府への弾劾の言葉の鋭さは、為人の苛烈ひととなりさを知るには充分だった。

「私は彼の完勝を何度か邪魔している。アスターテとアムリツツアで。さぞや目障りだろう。

武勲によって立った政権の長は、臣下の誰よりも武勲に優れていなくてはならない。

こういう意識は、ローエングラム公の中にあると思うよ。

彼は戦略の天才だし、戦術だって優れている。なによりも負けず嫌いだ。

同盟侵攻の一番手柄は双壁でしたってことになったら、今後の体制にも影響が出る。

部下の中から我こそはと彼の座を狙う者が出てくるかもしれない。

だから、ヤン・ウェンリーなる叛徒の首魁しゅかいを討ちとって、同盟征服を完璧にし、その権威を絶対のものにしようと考えてるんじゃないかとね」

アッシュビー提督と同じ表現なのは恐縮だけれどね、とヤンは肩を竦めて付け加えた。

「しかし、それでは閣下ご自身が、連戦を行うことになります。

ご自分が囮になられるとおっしゃるのですか」

「いやね、この憶測が当たったら、囮もなにも他にカードがない。

だから、貴官の知識と力量を最大限にあてにさせてもらいたいんだよ」

ヤンは、星図の赤い光点の群れを手で示した。

「この軍事基地を転々としながら、同盟領の星の海を味方と武器にしてね。

ドールトン事件の後で、貴官が言っていただろう。

恒星マズダクの他に、いくらでも難所はあったと。

帝国は、正規の航路以外の情報には、貴官ほどには詳しくない」

フィッシャーは、同盟領の星図を眺めやった。帝国側の二つの先端にイゼルローンとフェザーン。最深部にバークラト星系。要所要所の有人惑星。人口が十万人程度

のものから、十億人を抱えるハイネセンまで。帝国が、フェザン側から侵攻してくるといふ。一ダースの艦隊ということは少なくともその百倍の兵員だ。では、人員や物資を一時配置できる軍事基地が必要になる。イゼルローンから移動するにはあまりに遠い。フィッシャーの脳裏に、いくつか候補がピックアップされ始めた。「わかりました。閣下の仰ることを念頭において、小官もいろいろと考えてみましょう」

その言葉に、黒髪の司令官は軽く頭を下げた。

「ありがとう。よろしく頼むよ。だからフィッシャー少将、これは命令だ。」

この先、イゼルローンの攻略戦が起きてても、貴官は絶対に死なないでくれ。

そんなことになったら、私は両手を上げて降伏するしかなくなってしまう」

「閣下……」

それは、あくまでも帝国に抗うという意志の表明でもあった。

「以前のクーデターの際におっしゃいましたね。」

個人の自由と平等の前に国家など重要なものではないと。

それでも国家を、今のこの同盟を守るために戦いを選ばれるのですか」

衆愚政治と化した同盟政府。その操り人形である同盟軍の上層部。ヤンの予測が的中し、彼が構想する戦いの果てに、ローエングラム公と雌雄を決するというのなら、苦難などという表現さえ生易しい道が待つことになる。

フィッシャーの言葉に、ヤンは穏やかに笑った。

「そりゃあ、国民を守るために給料を貰っているんだからね。私は給料分の仕事はするつもりだよ」

下手な韜晦とうかいに眼差しを厳しくする部下に、頭をかいてつけ加える。

「それに、ヤン・ウェンリーは勝算のない戦いはしないのさ」

宇宙暦798年11月20日、戦艦ユリシーズがイゼルローン回廊に帝国軍の侵入を発見。オスカー・フォン・ロイエンタール上級大將を総指揮官とする三個艦隊、三万六千隻の襲来。ラグナロク神々の黄昏の訪れであった。

宇宙暦799年1月19日。約二ヶ月間の攻防戦の後、ヤン艦隊はイゼルローン要塞を脱出。同盟の永遠の夜に漕ぎ出す。青い恒星を墜とすための、孤独の連戦に。二百年前、ハイネセンらが自らの血で記した航路図の尊さを、帝国軍に知らしめよ。征服者たちよ、その価値を知り、その為に戦う者の意志を知れ。

ヤン・ウエンリーが、おびただ夥しい流血のインクで記した意志表明と、ある歴史家が評するバーミリオン会戦の開幕であった。

——ヤン艦隊日誌追補編 未来へのリンク 了——

---

わたの原 八十島かけて 漕ぎ出んと ひとには告げよ 天の釣り船



## 番外編

## Heads or Tails?

オリジナルのサブキャラクターが中心の話になります。ご注意ください。タイトルは、コインの裏表を当てるゲームより。

---

帝国軍が来襲し、ヤン司令官はイゼルローン要塞からの退避を決定した。計二百万人のヤン艦隊と要塞防御部、そして三百万人の民間人の輸送だった。

十年前、司令官が中尉であったときの、エル・ファシルの脱出行に比べれば、有能な味方は数多く、同盟軍最強の軍隊が同行している。士官学校卒から二年目にもできたことだ。貴官ならなると楽にできるさ。そう言ってキャゼル又要塞事務監は部下らを激励し、『箱舟作戦』は開幕した。ただし、当のご本人が発言内容に懐疑的な様子であったので、部下らは感動するどころではなかった。

「そんなわけないでしょう」

小声で毒づいたのは、アッシュブロンドの女性少佐だった。

「要塞の内部勤務者が五十万人以上もいるのに。

普段は船乗りじゃない人間を入れると同数以上よ。

なのに輸送船はかき集めて千五百隻。二千人ずつ詰め込んでも、各八十人は運用人員が要る。

十万人分は席が足りない、だから民間人を戦艦に同乗させるなんて、正気の沙汰じゃないわ。

病院船のマークに艀装ぎそうを変更しなきゃ。ドックの稼働ぎそうは間に合いそうかしら」

各部門への連絡役を担っている赤毛のブライス中尉は、普段よりもハスキーになった声で返答した。

「はい、現在補修に入っている戦艦から、順次表示塗装を行えるとの回答がありました。

何隻塗装を行えばいいかとのことです」

「そんなの、そっちで割り算しろと言っておやりなさい。

民間人十万人を、戦艦に搭乗させられる上限で！」

ドックからの返答を聞いた瞬間、素早く回線をオープンにしたので、中性的な金髪碧眼の美人の叱声しっせいは直接現場に響いた。すかさず、彼女は短く補足をした。

「とのことです。そちらで適宜対処してください」

そして、有無を言わず通信を切る。次の連絡が待っているのだから。

「こんなことなら、シェーンコップ少将がロイエンタール提督を

殺ってきてくれればよかったのに。ちよつと勿体ない美男子だったけれど。

アッシュフォード少佐、メディカルスタッフの配分の素案になります。

当然ですが、均等配置にはとても足りません。

傷病者と妊産婦、未就学児を含んだ家族を選別し、そちらに集中配置します」

黒髪黒目のチャベス大尉が、情人の働きぶりに苦情を言いつつ、リストを提出する。

「産婦と乳幼児、未就学児のリストアップは住民記録から完了済みです」

「そう、ありがとう。子ども達をまとめるのなら、本当はワクチンを投与しておきたいところね。」

一応冬だし、インフルエンザぐらいは」

育児休業から復帰したばかりの先輩の指摘に、彼女は自分のブロンズの額にぴしゃりと手をやった。

「ああ、思いつかなかったわ。どうしようかしら」

赤葡萄酒色の頭部を傾げたブライスが質問した。

「あの、一週間以内にワクチンを投与できましたとしますよね。

免疫ができるのに、どのくらいかかりますか？」

衛生兵の資格を持つ、チャベスは短く返答する。

「二週間」

それを聞いてアッシュフォードは考え込んだ。

「言い出しっぺの癖に申し訳ないけれど、やっぱり諦めましょう。

脱出の決行予定と避難先までの日程を考えると、道中では免疫が完成しない。

投与しないよりはましだけど、この労力は他に割くべきね。

感染症の簡易検査キットと治療薬を充分に補給するようにして。消毒液の類も

ね」

「了解しました。病院管理部門で在庫のチェックと発注に入ります」

敬礼してチャベスは踵を返した。長身でくつきりとした情熱的な美貌の彼女にも、疲労の色が濃い。まして、やや小柄でほっそりとしたブライスの方は、乳白色の頬に紫がかった隈が浮いている。なまじ、色白なだけに化粧でも隠しきれない状態で、瀕死の妖精といった状態が痛ましい。

だが、今は休むわけにも倒れるわけにもいかない。彼女たちよりも上位者は、第9次イゼルローン攻防戦の補給兵站到追われている。最上位者たる要塞司令官兼駐留艦隊司令官のヤン・ウェンリー大將は、この一月余り難局に立ち向かっていた。帝国の双壁の一方である、オスカー・フォン・ロイエンタール上級大將。知勇の均衡が、最高水準にある名將だ。グエン少將が戦死し、客員提督メルカツ中將を欠いた状態での艦隊戦。しかも、相手は三個艦隊で、こちらは一個艦隊だ。イゼルローン要塞という援護はあるにしろ、さすがは双壁、切札である雷神トゥールハンマーの槌を撃たせてくれるような甘い相手ではなかった。

戦いは膠着状態に入り、ロイエンタール提督はローエングラム公へ援軍の派遣を要請した。援軍を送った先は、イゼルローンではなかった。もう一方の回廊のある

惑星フェザーンを経由して、同盟領内に侵攻を開始した。

こうなつては、イゼルローンの戦略的価値は著しく下がる。砂時計のくびれの栓は、砂時計が縦に置かれていればこそだ。他の穴から砂が入り、横向きに置かれては意味がないのである。このため、ヤンはイゼルローンからの退避を決定した。その先輩であるキャゼル又事務監の指揮の下、五百万人が退避する『箱舟作戦』が開された。命名はキャゼル又少将。補給と事務の達人は、毒舌の弁ほどにはネーミングセンスがないようだった。

それは、要塞管理事務部門の苦闘の開幕でもあった。あちらに指示、そちらには物品の発注、はたまたこちらはその回答待ち。他にも兵士や下士官が、総出で当っている。多くが現場へと出向き、さまざまな準備に取り掛かっているところだ。

「まったく、ヤン提督はあの時どうやって乗り切ったのかしら。

こっちは要塞のおかげで物資も揃うし、軍人の家族相手だからお互いに割り切れる。

よっぽど、兵士や下士官をうまく使いこなしたのね」

アッシュフォードは目頭を揉みながら慨嘆した。青空を思わせる瞳の、雲の部分

が夕焼けに染まっている。後輩の若き中尉の目は、曇天どんてんの夕焼けに。限りなく美化して表現するならばだが。

「ぜひ、極意を教えていただきたいわ。そんなお時間なんてないでしょうけど」  
ブライスのほうは、力ない笑いをこぼした。

「同じ中尉の小官にやれと言われても無理ですからね」

「そんなの昇進後の階級の私だって同じ。やっぱり、あの人どこか違うわ。

部下にうまいこと指示してとりまとめるって、自分でやるより大変なのよね。

道理でグリーンヒル大尉だって惚れるはずよ」

「ええ、テレビによく登場なさっていましたものね。

ちよっと軍人ぽくなくって、可愛いってファンレターを送った同級生もいましたよ」

彼女は、話題にのぼった大尉の一歳下である。エル・ファシルの英雄は、老若男女に熱狂的に受け入れられたものだった。

「いえいえ、違うのよ。彼女、あの時にエル・ファシルにいたんですって。

その時に、サンドイッチとコーヒーを差し入れしたら、

コーヒーは嫌いだから紅茶の方がいいと言われたそうよ。

そこで惚れて、ここまで追っかけてきたみたい」

充血した灰色の眼と、口紅ルージュの発色が冴えない唇が、三つの円を形作る。そして、得心したようすで大きく頷いた。

「ああ、なるほど、それでようやくわかりました。

学校時代、グリーンヒル大尉は物凄くもてたんですよ。あんなに美人だし、成績は次席だし」

そして、父親は軍の高官であったし。これは言わずと知れたことだった。もう口にはできないことになってしまったが。

「そりゃ、そうでしょうね。私が男なら駄目もとで誘いをかけるわよ」

「でも、決して靡なびかぬ高嶺に生えた氷の花と呼ばれていました。

好きな人がいるからって、誰からの誘いも一刀両断でした。

皆、誰だろうと思っていきましたけど、ヤン提督がそうだったんですね」

二人は顔を見合わせた。

「凄いわ」

「ええ、もう天晴れと言うしかありません」

「あらあら、何が凄いですって？」

そこに戻ってきたチャベスが、先輩と後輩の言葉に反応した。

「グリーンヒル大尉の純情のことよ」

アッシュフォードの言葉に、恋多き黒髪の美女は鼻を鳴らした。

「純情は結構ですけど、もう焦れったくてたまらないですよ。

そんなに好きならさっさとモノにしちゃえばいいのに。

なんでいつまでも暢気に散歩してたのかしら。

はつきりと、シーツの海に二人でダイブしろと言ってやればよかった」

腕組みをしよう健康診断の担当者に、もう一人の独身者は頬を赤らめた。

「ええと、それはちょっと……」

「それとも、二人で励む夜のエクササイズのほうが品がよかったかなあ」

「あの、そっちはもっと」

「だめだめ、あなたね、それを事務監の前で言えるわけ？」

ドーソン大将のところへ異動になっても知らないわよ」

嫁入り前の娘が言い出しかねているので、既婚者がばっさりと駄目出しをした。

「あ、それは困ります。前言撤回ということでは」

チャベスは、慌てて体の前で両方の手を振り、お断りの仕草をした。

「それに、世の中あなたとあの二人の彼氏みたいなケダモノばかりじゃないのよ。彼女はお嬢様だし、彼は紳士なんだから」

だが恋のハンター、黒き牝豹はなおも不服そうであった。

「あの美少年がフェザーンに行つて、ようやく本当の独身に戻つたのに。

その後一月あつたのに、何をやってんのかしら、あの娘こつてば」

「彼女にしてみたなら、ここまで十年も費やしているんだから。

そんな短兵急な真似、できるわけでもないでしょう。二人とも立場が立場だしね。

あのオッドアイの美男子は、帝国の双璧だそうだけれど、

うちの司令官は同盟の至宝よ。悲しいことにね」

二人の後輩は無言になった。十年前がなりたての中尉で、今は大将。常識外れも  
いいところ、単純計算で一年で一階級昇進していることになる。彼の同期の多く

は、まだ少佐か中佐だ。果たして、その何割が生存していることだろうか。アムリッツアの会戦の傷は、致命傷の一手手前であったが、その後の救国軍事会議によるクーデターが決定打だった。同盟軍は、もはや死に体と言っている。

「ですが、そろそろグリーンヒル大尉も我慢の限界じゃないでしょうか。

もしものことを思えば、告白ぐらいはしておかないと。

好きですと伝えるぐらい、罰は当たらないと思うんです」

「こちらは何と可憐な言葉であらうか。

「ふうん、じゃあ私と賭けない？」

「あなたはグリーンヒル大尉からの告白。私もそっちに賭けるわ」

「要するに私にも一口噛めということなんでしょうね。ヤン提督からの告白の方に。やはり、容姿と性格は密接な関係にあるのかしら。そんなことを思いつつ、アッシュフォードは、牝豹と妖精を交互に見比べてしまった。

「なんですか、アッシュフォード少佐。何か小官の顔に付いていますか」

「ええと、言うなれば人生の汚れかしらね」

「何それひどいわ」

黒髪の後輩の抗議を聞き流し、灰金髪先輩の先輩は司令官に賭け金を投じることにした。

「仕方がないわね。では私はヤン提督に賭けましょ。じゃないと賭けにならないもの」

「さっすが、アメリカ先輩。では、一律に十ディナールということぞ」

「盛り上がっているところに済まんが、勤務時間中の賭け事はやめておけ」

三人の女性士官らは、司令部との打ち合わせから戻ってきたキャゼルヌの声にびくりとした。立ち直ったのが早いのは、階級の差か、年の功か。アッシュフォードがにこやかに挨拶を返した。

「ああ、キャゼルヌ事務監、お疲れさまでした。

ただ、お言葉を返すようですが、もうここに詰めて二回日付変更線を越えました。超過勤務中ですので、大目にみていただけませんか」

普段、冷静な部下までちよつと変になっている。キャゼルヌは溜息を吐いて、彼女らに申し渡した。

「おいおい、疲れたんなら交代でタンクベッドを使用してこい。

徹夜続きの変な高揚感で突き進むと、後でえらい事になるからな」

同じことを先ほど司令官に言ったばかりだ。あの後輩は、茶ばかり飲んで固形物に手をつけなくなる悪癖がある。茶を割るためのブランデーが、唯一のエネルギー源になるので痩せもするだろう。

「ああ、ありがとうございます」

「で、ヤン司令官に何を賭けたんだ」

さすが、ヤン・ウェンリーの先輩というか保護者。地獄耳でいらっしやる。

「どちらがどちらに愛を告げるかです。告げなければ不成立ということだ」

「おまえさんが司令官に賭けたということは、そっちの二人は相手側に賭けたわけだな」

階級が遥か上の上官に問い詰められて、赤毛のほうは言葉もなく頷くことしかできない。黒髪の方も、気まり悪げに答えたものだった。

「はい、まあそういうことになりましたね」

キャゼル又は、薄茶色の髪をかき上げてから、顎をさすった。伸び始めた無精ひげが手にざらつく。こんな若い女性に、甲斐性に疑問符を付けられるだなんて、魔

術師だの奇蹟だのという形容詞が泣こうというものだ。

「ふん、じゃあ俺もヤン司令官に賭けよう。」

二対二、これなら公平だろうよ。俺は二十にしておくか」

「やった！ その言葉をお忘れにならないでくださいね」

「ああ、チャベス大尉、貴官こそ忘れるなよ。それからブライス中尉もな。」

だがまあ、それも生き延びてこそだ。そのためにも一人まとめて一時間も寝てこい」

名指しされた二人は歓声を挙げ、敬礼もそこそこに飛びだして行った。まったく、尉官わかいものはこれだから。残された佐官は、肩を竦めて上官に聞いた。

「あら、小官はどうすればいいんですか」

「俺は嫁入り前の娘には優しくする主義だ」

空色の瞳が、不穏な輝きを放って上官を見据えた。それに軽く両手を挙げて続ける。

「だが、山の神にはもっと謙へりくだる主義なんぞな。」

あいつらが戻ってきたら、タンクベッドを使用して、一旦自宅に戻れ。

子どもの様子を見てこいよ」

子煩悩な愛妻家の発言に、一児の母は表情を緩めた。

「閣下の温情には心から感謝いたしますわ」

「やれやれ、貴官も結構現金なもんだな。」

それにまあ、ヤン司令官に賭けた勇氣に敬意を表してな」

一番親しい相手からの情報がこれである。

「実際のところ、司令官の先輩からご覧になっていかがなんですか」

返答は、無言で肩を竦めて両手を広げた動作であった。インサイダー取引もなにも、皆目見当がつかないということだった。

「では生き延びて、願わくば賭け金を徴収しないといけませんね。」

我々も、賭けの対象者も一緒に」

「ああ、そのとおりだな」

キャゼルヌの相槌に、アッシュフォードは美しい笑みを浮かべた。

「そのために、こちらの決裁もお願いいたしますね」

机上に、重低音と共に置かれた書類。その重さはキロの単位があった。キャゼル

ヌの戦いも、まだ始まったばかりである。

## Rose Color

イゼルローン要塞から退避し、フェザーンから侵攻する帝国軍に抗戦する。おそらく、同盟軍宇宙艦隊主力との合流は間に合わないであろうが、ならばヤン艦隊だけでも。同盟の星の海と、点在する軍事基地を利用し、帝国軍を分散させ遊撃を行う。

このヤンの構想を聞いて、シェーンコップは形のよい眉と口の端の片方を上げたものだった。灰褐色の髪を、実に決まった動作でかきあげながら、司令官に皮肉を漏らした。

「おや、以前小官が申し上げたときには、そんな仮定は無意味とおっしゃったはずですが、

それをおやりになるといふことですか」

言われたほうは、黒い瞳をぱちくりさせた。全く心当たりがないという様子だった。

「いや、すまないが何のことだろう」

「昨年四月に小官が申し上げたでしょう。

あの金髪の坊やと一対一で戦えば、多分閣下が勝つと見ているとね。

そう小官が言ったときには、あんなつれない台詞を言ったくせに、

今になって戦術で戦略をひっくり返す気になりましたか」

「え、ああ、私はそんな事を言ったのか。それにしても貴官も記憶力がいいものだ」  
決まり悪げに黒髪をかき混ぜる三歳下の上官は、相変わらず年齢より若く見えた。最初に彼の下に配属された時から二年あまり。その間に、イゼルローンの無血攻略に始まり、ガイエスブルク要塞の来襲まで、転戦を重ねてなおも不敗である。その苦労は、シェーンコップには推し量りがたいものだったが、一向に容姿に反映されていない。

帝国の双壁の一人、オスカー・フォン・ロイエンタール上級大将を相手に、この二ヶ月というもの善戦を続けている。あちらは三個艦隊、こちらは一個艦隊。イゼルローン要塞があるとはいえ、ヤン・ウェンリーはたったの一人である。

艦隊運用の名人のフィッシャー、若いながらも才覚あるアッテンボローの両少将といえども、宇宙屈指の名将の相手は荷が重い。おまけに、あちらはイゼルローン

要塞のハード上の限界を知り抜いている。同盟軍の六回の攻略で蓄積された、艦隊運動まで取り入れられていて全く付け入る隙がない。むろん、ヤンの方もこれらの情報の分析を怠ってはいない。戦況は完全に膠着した。

情人らに言われるまでもなく、強襲揚陸艦であちらの旗艦に乗り込んだ時に、あの金銀妖瞳ペルシヤの首を刈ってくるべきであった。シェーンコップは臍はぜを噛んだ。今にして思えば、あれは唯一の好機ではなかっただろうか。

「いや、そんな高尚なもんじゃない。身も蓋もないことを言うが、最後に勝つのは数の暴力だ」

「底もない発言ですな」

「もう他に表現のしようもないからね。こちらは一個、あちらは一ダース。

固まってぶつかるところで、絶対に勝てやしないさ」

「相変わらず、正直でいらっしやいますな。

こういう時は、もう少しぐらい言葉飾られた方がよろしい。

閣下にそんな話を聞かされたら、皆絶望しますよ。

あなたを生贄にして、帝国軍に助命を嘆願する輩が出てきたらどうします？

小官がそうしないと信用しておいでですか」

偽悪的な言葉を口にする灰褐色の瞳を、頭半分下から見上げる黒瞳。丸くなっていたそれが、ふっと細められた。

「心配してくれてありがとう、シェーンコップ少将。

貴官に言われるまで、そんなことは考えもしなかったよ」

美丈夫は灰褐色の髪を後頭部に向けてかきあげた。随分と念入りに。そんなことをしなくても、彼の髪型にはいつも隙はないのだが。ややあって、シェーンコップは敗北宣言をした。

「まったく、あなたには勝てませんよ。『不敗のヤン』というのも本当だ」  
「負けずに済んでいるだけだがね。まあ、これは戦略でも戦術でもない。

要は、誇り高き帝国軍の将帥たちを鬼ごっこに誘っているようなものだ。  
ばらばらになったところで、一対一の喧嘩に移行するわけなんだがね。

だが、一対一ならば、勝算はあると私は見ている。

結果としては、貴官の言うとおりになってしまうのかな」

不本意そうに首を捻るヤンだった。

「閣下は、あちらが乗ってくると思いますか」

「乗ってもらおうようにするしかないね。まあ、彼らは私達とは違う。

我々は国民の生命や財産、権利を守るための軍隊だ。

あちらの軍は、皇帝陛下のためにある。

カザリン・ケートヘン一世という、可哀想な赤ん坊ではなく、

近い将来の皇帝カイザーラインハルトのための軍だよ」

静かな口調だった。

「戦略的に見れば、たったの一個艦隊なんて放置していい。

だが、彼らは皇帝陛下のためには、玉砕を厭わないメンタリティーの持ち主だよ。

第七次攻略戦のイゼルローン駐留艦隊司令官のように。

まして、あの華麗極まりない天才は、限りなくロマンティシズムと忠誠心をかき  
たてる。

なによりも、将帥らが単独で武勲を立てるチャンスだ。そう思わせるんだ」

フェザン回廊から侵攻する帝国軍本体と、同盟軍主力艦隊が激突しても、同盟  
軍に待っているのは敗北だ。ヤンの概算では戦力差は四倍。いかにビュコック提督

が老練な名将であっても、この数の暴力の前にはどうしようもない。

恐らく早々に決着がつく。そして、武勲を充分に立てていない将帥が、勝利を求めらるだろう。あのガイエスブルク要塞の襲来と同様に。

その時に、ヤン・ウエンリーの名は魅力的に響くだろう。同盟軍史上最高の智将。アスターテとアムリッツアの会戦で、ローエングラム公に完勝を許さなかった『不敗のヤン』。イゼルローンを味方の無血で攻略し、ガイエスブルク要塞を完膚なきまでに破壊した『奇蹟の魔術師』。

彼を補殺すべく、襲いかかってくる幾つもの艦隊に、勝ち続けることが要求される。そして、痺れを切らせた金髪の坊やの出馬を促す。険しい、険しすぎる道程だった。

「閣下、そこまで政府に忠誠を尽くすおつもりですか」

「公僕って言うのはそういうものじゃないか」

灰褐色の眼差しが険しくなった。こちらの方は、副司令官のように納得してくれないようだ。

「民主共和制の美点を一つ挙げるなら、私は思想の自由だと思う。」

そういえば、三つの赤ドライロッドだったかな。薔薇ローゼンリッターの騎士のエンブレムは真紅だね。

人生は薔薇色って言ったりするが、貴官にとつての薔薇も真紅かい？」  
面喰った表情の美丈夫に、ヤンは薔薇の色を挙げ始めた。

「私にとつての薔薇色は、青みがかった濃いピンクかな。

真紅という人も、薄桃色だという人もいるだろう。

人によっては、白や黄色、紫色と言うかもしれないね。

だが、薔薇の色という点では皆が正しいだろう。

様々な薔薇色の中で、一番支持を集めたものが代表になる。

白や黄色でも、理があれば薔薇色として認められるだろう」

「白や黄色も薔薇の色、ですか。確かに花屋には売っておりますが、

白はともかく黄色は、女性へのプレゼントにはお勧めできませんね」

「そりゃまたどうして？」

「黄色い薔薇の花言葉は、嫉妬に薄れた愛。

小ぶりのものは特によくありません」

黒い頭が傾げられ、飛びまわる疑問符が見えてきそうな表情になる。

「笑顔で別れましようという意味ですよ。」

閣下もプレゼントにする際には、注意をなさることですな」

流星の色事師の発言に、ヤンは髪をかきまわした。無論、帝国内の細やかな情報は彼らの知るところではない。双壁の片割れのロマンスについても同様だ。もしも、彼の夫人の度量を知っていたら、シェーンコップの口調は一般論を述べるものよりも、さらに辛口だったことだろう。

「いや、貴官がもてる理由がよくわかったよ。」

花言葉はおいでしておくが、たとえば、黄色の薔薇を選んでしまつて、

よろしくなければ次の機会には選ばない。それが選挙のシステムさ。

権力に期限を設けて、駄目ならそこで終わりというね。

専制政治よりも権力のスパンがずっと短い。

だから長期的事業には向かないんだが、反面いつでもノーと言える。

だが、専制君主にナインと言ったら大逆罪になってしまう」

ヤンは吐息をついた。

「そこが、恐ろしいんだよ。間違つていても、君主自身にしか正すことができない

のがね。

ルドルフにそれは違うと言った者は、一族郎党が処刑台に送られた。

大逆罪の拡大適用、それが40億人を殺したんだ。

どうしてそんなことになってしまったのかと、子どもだった私は疑問に思った。父に聞いてみたら、人民が楽をしたがったからだと答えてくれた」

「楽をしたがった、ですか」

「そう。面倒なことを引き受けてくれる超人にね。父の答えが正解かどうかはわからない。

でも、政治を他人任せにした罰が、圧政や刑死ではわりに合わないと思ったよ」  
「まったく同感ですな」

「だが、当時は三千億人、現在だって四百億人だ。一人分は軽くても、その四百億倍だよ。

人ひとりの精神の背骨をへし折り、あらぬかたへよろめかせるには充分な重さではないかな」

薔薇の騎士連隊の連隊長として、二千人の隊員らを指揮した。ガイエスブルクの

来襲の際には、要塞防御指揮官として、その二十倍の人数を動かすことになった。自分の判断に、部下と民間人三百万人の命がかかっている重み。

司令官代理たるキャゼルヌ、正副参謀長のムライとパトリチェフ、分艦隊を預かるフィッシャーとアッテンボロー、戦死したグエン。そして客員提督のメルカッツ。空戦隊の面々と、魔術師の弟子の少年。彼らがいて、彼らにとっては自分がいだからこそ、ヤンの不在を乗り切れたのだ。

あの緊張の一万倍の重圧か。確かに一人の人間に支えきれるものではない。それに、そいつの好みの色だけが薔薇と認められるのは楽しくない。薔薇の色も、真紅と純白では意味する花言葉は違う。

「確かにね」

「歴史にもしよはないのと同様、未来を恐れても仕方がないけどね。

私が目的を果たしたら、それは起こらない。

私が負けたら、先の事は私にとっては関係がなくなる」

「だから、そういうことをおっしゃるものではありません。

こういう時は、言葉を飾りなさい。私は勝つぐらい言うものですよ」

自分に対してもあまりに客観的な上官に、シェーンコップは発破をかけた。

「だが、貴官は私の欺瞞ぎまんなんぞ見抜くじゃないか」

こともなげに返された言葉に、シェーンコップは心中で白旗を掲げた。この人には完敗だ。それを知ってか知らずか、魔術師は黒い髪をかき回した。

「じゃあこう言うことにしておこうか。」

私は勝てない戦いはしないし、勝つための算段はする。

計算違いはつきものだがね。このぐらいで勘弁してもらえないか」

「三つ目は余分ですな。他人に聞かせるなら削除をなさい。だがまあ、よしとしまししょう」

「そいつはどうも。」

ところでシェーンコップ、先ほどの言い方だと白い薔薇は女性に贈ってもいいのかな」

「まずくはありませんが、使い方が難しいですな。愛の告白なら赤が基本でかつ無難です。」

情熱とあなたを愛しているという意味ですし、真紅の薔薇の花束を貰って、

嬉しく思わない女性はまずおりませんからな」

「へえ、まあ参考にさせてもらおうか」

こう言った上官に、シャーンコップは片眉を上げた。ほう、それはそれは。先ほどとは違う角度で口の端を持ちあげると、朴念仁の鈍感にもう一つアドバイスした。

「ちなみに白薔薇の花言葉は尊敬と清純。そして、私はあなたにふさわしい。

ですから花嫁のブーケに使うのです」

「本当に君は博識だね」

「このぐらいは男としての嗜みですよ」

こともなげに言う美丈夫に、ヤンは両手を上げて降参の意を示した。頭半分は上にある灰褐色に、再び視線を向けて質問する。

「では、君にとっての薔薇の色は何色かな」

「贈る相手によって違ふと申しておきますよ」

「なるほど、そういう意見もあるか」

「喜ばれるものでなくては意味がない。そして趣味の押し付けは喧嘩の元です」

頷く上官に、シャーンコップはそう続けた。美女には赤で愛の告白を。友人の妻

にはピンクで貞淑に賞賛を。そして不世出の名将には白で尊敬を。

とりどりの色から選べるのが、民主共和制だというのなら、たしかにその点は勝っている。すべてのシチュエーションを黄色だけで乗りきれ、と言われると非常に困るではないか。それが皇帝陛下のお好みだから、という世界ではきつと生きてはいけないだろう。

「なるほどね。ローエングラム公に貴官からも言ってやってほしいな」

「機会があればそうすることにしましょう」

「そのために、まずは要塞防御部の人員を上手に艦艇に移乗させなくてはならない。リストはできているから、部門ごとにタイムテーブルを作って行動を開始してくれ」

「了解しました」

平凡な青年から、名将に変貌した司令官に、シェーンコップは心から敬礼をした。そして、自分の役割を果たすために行動を開始する。己が薔薇の色を心に抱いて。

ミッターマイヤー氏と彼のファンには誠に申し訳ない。

## 命の水——ウイスケ・ベサ——

お酒は二十歳をすぎてから

ヤンは基本的に神なんて信じていない。だが、ローエングラム公を見てみると、神の存在を思わざるを得ないことがある。神の寵愛を一身に受けているような輝かしい青年。知<sup>ア</sup>と戦<sup>テ</sup>の神、美<sup>ナ</sup>の神、そして多分、運命<sup>モイ</sup>の女神<sup>ライ</sup>にも愛されているのだろう。

だが、ヤンはひとりの神の存在は知っているし、信じてもいる。歴史学を愛する者は、彼の信徒になってしまふのかもしれない。

時を守護する神、クロノスだ。誰も愛することなく、誰をも信じない無慈悲な神。父を追い落とし、自分も同じ目に遭う事を恐れ、わが子達ですら飲み込んだ虚無の神。残酷さのあまり妻と末子に叛かれ、主神から転落したが、彼を殺すことはできなかつた。だから今も時は流れ、この世に永遠不変のものはない。

わが子でさえ飲み込む時が、どうして人間に寵愛など与えようか。人は変わっていく生き物だ。赤ん坊は少年になり、青年から徐々に死へと向かっていく。心も同じく年を取る。誰だって我が子が一番可愛い。そうなった時に、臣下への態度はどうなるか。

更に時計が進み、自分に残された時間に応じて、だんだんと待つことが難しくなっていく。明日があると思えなくなるから、今にこだわるようになる。

若い頃の名君が、後年に暗君や暴君になることなど、歴史上珍しくもないことだ。最初から最期まで名君であり続けた人間のほうこそ、ダイヤモンドのように希少な存在なのである。

一人の人間であってもそうなのだ。ローエングラム公は鳶とんびから生まれた有翼獅子グリフオンだろう。では、有翼獅子の子は有翼獅子か？ 孫ひまごに曾孫やしやご、玄孫やしやごに至るまで？

そんなことはありえない。世にあふれる凡百、蛙だからこそ蛙の子になる。いずれは蛙になるのが当然、場合によっては蛇や蠍が生まれるかもしれない。流血帝アウグスト、痴愚帝ジギスムントのように。

そうなったとき、誰も君主に否と言えない。冠絶した天才であっても、無謬むびやうでは

ない。そして、時の残酷さから逃れる術はない。次から次へと手を打ってくる、その精神的、肉体的な精力が年とともに変わらなずにいられるか。もう疲れた、面倒だと放り出したところで、誰にも肩代わりはできないのだ。

それが専制君主の責務。誰にも縫れず、皆に対して公平であること。愛する唯一を持つことはできない。名君たろうとするなら。

そしてそれを貫き通さなくてはならない。死が訪れるまで。その孤独をあの人材は知っているのだろうか。親友を亡くしたことさえ、まだ救いだったと思うような道程だ。

こんな皮算用をしても本来は意味がない。ヤンが勝ち、彼が死ねば実現しない。彼が勝ち、ヤンが死ねば、ヤンには関係ない。そう、自分だけのことならばいい。ヤンの被保護者のユリアン、キャゼルヌ家の二人の令嬢。そして同盟の大勢の子どもたち。彼らには、なんの責任も罪もない。これは大人としての義務だ。

もしもローエングラム公を斃たおしたら、帝国はまたも内乱状態となるだろう。せつかく生活が向上した平民の多くに犠牲が出るかもしれない。ヤン・ウェンリーは、戦場にあつては何千万もの将兵を殺し、帝国にあつては、230億人の民衆の敵だ

と評されることになるに違いない。

そして、第二のルドルフとなってしまうことがあるかもしれない。いやいや始めた軍人だけれど、たったの十年で大將になってしまったではないか。こんなことアッシュビー提督の調査中に、想像だにしていなかったが。

未来は誰も知らず、だから人は生きていける。いつか終わりが来ることを知ら、命はこんなにも尊い。その尊きものを刈る、大鎌を持つ死神。その原型もクロノスだったか。

ヤンも彼の御手の一つ。あの白磁と黄金と蒼氷色のダイヤモンドで造られたような首を、この手が刈り取るのだろうか。

ヤンはベレーを脱ぐと、髪を乱雑にかき混ぜた。これもまた皮算用の一つか。この一か月半、ヤンを悩ませているあの金銀妖瞳オウゴンギョウコンの名將をどうにかしないと、おちおち夜逃げもできやしない。それに、あの形のいい白い手が、自分の首を獲るかもしれないのだ。いや、そっちの可能性のほうが高いか、やっぱり。

「やれやれ」

「大丈夫ですか、ヤン司令官。ずいぶんお疲れのようですね」

溜息を吐いたヤンに、朗らかで朗々とした声が語りかけてきた。

「ああ、ありがとうパトリチェフ准将」

「一杯いかがです。アイリッシュコーヒー」

「コーヒーは苦手なんだ」

上官のおきまりの返答に、陽気な巨漢は笑みを浮かべて言い添えた。

「のコーヒー抜きですよ」

「ありがたいただくよ」

ヤンは速やかに前言を翻した。ウイスキーのお湯割りが、紙コップの中で麗しい琥珀色にたゆたっている。薫り高い湯気に鼻腔をくすぐられながら、一口味わった。

命いのちの水。語源となった名前をつけた人々の慧眼に、敬意を払いながら。

「何を考えておいででしたか」

「まあ、いろいろだね。あの天才をどうしようなんて、大それたことなのかなと」

「なるほど、小官なんぞ根が単純ですから、そんなこと考えもしませんでした。」

閣下、お宅に押し入った強盗が、絶世の美青年の天才だったらどうしますか？」

ヤンは目を睜ってから、瞬きをした。

「……警察を呼ぶね」

ヤンの言葉に、パトリチェフは大きく頷いた。

「ええ、小官もですよ」

「貴官なら自分で片付けたほうが早そうだなあ」

「でも、それだと後がややこしいことになるじゃありませんか。

さっさと警察を呼んで、あとは裁判所にお任せする。

でも、その警察がなかなかこないと困りますがねえ」

「そうだね。いや、まったく貴官こそが真の賢者だよ。

警察が来ないと、市民が水をまいて追っ払ったりしなくてはならなくなる」

しみじみしたヤンの口調に、副参謀長は首を捻った。

「実感のこもったお言葉ですなあ。経験がおありで？」

「ああ、憂国騎士団とやらに押し込まれたことがあるよ。

なかなか警察が来なくてね。確かにあれには困ったものさ」

「ムライ参謀長のお言葉ではありませんが、困ったもんですよね。

あちらさん、水まいたぐらいじゃ退散はしてくれなさそうだ」

「本当にそのとおりさ。壺が割れたぐらいじゃすまなくなる」

「壺ですか」

「ああ、父の形見のたった一つの本物だった。

二千年ぐらい前の、地球時代の真品。もったいなかったよなあ」

「いやあ、そいつはもったいない。

形あるものはいつかは壊れると言いますが、それにしたってねえ」

ヤンとパトリチエフは顔を見合わせ、手の中のものを呷あおった。もう少し濃いほうがヤンの好みだったが、口中に芳醇な味と香りを残し、喉から食道を絹のように滑り落ちていく。それが胃の中に納まると、体の芯に火が点る。

「だが、人命はもっと惜しむべきものだね。

本来は差をつけてはいけなのだろうが、やはり無辜むこの市民と強盗では優先順位が違うな」

「そのとおりですとも。さて、多少は顔色が良くなりましたな。

キャゼルヌ少将ではありませんが、ちょっとお寝みになった方がいいですよ」

「しかしね」

平時なら諸手を上げて昼寝にいく司令官が、パトリチェフの進言に洩る様子だった。

「ここまで一月半、こんな調子じゃありませんか。」

閣下が小一時間仮眠したところで、大きく戦況が動くとは思えませんよ」

「それもそうか。酔って寝ている間に死ねるなら、その方が楽だ」

縁起でもないことを言うヤンに、パトリチェフが陽気に請け負った。

「ご安心を。そんな状況になったら、いの一番に叩き起こして差し上げますとも。」

さあ、行った行った。さもないと小官が片手で担いでいきますからな」

ヤンは、パトリチェフの逞しい腕を見た。以前、駐留艦隊司令官室の重たい椅子を、司令部で唯一軽々と運んだ彼だ。ヤンの今の体重は、あの椅子よりも軽いだらう。

「うーん、今日のところはそっちは遠慮しておこう。」

お言葉に甘えて一時間ほど寝てくるよ。パトリチェフ副参謀長、よろしく頼む」

「ええ、お任せください。じゃあ、一時間だけです、どうぞごゆっくり」

ベレーを脱いで、机上に置くと、伸びとあくびを一つ。久しぶりに自然な眠気に誘われる。ウィスキーのおかげだ。

そして、脈絡のない思考の流れが、方向を整えようとしていた。無慈悲なクロノスは、公平な神でもある。時は万人に等しく流れる。ヤン艦隊が結成されたばかりのころ、『敗残兵と新兵の寄せ集め』を後輩はウィスキーやワインに喻えた。いい味がでるまで、まだまだ時間がかかると。

ローエングラム公は天才だ。彼の戦略は、勝ち易きに勝つという正攻法だ。精強の大軍を集めたリップシュタット戦役は瞬間に決着し、ガイエスブルク要塞を来襲させる余裕まであった。

ヤン艦隊は、ただの一個艦隊で四か所のクーデターの鎮定とドーリア星域の会戦に駆けずり回り、ガイエスブルクを退け、いま双壁の一人と戦っている。

これは時の錬磨ではないか？ ガイエスブルクに来襲したケンプ艦隊は、ヤンが撃滅した。その時の援軍の双壁はともかく、それ以外の将帥の艦隊はしばらく実戦から遠ざかっている。ヤン艦隊は、戦闘続きで苦くも大きな経験となったが、かれらにとっては空白だ。

なにより、リップシュタット戦役は迅速に片が付いた勝ち戦だった。そろそろ焦れてきてもいい頃だ。特に、前線の分艦隊指揮官あたり。負けた相手を追い回すのは得意だろうが、さてさて、こちらは貴族の皆様のように育ちと諦めはよくないぞ。ロイゼルローンで相手の三個艦隊を観察していると、練度の差異が見えてくる。ロイエンタール提督の本隊の巧緻さが飛び抜けているせいもあるが、比べると勘どころの差は大きい。提督の差というより個々の艦艇の動きが違う。本当にフィッシャー提督は宝だ。

ヤンは、もう一度あくびをしながら考えた。ちよつと寝て、アッテンボローの楽に勝てる案に朱を入れてみよう。グリーンヒル大尉も、安易にカンニングをさせるのは困ったもんだが、あいつの得意分野を生かすのは悪くない。

だが、もっと楽に、一人でも死者の少ない方法で。最適<sup>ベター</sup>な考えはきつとある。

完結の舌の根も乾かぬうちに、誠に申し訳ありません。

エピソードを追加しました。これが本当の完結になります。

# 銀河英雄伝説 ヤン艦隊日誌追補編

## 未来へのリンク

---

著者 白詰草

発行日 2019年4月9日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/3871/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。